

『南山神学』46号(2023年3月) pp.97-210.

## カトリック教会の祓魔式

田中 昇

### はじめに

私は、かつて大学・大学院で応用化学を学び、大手化学メーカーにエンジニアとして勤務した経験を持つ。実験室レベルから化学プラントの規模までの勤務・研究経験を持つ人間として、社会での科学技術の有用性を肌で実感しつつも、人間の真の幸せにとっては科学が万能ではないと神学校に行く前から感じていた。真の人間の救いは物的・靈的両面が伴って然るべきであろうとずっと考えていた。特に物的には富んでいる現代日本人にとって靈的な飢え渴き、特に混乱や深い苦悩というものとどのように向き合うべきなのかという問いは神学校時代の関心事であり続けた。そのような中で、私はカトリック教会が人々の靈的、精神的な救いのための古い伝統である祓魔式に関心を持つに至った。それゆえ私は決して心霊現象やオカルト的関心から祓魔式や悪魔・悪霊論に関心をもったわけではないことを明言しておきたい。

本稿は、私が神学生時代に現在の広島教区の白浜満司教の指導の下でまとめた神学科研究論文『カトリック教会の祓魔式に関する神学的考察』(ウルバノ大学の神学学士号(STB)取得の為の論文としても扱われた)を基に、その後のローマへの留学、司牧の経験、特に教会公認のエクソシストとしての実務経験をもとに書き改めたものである。

### 導入

1998年、教皇ヨハネ・パウロ2世は公会議後に改訂された『ローマ儀式書』(Rituale Romanum)の新しい盛儀の祓魔式(エクソシズム)の儀式書を承認し、

1999年に正式に典礼秘跡省より *De exorcismis et supplicationibus quibusdam* (『エクソシズムと関連する種々の祈り』)<sup>1</sup>として発行した。この儀式書の改訂は、第二バチカン公会議の典礼憲章に基づく『ローマ儀式書』の一連の改訂作業の最後のものとなった。

古来カトリック教会は、トリエント公会議において古代より受け継がれてきた聖職階位を、上位のものとして司祭、助祭、副助祭、さらに下位のものとして侍祭、読師、祓魔師、守門、合わせて7つの位階を承認してきた<sup>2</sup>。しかし、第2バチカン公会議後、助祭・司祭・司教のみが聖職者と呼ばれるよう改められ、教皇パウロ6世の自発教令『ミニステリア・クエダム *Ministeria quaedam*』(1972年8月15日)<sup>3</sup>により、下級の聖職階位を廃止し、かつての読師は「朗読奉仕者」、侍祭は「祭壇奉仕者」として残し秘跡的聖別を必要としない奉仕者とした。

こうして、かつての祓魔師は必要性がない限り特に任命されない職務となった。誤解されがちだが、ここで言われる祓魔師とは、盛儀の悪魔祓い(エクソシズム)をする所謂エクソシストとは異なる。かつての祓魔師の役務の内容は、上述したとおり、以前の司教儀式書『祓魔師の叙任式』<sup>4</sup>によく描き出されているように、主に洗礼式での悪霊から志願者の身を守るための式としての「小エクソシズム」において奉仕する役目を担うもので、性格こそ似てはいるものの盛儀のエクソシズムの儀式を執行するエクソシストとは区別される。セビリヤのイシドルスの『レウデフレドゥスへの手紙1』において、「祓魔師は悪魔祓いの言葉を記憶し、悪魔祓いの祭儀において手を悪魔に憑かれた者たちや求道者たちの上におかなければならない」<sup>5</sup>と説明されている。このように古い時代か

<sup>1</sup> *De Exorcismis et supplicationibus quibusdam*, Libreria editorice Vaticana, editio typica 1999, emendata 2004.

<sup>2</sup> DS1765『叙階の秘跡について』第2章参照(「トリエント公会議第23総会」1563年7月15日)。

<sup>3</sup> 教皇パウロ6世、使徒的書簡『ミニステリア・クエダム』(1972年8月15日)。

<sup>4</sup> 拙訳『ローマ典礼司教儀式書・祓魔師の叙任式』参照、原文は *Pontificalis Romani, De Ordinatione Exorcistarum, Venetiis MDCCXXIII. Apud Hæredes, Balleonios.*

<sup>5</sup> *Epistla I Ad Leudefredum*, PL, 83, 895 参照。

ら、洗礼の時にいわゆる小エクソシズムと呼ばれる祓魔式がおこなわれていたことがわかるが<sup>6</sup>、悪魔に憑かれた人のための祈りととの区別は必ずしも明瞭ではなかった点がある。時代が経つにつれて洗礼の小エクソシズムと盛儀のエクソシズムとは分けて行なわれるようになっていったようである。

このことは、現行の制度においては、司祭叙階を受けた全ての者は基本的にエクソシズムを執行する役割を持っているということにつながる。ただし現行の盛儀のエクソシズムについては、司祭叙階を受けている者が、教会法その他典礼規則に従って地区裁判権者の許可の下でのみ執行される必要がある。

盛儀のエクソシズムを行なう者という意味での祓魔師・エクソシストは、古代より現在に至るまで教会に継承されている使徒的役務の一つであることは確かである。エクソシズムは司祭個人ではなく先述のとおり主イエスからその権能を受けている教会の祈りにおいて悪霊を追い出す業であるといえる。つまり、これは主イエスの地上における御業に由来する聖なる職務の一つであって、決して個人の宗教的な行為でもなければ他の宗教儀式に由来する魔術のようなものと同一視できるものではない。なおエクソシズムはラテン教会のみならず東方カトリック教会、正教会、英国国教会においても現在まで継承されている儀式である。

さて、エクソシズムという言葉は日本ではよく悪魔祓いと訳されているが、そもそもエクソシズムの語源は悪魔祓いという意味ではない。エクソシズムは、「厳格に誓う、宣言する」という意味のギリシア語 *exorchizo* が語源と思われる。この宣言は、元来、古代教会から受け継がれている洗礼式の前の悪魔の拒絶と信仰宣言に由来している。それがラテン語に取り入れられ現在では *exorcizo* を「私は悪魔を追い出す」という意味として用いられている。新約聖書では、恐らくギリシア語の意味においてエクソシズムが捉えられている。つまり悪霊に取り憑かれた人、ないし悪霊の誘いを受ける人が、イエスにおいて神の絶対的な支配を認め、信仰を宣言するものと言える。

---

<sup>6</sup> 中世思想原典集成2『盛期ギリシア教父』（上智大学中世思想研究所編集訳、平凡社、1992年）p. 146 参照。

エクソシズムは、本来的には悪魔に苛まれる人の心と身体、その人の全体を神に向け直すことを教会が助けることによって救いをもたらすものであると云える。悪魔を意味するディアボロスという言葉の語源は、ギリシア語のディア・ボルム、即ち結びつきを解いて分裂させるという意味であるが、この儀式の中心は正にシュン・ボルム、即ち分かたれたもの、分裂したものを結び合わせることである。それは即ちこの語の訳語として良く知られている「信仰宣言」(symborum)<sup>7</sup>をすることでもある。

ところでエクソシズムは、カトリック教会の伝統的な準秘跡の典礼・儀式に属するものであるが、これをモチーフにした映画や出版物、マスコミなどの各業界でもてはやされ、そうしたイメージだけが独り歩きしている状況がある<sup>8</sup>。その反面、実際の儀式書の歴史的変遷や儀式の内容、意義などの情報に関しては、教会の側からの公式な説明が乏しいせいもあり、教会関係者ですら正しい認識を殆ど持っていないのが現状であろう。悪魔祓いという儀式そのものに関心や知識がないことを理由に、エクソシズムを単に古めかしく現代に必要な儀式であると一笑に付す人も多くいるであろうが、科学全盛の時代と言える20世紀以降の歴代教皇を始め、教会の公式の教えも、現実の生活における悪魔の働きそのものを実際に認めており、それを単に観念的、思弁的なものとしたり、あるいは現実的な悪魔の存在自体を認めず楽観的に片付けたりするといった態度を戒めている。

さらに現代においては、エクソシズムは精神医学的立場における解離性同一性障害<sup>9</sup>に対する対処法のようなものと捉えられる可能性も指摘されるだろう<sup>10</sup>。

---

<sup>7</sup> ラテン語規範版の『ミサ典礼書 *Missale Romanum*』において信仰宣言の箇所には *Symborum* という表記が用いられている。

<sup>8</sup> 映画『エクソシスト』(1973年、アメリカ)とそのシリーズ、『エクソシスト・トゥルーストリー』(2000年、アメリカ)、『エミリーローズ』(2004年アメリカ)等は悪魔祓いが主題になったものの代表的なヒット作である。

<sup>9</sup> 大宮司信『憑依の精神病理 -現代における憑依の臨床-』(星和書店、1993年) p. 94-95 参照。

<sup>10</sup> <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%82%AA%E9%AD%94%E6%89%95%E3%81%84> によると以前、精神科の治療の一環として悪魔祓いのようなことをおこなったことがあった。

解離性障害などの精神疾患は、人の精神の深いところで負った傷に由来する症状と考えられている。近現代の合理主義的思想が実利的、功利的であり、また短絡的なもので健全な精神を育てるのには如何に危険なものであるかは全体として精神的に病んでいる社会を見ればよくわかる。現代では魔術的な意味での悪魔祓いでなく広い意味でのエクソシズムそのものの有用性の幅は狭まるどころかむしろ広がっているようにも考えられる。

本稿は、聖書、教会公文書、典礼書から、カトリック教会における悪魔・悪霊についての教えを整理し、エクソシズムの儀式について典礼的、教会法的、司牧的側面から総合的に調査、考察を行い、その内容を明確化すると同時に現代的意義についても一定の考察することを目的とする。

## 第1章 カトリック教会の祓魔式の概観

### 前提

カトリック教会のカテキズムには盛儀のエクソシズム（祓魔式）の正確な概念が示されている。

「教会がイエス・キリストのみ名により、公に権威をもって、人または物を悪魔の影響から守り、その支配から助け出すことを要請する式をエクソシズム（祓魔式）という」（CCE1673）。

適法かつ正当なエクソシズムを行うためには次の4つの要素が必要とされる。まずエクソシズムは「教会の祈り」である。エクソシズムを行う主体は教会そのものであるということ。したがってエクソシスト（祓魔師）は教会の名において、教会を代表して行為することによって自らの声と仲介の業を教会に提供することになる。つまりエクソシズムの主役はエクソシストではなく、教会のかしらであり、その配偶者であるキリストである。

またエクソシズムは「公的な祈り」である。つまり教会の名において承認された儀式書を用いて適法な聖職者によって行われる。この要素は本質的かつ必要

不可欠である。

さらに、エクソシズムは「キリストの名における権威」によって行われる。すなわち、エクソシストは自らの実力ではなくキリストを代理しキリストを具現させる。しばしばエクソシストがエクソシズムに長けている長けていないという言い方を聞くことがあるが、そうした表現を用いた区別というものは、本質的な神学的、霊的観点からすると無意味である。それはむしろ信仰や聖性の範疇に属する問題である。教会の祈りは、たとえそれが悪魔に虐げられている人または悪魔に憑かれている人に対して行われる場合であっても、魂の善益のための神の計画によれば、不可避的にかつ疑いなく神によって受け入れられるものなのである。

そもそもエクソシズムとは、人や物を悪魔から守り、その影響から解放することを唯一の目的として行われるものであって迷信でも魔術の類でもない。聖書にはこの点について多くの言及がある。しかし、その一方でエクソシストは、それが悪魔の影響やその現れである、あるいはその逆であると性急に考えるべきではない<sup>11</sup>。これについて 1999 年に改訂された悪魔祓いの儀式書 *De Exorcismis et supplicationibus quibusdam* の緒言 (praenotanda) と教会の伝統が指し示す識別の基準は今なお依拠すべき不可欠な事項となっている。

上記の基準に加えて補完的なものではあるが、『カトリック教会のカテキズム』によるいくつかの説明をも考慮に入れる必要がある。

① 「イエスはエクソシズムを行った。教会がエクソシズムの力と任務を与えられたのは他ならぬイエスからである」(1673 項)。エクソシズムは、キリストの生涯と使命に根拠を持つものであるがゆえに適切な教会の行為である。エクソシズムは、キリストが教会に委ねた使命に従った行為であり、その本質においてキリスト論的・教会論的な従順に属するものである。この場合の教会の力は、キリストの力そのものである。教会のかしらはその身体において行為する

---

<sup>11</sup> Cf. G. SoVernigo, *Le dinamiche personali nel discernimento spirituale*, Padova 2010; id., *Come accompagnare nel cammino spirituale*, Padova 2011; id., *Religione e psicologia. Psicologia dell'esperienza religiosa*, Bologna 2003, 127-154; 158-193; 209-222.

からである。エクソシストは、こうしたキリストに従順である教会の一員である。エクソシズムは、聖霊の働きに場を与えることで実行されるが、それは個人の聖化の過程の一部であるとも言える。

② 「小エクソシズム」(exorcismus minor) と呼ばれる式は、洗礼の挙行の際に行われる祭儀を指す。いっぽう「盛儀の悪魔祓い」(exorcismus major) と呼ばれる荘厳なエクソシズムは、司祭が地区裁治権者(教区司教ないし総代理、司教代理)の許可を得てはじめて行うことができる。カテキズムは、洗礼の儀式とエクソシズムの儀式との間の区別に倣って、小エクソシズムと盛儀のエクソシズムとの間の根本的な区別を指摘している。これによって、この儀式の「公的な祈り」の次元がよりよく理解されると同時に一般には「解放の祈り」とも呼ばれる、いわゆる小エクソシズムをよりよく、その概念と効果の両面において評価することができるようになる。盛儀のエクソシズム(大祓魔式)の奉仕者としては、地区裁治権者の許可を得た司祭のみが認められている一方で、小エクソシズムの奉仕者は、今日においては儀式それ自体を行う許可を得たすべての奉仕者となっている(パウロ6世の制度改正前の下級聖職階位であった祓魔師がこれである)。

③ 盛儀のエクソシズムは、教会が定めた規則を厳格に守り慎重に執行しなければならない。このエクソシズムは、悪魔を追い出すこと、あるいは悪魔の影響から解放することを目的とし、イエスが教会に委ねた霊的權威によって行われる。しかし状態が病気、特に精神的な病気に由来する場合は、対象が大きく異なるため、その治療は専ら医学の領域において行われる。したがってエクソシズムの執行の前に、対象者の状況が病気ではなく邪悪なものの影響であることを確認することが重要となる<sup>12</sup>。このようにカテキズムはこの儀式について常に慎重であることを求めている。こうした慎重さは、当然かつ主要な習慣とされていて然るべきものであるが、教会法典と典礼規則を厳格に遵守することによっても強化されまた具体化される。それゆえ、ただ単に病気とみなされる

<sup>12</sup> 『カトリック教会のカテキズム』1673項参照。

状況ではエクソシズムを執行することは適法ではない。

### 1. 1 エクソシズムの儀式書の改訂

1999年にカトリック教会の新しいエクソシズムの儀式書が公表された際、「悪魔は存在する」と言い放った当時の典礼秘跡省長官エステベス枢機卿の発言は大きな注目を集めた。実際、歴代の教皇たちは同じ言葉をもって警告を放ってきた。

ローマ教皇、聖ヨハネ・パウロ2世によって1998年10月1日に承認された *De Exorcismus et Supplicationibus Quibusdam* (『エクソシズムと関連する種々の祈り』) は、翌年1月26日にバチカンによって正式に公表された。この文書こそがエクソシズムのための新しい典礼の規範とされている。典礼秘跡省によって発表された84ページにわたる儀式書は、ラテン語で書かれており各国の司教協議会は、以後、本国語による翻訳版を作成するよう指示されている。この儀式書は各教区の司教、あるいは司教によって特別に任命された司祭のみが使用することができるものである。

この新しい儀式書においてバチカンは、現在でも悪魔の存在と悪魔憑きの事実をはっきりと認めている。前文 (proccemium) において、「天使と同種の被造物」であり「神に敵対する悪魔と呼ばれる」者の存在が浮き彫りにされている。悪魔による影響が、人や場所、物の中に見られる以上、「教会はこれまで同様、人間が悪魔の誘惑から解放されるよう今後も祈り続ける」と末尾に記されている。

この儀式書の緒言 (praenotanda) の第1項において、まず表題として「キリストと教会の力の悪魔に対する勝利」が明示されている。そこではキリスト教の伝統的なエクソシズムの儀式に注意が向けられている。すなわち洗礼に先立って行う洗礼志願者を対象とする「小エクソシズム」と、新しいエクソシズムの儀式書に沿って行われる「盛儀のエクソシズム」の2つがあること。特に、後者はイエスが教会に託した霊的権能を通して「悪魔を追い出す」、もしくは悪魔的な影響から解放することを目的に作成されている。



エクソシズムの儀式それ自体は、神の助けを求める「嘆願の祈り」と、悪魔に立ち去るよう命じる「命令の祈り」とがその中心に置かれている。この他、儀式は、灌水、諸聖人の連願、詩編や福音書の朗読、信仰宣言と主の祈り、按手、十字架の顕示、感謝の祈り、結びの祈りによって構成されている。

この儀式は、単に所謂一連の『祝福の祈り』とは趣を異にするものである。実際 *De Benedictionibus*<sup>13</sup>にはエクソシズムに関する祈りの類は一切見られない。ちなみに様々な依存症に悩む人々への祝福の祈りは、*De Benedictionibus* の英語版 *Book of Blessing* (米国司教団認可版) の中に米国司教協議会認可の祈りとして *Order for the blessing of a person suffering from addiction or from substance abuse* (407-429 番)<sup>14</sup>にその詳細が定められている。

この新しいエクソシズムの儀式書は、1614年の『ローマ儀式書』の第12部<sup>15</sup>に定められた儀式の改訂版として作成されたものである。第2バチカン公会議の『典礼憲章』第34, 79項等に則って、それまでの儀式書の全ての改訂が求められ過去30年に渡ってその作業が段階的に行われてきたが、今回のエクソシズムの儀式書は、一連の改訂作業の最後のものとして発表された。しかしその緒言38項においては、多くのエクソシストの実際の経験に基づいて作成される *directorium quoddam pastorale de usu exorcismis maioris*<sup>16</sup>をも規範に含められることが明言されている。これは儀式書を準備していた段階で、多くのエクソシストからの様々な要望があり、それらを一まとめに儀式書に盛り込むことができなかつたからであるとされている。このことに関して、儀式書の発行の翌日にエステベス長官は、旧版のエクソシズムの儀式書の使用を認める旨の文書を出した。その結果、エクソシズムの儀式に関しては、歴代のエクソシストが用いてきた400年来の旧儀式書が、新版のそれに完全に取って代えられたのではなく必要であれば今もなお旧版の儀式書の使用も可能であるという結論にな

<sup>13</sup> *De Benedictionibus*, Libreria editorice Vaticana, Editio typica 1984, reimpressio 1985.

<sup>14</sup> *Book of Blessing*, Liturgical Press, 1989, p. 133 参照。

<sup>15</sup> *Rituale Romanum*, editio princeps (1614), Libreria editorice Vaticana, 2004, p. 198 参照。

<sup>16</sup> 前出 *De Exorcismis et supplicationibus quibusdam*, p.16 参照。

った。後年、2007年の教皇ベネディクト16世の自発教令『スンモールム・ポンティフィカム』は、1970年の典礼改革以前のローマ典礼の使用を全般的に認めることとした。ただし公会議以前のミサ典礼書の使用については、教皇フランシスコは、2021年7月16日付の自発教令『伝統の守護者 *Traditionis custodes*』によって厳格な規制を定めた。

ローマにおいて、この新しいエクソシズムの儀式書がマスコミに発表された際、当時、典礼秘跡省長官であったエステベス 枢機卿は、「この儀式は、以前の儀式書からそれほど大幅な変更を行ったものではない」と述べていた。加えて、「この儀式が使用されることはほとんどないが、悪魔憑きに苦しむ当事者の承諾と、教区司教の指導の下でのみ使用可能なエクソシズムの儀式は引き続き必要不可欠である。なぜなら悪魔は実在するからである」とも述べた<sup>17</sup>。彼はまた、悪魔の存在を信じることに関しては「認める、認めないという見解の問題ではなく、それはカトリックの信仰であり教義の一要素である」と戒めた。よく言われることだが、「悪魔の存在を否定する、あるいは信じない時点で既に悪魔は凡そ勝利を収めている」ということをバチカンも認めていることになる。

この一連のバチカンの発表は、悪魔や天使、そして神ですら偶像化しがちな現代社会にあっては大変印象的な報道となった。つまり信仰と救い、罪と罰といったことが、単に概念的、精神的な次元に追いやられてしまう相対的な見方は決して適切ではなく、現実的に全人的な人の救い、幸せの根幹にある絶対的な神と人との関わり、悪と対峙する信仰の規範があることを改めて強調するものとなった。新しいエクソシズムの儀式書の公布以来、欧米ではエクソシストの数が急増したという。特にイタリアではここ50年間にかつて20～30名のエクソシストが200～300名以上にまで増えたと言われている<sup>18</sup>。2000年の大聖年に備え、教皇ヨハネ・パウロ2世自身が、混迷する社会とその思想の中にある教会の霊的な護りを固める意向を持っていた為とも考えられている。

---

<sup>17</sup> NCCB – Newsletter, *Committee on the Liturgy*, (volume XXXV, Jan. - Feb. 1999) および *The Wanderer* (4 February 1999) を参照。

<sup>18</sup> 島村奈津『エクソシストとの対話』(小学館, 1999年) p. 252 参照。

## 1. 2 教皇庁立大学におけるエクソシズムの養成講座

2005年2月17日、次いで10月13日にローマの教皇庁立レジーナ・アポストローラム大学で、エクソシズムを専門とする司祭向けのコースが開講された。とパチカン放送が伝え一時話題となった。この講座はそれ以後、毎年、復活祭の後に開催されており私も2013年度のコースに部分的に参加した。

この講座は、悪魔崇拝の実態、悪魔祓い、解放の祈りなど、エクソシズムに関する知識を深める講座ではあるものの、単に神学的観点だけでなく司牧、霊性、典礼、教会法学さらに医学、科学、社会学といった観点からも理解を深めるほか、世界の若者たちの思想や文化をも対象とするものである<sup>19</sup>。開催当初、人間学専門のチェチリア・ガット・トロツキ教授は、講座開設の理由として、オカルティズムへ傾倒する若者たちの増加と、それが社会や文化に与える影響への懸念を挙げていた。イタリアでは近年、それも1960年代後半以後、急速に成長した「魔術」「悪魔崇拝」「スピリチュアリティ・心靈主義」といった3つの大きなオカルトブームが秘かに流行っていると言われている。オカルトに限らず、古くからの秘密結社やヒッピームーブメントなどニューエイジ世代の諸運動、さらにドラッグなどの大流行も精神世界と社会的混乱の象徴ともいえるかもしれない。また同講座の初代指導者の一人パオロ・スカラフォニ神父は、「最近、ますます悪魔が人間の生活に介入していることには疑いがありません……みなさん全員がエクソシストになるわけではないかもしれませんが、あらゆる聖職者にとって悪魔が取り憑いた状態と心理的問題とを識別する方法を知ることが必須です」と受講生に向けて語った<sup>20</sup>。2007年時点の統計によると、何らかの事件をきっかけに把握されたイタリアの悪魔カルトのメンバーは5000人を超え、その4分の3が17～25歳の若者であったという。そうした悪魔崇拝を背景にしたカルト集団に関与していた若者が陰惨な殺人事件を起こしているこ

---

<sup>19</sup> パチカン放送をはじめ国内外の新聞その他のメディアを通じて報じられた。教皇庁立レジーナ・アポストローラム大学のサイト：<http://www.upra.org/>参照。

<sup>20</sup> 世界キリスト教情報 2005年2月21日、第738信（週刊・総合版）参照。

とから、イタリアの教会、そしてバチカンが悪魔的な活動に対して警戒を強め、聖職者の様々な側面での養成が必要だとして幅広い面からのエクソシストの養成を行なう運びとなったとされている。また古いデータであるが 1998 年のローマ大学の調査では、ローマに居住するカトリック信者のうち、日ごろから教会に通う人口は僅か 10%程度で、残りのうち 70%以上は、年に一度教会へ行くか行かないかという状況であるという。さらに近年、日本を初めとする数多くの新興宗教が大きな宗教施設をローマ市内に次々に建てていることから、カトリック教会の信仰に対する危機感が募っている。日系の新興宗教でいうと、立正佼成会、創価学会、真光、幸福の科学、真如苑、阿含宗などが勢力を伸ばしているという<sup>21</sup>。そういった流れの中で、エクソシズムの講座が開催されるようになったことは、教会の現代社会の不安な状況に対する打開のための一手段であったとも受け取れる。このようにイタリアにおける近年の新宗教の勃興は、擬似宗教運動としてもみられる神秘思想、心霊現象、迷信の類の流布といった単純な文化的な流行というレベルでは片付けられない、カトリック教会の教えそのものを否定する、または少なくとも宣教を疎外する異端に人々を誘う動きへと繋がりがつあるという点で無視できるものではない。

### 1. 3 20-21 世紀の教皇たちの発言

教会が一般社会に向けて悪魔について語るのは、何もエクソシズムの儀式書に関する機会に限ったことではない。実は、この約 100 年の間、歴代の教皇たちは、悪魔についての発言を度々繰り返してきた。その中で代表的なものを幾つか挙げておきたい。

#### 教皇レオ 13 世

近代の教皇の中でエクソシズムに関して必ずその名が出される人物として教皇レオ 13 世が挙げられる。彼は聖トマスの神学の重要性を強調した人物とし

---

<sup>21</sup> 前出『エクソシストとの対話』p. 125 参照。

でも知られるが、実に悪魔の働きに対して敏感であったと言える。彼は自発的に悪霊に対抗するキリスト信者の祈りを作成し 1884 年に『サタンと墮天使へのエクソシズム』(Exorcismus in satanam et angelos apostaticos) を公布した。これは洗礼式の際の小エクソシズムとも異なるが盛儀のエクソシズムとも異なる。ある意味で独特なこの儀式書は、最終的には 1952 年に改定された旧『ローマ儀式書』(第 8 版) の第 12 項『悪魔に苛まれる者為のエクソシズム』<sup>22</sup> の第 3 章に収録された。この儀式書の冒頭は大天使聖ミカエルに寄り頼む祈りで始まる。この祈りもレオ 13 世が作成したものとされており、後に普段のミサ後に「聖なる公教会のための祈り」において唱えるよう指示され公会議後まで全世界の教会でおこなわれていた。

教皇レオ 13 世の業績で最も有名なものは、労働問題を扱った回勅『レーラム・ノヴァールム』<sup>23</sup> とそれに関連した働きかけである。彼はその回勅で、労働者の権利を擁護し、搾取と行過ぎた資本主義に警告を行った。人間存在そのものを滅ぼしかねない近代社会の動きの中に、教皇レオ 13 世は、巨大な悪の力を感じ取っていたといわれる。レオ 13 世はトマス・アクィナスの「理性と信仰の調和」という思想を示すことで、信仰と科学思想が共存し得ることを訴えたことでも知られている。また祈りと行動を伴った信仰生活のあり方を強調した教皇でもあった。回勅『フマーヌム・ジェヌス *Humanum genus*』(1884 年 4 月 20 日) では、特にフリーメイソンを標的としながら秘密結社を健全でない悪魔的な宗教活動として断罪しているように、彼自身、現実に影響を及ぼす様々な悪魔的な力というもの意識していたのは間違いない<sup>24</sup>。

## 教皇パウロ 6 世

1972 年 11 月 15 日の水曜日の一般謁見において教皇パウロ 6 世が語った言葉

<sup>22</sup> *Rituale Romanum*, edition octava, Titulus XII, *De exorcizandis obsessis a daemónio*. 復刻版 *Rituale Romanum* (1953) reimpressio edition, C. L. V. Edizioni Liturgice, 2001.

<sup>23</sup> 『レーラム・ノヴァールム』(岳野慶作訳, 中央出版, 1961 年)。

<sup>24</sup> 近現代の主な教皇文書の邦訳が以下のサイトに掲載されておりそれを参考にした。  
[http://fsspxjapan.fc2web.com/papal/papal\\_document.html](http://fsspxjapan.fc2web.com/papal/papal_document.html)

の中に次のようなものがある<sup>25</sup>。

「今日、教会にとって最も必要なこととは何か？我々の応えは、最も必要とされていることである。つまり個々の人間や共同体、また社会や事件に影響を及ぼしうる悪魔という名を持つ悪しき力からの防衛である。どうかこのことをつまらない迷信だ、非現実的だとあきれないで欲しい。」

この発言は、当時不評を買ったとも言われているが、教皇パウロ 6 世は、悪魔が単なる抽象概念ではなく 20 世紀後半の科学社会において現実にごめく闇の力であると語っていることに注目したい。

### 教皇ヨハネ・パウロ 2 世

教皇ヨハネ・パウロ 2 世は教皇在位中にエクソシズムを行なった経験をもつことで有名であるが、1987 年 5 月 24 日に次のように述べている<sup>26</sup>。

「悪魔に対する戦いは、大天使聖ミカエルの最も卓越した働きである。それは、今日に至ってもなお継続されている戦いである。なぜなら、悪魔は未だに生きていて世界において活動しているからである。今日、我々を取り巻いている悪魔は、我々の社会において病的な混乱をもたらしている。人類の不一致や破壊的活動が原罪に起源を持つだけでなく、サタンの力の浸透と闇の働きの結果にもよるものである。」

重要な点は、悪が決して罪と関連した「あるべき善の欠如」とか「倫理的悪」、不運・不幸といった次元の問題ではなく人格的な悪しき力の結果だとされている点である。教皇ヨハネ・パウロ 2 世は、「悪魔は擬人化した悪」と規定した上で、「悪魔の影響は今日でも見られるが、キリスト者は悪魔を恐れる必要はない。

---

<sup>25</sup> *An Exorcist Tells His Story*, G. Amorth, Ignatius Press, 1999, p. 165 参照。

<sup>26</sup> 同上 *An Exorcist Tells His Story* の p. 31 参照。

しかし、悪魔から完全に解放されるためには、時（最後の審判）の到来を待たなければならない。それまでは悪魔に勝利したイエスを信じ、そのことを慰めとしなければならない」と述べている<sup>27</sup>。

また、結婚した人間にとって自分自身の如く隣人を愛せよという第二の律法が私たちを向かわせる第一の対象は、自身の配偶者であることを思い出して、教皇ヨハネ・パウロ 2 世は次のように述べている。

「隣人に対して行われる全ての暴力行為の根源には、悪魔の考え方に同調する傾向がある。悪魔は『初めから人殺しである』（ヨハ 8:44）」<sup>28</sup>。

ここで教皇が引用している聖ヨハネによる他の文書を思い起こすべきだろう。「互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えです。カインのようになってはなりません。彼は悪いものに属して、兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです」（1ヨハ 3:11-12）。歴史のまさに始まりの時に弟を殺したカインの行いは、驚くべき速さで悪が世に広がる様子を悲しくも物語っている。地上の楽園で神に対して行なった人間の反逆は、その後、人間対人間の死闘となっていくと理解され得る。

### 教皇ベネディクト 16 世

教皇ベネディクト 16 世は、2005 年の聖金曜日に教皇ヨハネ・パウロ 2 世の代理として十字架の道行きの先導をした際に次のように語っていた。

「あなたの教会を憐れんでください。教会の中で、アダムがいつも墮落を繰

<sup>27</sup> 『コンフィデンシャル』というサイトに教皇ヨハネ・パウロ 2 世の発言として掲載されていたものだが、出自は不明。<http://blog.livedoor.jp/wien2006/archives/50346644.html>

<sup>28</sup> ジョン・ヴィリングスの生命倫理に関するレポート（原文は英文）の中の「良心」の項目で教皇ヨハネ・パウロ 2 世の言葉として引用されているが原文の帰属はできていない。

り返しています。私たちの墮落によって、あなたを地に叩きつけ、引きずっており、サタンがそれを見てあざけています。サタンは、あなたがもう立ち直れず、教会の墮落によって地に落ち、引きずられている故にあなたが負け、地に叩きつかられたまま倒れてしまうことを望んでいます。しかし、あなたは立ち直られました。あなたは復活し、私たちをも立ち直らせることができになります。あなたの教会を救い、聖化してください。私たち皆を救い、聖化してください。」<sup>29</sup>

その後、2007 年末に教皇ベネディクト 16 世は、各司教区にエクソシストを必要な数、少なくとも 1 人は配置することを指示したと言われている。後に、教皇は次のように語っている。

「神は決然として、ご自分の子らを奴隷状態から解放し自由へと導かれます。もっとも重大かつ深刻な奴隷状態は、罪による奴隷状態にほかなりません。だから神は御子を世に遣わしました。それは、人間を『あらゆる罪の起源また原因』であるサタンの支配から解放するためです。神は御子を私たちの死すべき肉のうちに遣わしました。それは、御子があがないの犠牲となり、十字架上で私たちのために死ぬためです。この全ての人のための決定的な救いの計画に、悪魔は全力で歯向かいます。特に、毎年、四旬節第一主日に朗読される、荒れ野でのイエスの誘惑に関する福音が示すとおりです。実際、四旬節に入ることとは、つねにイエスの側に立って罪に逆らうことです。個人としても教会としても悪霊と霊的に戦うことです。」(2011 年 3 月 13 日の「お告げの祈り」)

また別の機会に次のように述べている。

「イエスは荒れ野に赴き、そこで御父から示された道を離れ、他のより安易

---

<sup>29</sup> 前出ベネディクト 16 世『黙想と祈りによる十字架の道行』(貝原敬子訳、女子パウロ会、2006 年) p. 48-50 参照。



でこの世的な道に従うことへの誘惑を受けました（ルカ 4:1-13 参照）。こうしてイエスは私たちの誘惑を背負い、私たちの悲惨な状態を担いました。それは悪い者に打ち勝ち、神への道、すなわち回心の道を私たちに開くためです。」  
 (2013年2月13日の一般謁見)

### 教皇フランシスコ

教皇フランシスコは、教皇に選出された際の最初の説教<sup>30</sup>以来、説教あるいは教皇文書の中で繰り返し悪魔の存在とその悪しき働きについて言及している。彼は、「信仰に堅くとどまりなさい」（1ペト 5:9）と述べた聖ペトロと同様、キリスト信者たちに忠告し続けている。

『『どうして悪魔などという、時代遅れなもののことを話すのだろう。悪魔なんていないのに』と言う人が大勢います。しかし、福音書の教えに目を向けてください。イエスは悪魔に立ち向かいます。イエスは悪魔から誘惑を受けましたが、それらをすべて退け、誘惑に打ち勝ちました。……もっとも過酷な試練のときにも、神は私たちを放っておかれません。』（2019年5月1日一般謁見演説）

「毎年、四旬節が始まるたびに、イエスが荒れ野で誘惑を受けたことを記したこの福音箇所は、主の足取りをたどるキリスト者の生活が悪魔との戦いであることを、私たちに思い起こさせてくれます。この箇所は、イエスがすすんで誘惑者に立ち向い、打ち勝ったことを伝えると同時に、悪魔はその誘惑によって、私たちにも働きかけることができることも明らかにしています。私たちの際限のない罪、私たちの過ちを望んでいるこの抜け目のない敵の存在に気をつ

---

<sup>30</sup> 2013年3月14日の説教。その他に、C. M. Berardi, *Dal Concilio Vaticano II a Papa Francesco. Appunti in storia della demonologia*, *Camilliana* 18/52-53 (2018) 76-77; D. Manetti, *Papa Francesco. Il Diavolo c'è: come agisce e come combatterlo*, Cinisello Balsamo 2017 などの文献を参照。

けなければなりません。そして、悪魔に立ち向かい、戦う備えをしなければなりません。この敵への勝利は、信仰と祈りと回心があれば、神の恵みにより約束されています」(2021年2月21日「お告げの祈り」)。

2018年に発表された使徒的勧告『喜びに喜べ』の159-162で項は、明確にキリスト信者の聖性への道のりは、絶えざる悪魔との戦いであることを強調している。教皇は、悪魔とは単なる神話でもなければ観念でもないことを強調しており、現実的に信仰者の生活を教会のさまざまな手段を通して霊的に成熟させ、善性、愛を増すことによって悪の働きに打ち勝つ必要があることを強調している。

「私は、この世や世俗的な精神性に抗う闘いだけを問題にしているのではありません。また己の弱さと性向(誰しもがその人なりに持っているもの、怠け癖、色好み、やっかみ癖、やきもち焼きなど)との闘いだけに還元されるものでもありません。それは、悪の君であるサタンとのやむことのない戦いでもあるのです。イエスが自ら私たちの勝利を祝ってくださいます」(159項)。

「福音書で語られている事例は全て精神的な病であるとか、結局悪魔は存在しない、悪魔のはたらきなどないと言って、現実を極端に単純化すべきではありません。……事実、イエスは主の祈りを教えてくださった際に、悪魔からの解放を御父に願ってこれを締めくくろう望まれました。主の祈りで使われている表現は、抽象的に悪いものを指しているのではなく、より厳密な訳でいえば『悪魔』です。それは私たちを執拗に苦しめている人格を有した存在です。」(160項)。

「神のことばは、『悪魔の策略に対抗して立ち』(エフェ6:11)、『悪い者の放つ火の矢を悉く』(エフェ6:16) 消すよう私たちに明確に求めています。これは大袈裟な物言いではありません。聖性に向けた道のりは、絶えざる戦いでもある

からです。これを認めようとしなない人は、失敗や凡庸に陥る危険があるでしょう。私たちには、戦いのために神が与えてくださった強力な武器があります。祈りとなって表れる信仰、神のことばの黙想、ミサを捧げること、聖体拝領、和解の秘跡、愛徳のわざ、共同体生活、宣教の熱意です」(162 項)。

## 考察

このように、これまでの近年の教皇たちの悪魔に関する発言は、確かに悪魔の存在とその働きについて明言しているものの、総じて社会的な悪や人間の思想に影響する悪の力の総体といったイメージが強い。いわゆる悪霊の憑依現象という個別具体的な事例を前提としたものではないようにも受け止められる。

その中で、教皇フランシスコが 2017 年度の教皇庁内赦院裁判所主催の内的法廷に関する講座の参加者との謁見の際に、ゆるしの秘跡の機会に悪霊の憑依が疑われるケースに遭遇した場合には、聴罪司祭は慌てず、また過度に神経質になることなく賢明かつ慎重に状況を判断するために事案をエクソシストに委ねるように勧告したことは注目に値する。この教皇の勧告を受け、使徒座内赦院裁判所は全世界の教会にあててエクソシストの設置を改めて促した<sup>31</sup>。教皇フランシスコの意図としては、おそらく社会全体に漂う悪の力も、個別の悪霊の憑依の問題も、教会が対処すべき現実的な課題であることに違いはないということだろう。実際、教皇フランシスコは 2014 年に国際エクソシスト協会の活動を前任者に続いて承認している。そのうえ、2018 年の 10 月のロザリオの月にあたり、全世界の信者に向けてロザリオの祈りに合わせて大天使聖ミカエルに取り次ぎを願う祈りをするようにも促している。

## 近年のバチカンの悪魔に関する公文書

使徒座公文書集 *Enchiridion Vaticanum* (vol. 5, no. 38) に収録されている 1985 年の教理省の『悪魔に関するキリスト教信仰について』(Fede cristiana e

<sup>31</sup> 2018 年 2 月 14 日、各司教協議会宛の内赦院院長からの書簡 (prot. n. 79/18)。

demonologia) において、これまでの教会の悪魔に関する教えがまとめられている<sup>32</sup>。この文書の強調点は、悪魔を単なる抽象概念に貶める事を厳しく戒めている点である。

以上のような近年の教皇、教会の教導は、恐らく教会において悪魔が悪の象徴的概念にすぎないという主張が増加したためであるとも考えられる。悪の実在、現実的な力を否定することは、聖書そのものを否定することにつながるからである。例えば、オランダの旧約聖書学者のハーバード・ハーグ師の『天使と悪魔』(1968年)やヘンリ・ケイリというジャーナリストの『悪魔、悪魔学、魔女』(1968年)といった著作は悪魔の実在を否定した立場から論じている。前者は罪の意識が悪魔憑きに関与していると分析し、「悪魔憑きとは、かつて信仰が絶対的であった時代には悪魔の実在の証であると考えられていた」が「精神的に異常であるという点から、ノイローゼや精神病、脳の疾患と同じ範疇に位置づけるべき」だとしている。後者は「悪魔学における信仰が、過去にどれだけの被害をもたらしたかを、そして聖書やキリスト教神学において、ある地位を確保している過信の問題性を考慮するならば、それが自らの存在を主張し始めるまで、悪魔など存在しないかのように振舞うのが得策のようだ」と言っている。さらに、1969年にはオランダで「カトリック教義の中で、悪魔の実在を信じるか否かは、信仰に左右されるものではない」といった主張さえみられた<sup>33</sup>。また、東京大司教であった岡田武夫大司教の遺稿をまとめた『悪の研究』(2021年、フリープレス)においても、どこかしら悪を観念的なものとして扱っており、悪を退けることは人の思いや考え方の転換によって可能となるとしている点はいささか疑問である。

現代において悪魔の存在に関する教えは、とりわけ多くなされているわけではないという印象を多くのキリスト信者が持っているかもしれない。しかし、C. S. ルイスは、その著書『悪魔の手紙』<sup>34</sup>において「人間を誘惑するという

---

<sup>32</sup> これは1985年6月26日付けの *Osservatore Romano* に掲載された。

<sup>33</sup> 前出『エクソシストとの対話』p. 120 参照。

<sup>34</sup> C. S. ルイス著『悪魔の手紙』(中村妙子訳、平凡社、2006年)。

悪魔本来の仕事にいざ取り掛からんとしている小さく経験も浅い未熟な悪魔でも、人間に『悪魔は存在しない』と信じさせることができた時点でその闘いに半分勝ったも同然である」といった旨の事柄を述べていることに注目したい。

いずれにしても、これまで見てきたように、カトリック教会は現代社会においても悪魔の存在とその働きを明らかに認め、かつそれに対する教会の役務と祈りとを再認識させ深める姿勢を明確に示していることが判る。ローマ管区のエクソシストであった G. アモルス神父の言うように悪魔憑きと思われる現象のおよそ 99%は医学的な原因によるものと認められるとしている。しかし残された 1%の原因不明な現象があることもまた教会が認める事実である。勿論、科学の発展によって、さらにこの 1%が減少することも十分にあり得る。しかし人間は全能ではなく、科学技術が全ての問題を解決するものではないというのも自明である。科学至上主義はやがて神の否定につながる<sup>35</sup>。ともかく、個別の怪奇的な事件に発展したもののみならず、絶え間ない残虐な殺人、戦争、犯罪など現実的な悪魔の働きとして目に見えるものが数多くあると言わざるを得ない。これらは、確かに単なる概念的な悪で片付けて良いものではないだろう。

## 第2章 悪魔、悪霊、祓魔についての聖書的、宗教史的考察

この章では、教会の問題とする悪魔・悪霊についての概念を整理する。

創造主である神の下に万物が作られているという教会の神学的解釈に従えば、神に対比される存在としての悪魔というものは善悪二元論的な発想となってしまいうため誤りとされる。だから悪魔を神の創造した天使、諸霊の内において捉えることが妥当であり、この場合、悪魔と呼ぶよりもむしろ悪霊とその働きの総体ないし主導者というべきであろう。なお、悪霊は単数でも複数でも数えられる個別な存在であるのに対して、悪魔はより総体的な力を示す概念的な名称だと言うことも可能である。

新プラトン主義の流れを汲むアウグスティヌスをはじめとする多くの神学者

---

<sup>35</sup> R. ロペス・シロニス『旅する人間と神』（サンパウロ、1993年）p. 63 以後参照。

は「あるべき善の欠如した状態」を「悪」と呼んでいた。あるいは自分にとっての善を履き違えて、「神でないもの」をあたかも神として求めた結果が悪である。倫理神学においては、行為者の意図、行為そのもの、そして環境条件において善悪の判断がなされるが、しかしその善悪の判断基準は正・不正のように可変的なものではなく、絶対善である神の存在が示すように本来は絶対的な判断基準がある。教皇ヨハネ・パウロ2世の回勅『真理の輝き *Veritatis Splendor*』でも絶対的悪について明言されている<sup>36</sup>。この悪に関して、様々な教会公文書において、個人の自由な判断による、即ち悪を善と取り違えて犯される単なる倫理的に悪い行為という抽象概念だけでなく、そこには本来は善であるものを悪へと誘う実存的に人格的に働きかける存在がこの世において常にあるのだということを教会は教えている。それがパウロの言う「不法の秘密の力」(2テサ2:7)として、罪と苦しみの根源的なはたらきをなす悪魔である。

エクソシズムは、個人が単に悪霊の影響を受けた場合に行なわれる儀式というだけでなく、むしろ悪霊によって自由意志が完全に奪われてしまうような事態に陥った時にこそおこなわれるものである。

そもそも神以外のものを神と履き違えて自らの目的とさせてしまう誘いこそが悪魔の働きである。普通は自らの意志によって良心の糾明、犯した罪の告白と償いを行なうことができるが、人間は、原罪、つまり従来からの罪・悪への傾きにおいてではなく、悪霊の憑依によって自由意志を完全に奪われ自己の制御が不能という状態に貶められる可能性があるということを教会は現在も認めている。この悪霊の憑依は、人間だけに留まらず、特定の物にも及ぶと教会が教えている点にも着目すべきであろう。

信仰者は、イエスがこの世に来られたのは、この世のあらゆる不幸をなくするためではなく、そのような最も深刻な悪の束縛、即ちあらゆる罪の奴隷の状態から人間を解放するためであったことを忘れてはならない。現代のように誘惑、偶像の溢れ返る社会に生きる人間は往々にして自らの罪に対する弱さを多く抱

---

<sup>36</sup> ヨハネ・パウロ2世『真理の輝き』(カトリック中央協議会、1995年)80項参照。

えていると言える。

そこで、悪魔と悪霊、そして悪魔の憑依について『新カトリック大辞典』の該当箇所（聖書学的、宗教史的考察）<sup>37</sup>を参照しながら理解の為にまとめておきたい。

## 2. 1 悪魔<sup>38</sup>

悪魔とは、マルコ福音書（3:22）では「悪霊の頭」とされている。諸悪霊が一人の頭の下にあると考えられていることから、「悪魔」が固有名詞としても使用されている。しかしこの語は、悪霊の総称としても用いられていることに注目しなければならない。ここでいう「悪魔」とは、新約聖書のギリシア語 *diabolos* の邦訳語であり、ヘブライ語の *satan*（讒謗者、誹謗者の意）に当たるものである。この悪魔も、教会の教えによれば、やはり神の支配の下にある一被造物に過ぎないと考えるべきものである。

### 宗教史における悪魔

悪魔という概念は、一神教にのみ見られるものであると言われている。そこには、悪魔の前提である霊的被造物とその墮罪の可能性とがある。

ユダヤ教とキリスト教における悪魔の概念の起源は、バビロン捕囚期以後のイランの民間信仰に由来すると考えられている。しかし、その証拠として挙げられるのは、トビト記（3:8）に出てくるアスマダイ（*asmodaios*）という悪霊だけである。これは *aesma-daeva* という古代イランのアーリマンとは異なる悪霊と考えられているが確実ではなく、悪魔の本質とは食い違っている。悪魔がカナン神バアル・ゼブブ（王下 1:2； マタ 12:24 ではベルゼブル）と同一視されたのと同様に、アーリマンと同一視されたとしても悪魔の概念がそれに由来することの証明にはならない。

<sup>37</sup> 上智学院新カトリック大辞典編纂委員会『新カトリック大辞典』第一巻（研究社、1996年）p. 85-91 参照。

<sup>38</sup> 『新カトリック大辞典』p. 85-86 から要約した。

## 聖書における悪魔

このように諸悪霊が一人の君主の下にあること、つまり一人の頭としての悪魔がいることが何時ごろからイスラエルで信じられるようになっていったか、それが何時なのかを確言することはできない。悪魔を示す名称はしばしば変化しているが、問題は名前よりもそれが意味する内容の方であろう。創世記第3章に出てくる「蛇」を、既に聖書の著者が所謂「悪魔の如きもの」と考えていたと推測するのはある程度は許容されることであるし、後の時代になると、疑いもなくそのように解釈されていった（知 2:24; 黙 12:9）。この「蛇」は知性を備えており、神の命令に逆らうように人を誘っている点で、まさに悪魔の働きを行っていると言える。

旧約聖書の中で贖いの日の儀式に出てくるアザゼル（レビ 16:8-10）も悪魔のような姿をしていたと考えられている。アザゼルは神の反対者でサタンに相当するものである。主（ヤハウェ）とアザゼルのために1頭ずつ雄山羊が籤で定められるが、主のための雄山羊が犠牲とされるのに対して、アザゼルのための雄山羊は民の罪を象徴的に担わされ、生きたまま荒地へと追いやられる。アザゼルという名前は（サンマエルとともに）後に恐れて発音されなくなった悪魔の固有名詞であったとも言われている（「サタン」という語は総称として用いられていた）。聖書外典の『エチオピア語エノク書』<sup>39</sup>では、アザゼルは創世記 6:1-4 に出てくる墮罪した天使の頭とされている（『第1 エノク書』9, 13, 54, 69章および『アブラハムの黙示』23を参照）。

「サタン」という名前は、特にヨブ記に由来する。そこでは、「天の国」の「神の子ら」の中に (has-) satan と呼ばれるものが出てくる（ヨブ 1:6-2:7）。定冠詞 ha-がついているので、この語は既知の個体を指していると思われる。ヨブ記のサタンの発言は、良い天使としての発言ではなく、神に挑戦する誘惑者としてのそれである。神がサタンの働きを利用することも、サタンが神の子らの

<sup>39</sup> 『聖書外典偽典』第4巻「旧約偽典Ⅱ」（教分館、1975年）p. 177 参照。



集いに現れることも、彼が本来は良い天使であったことの証拠にはならない。彼は確かに悪魔的な存在であり、悪魔と異なるのは他の諸悪霊の頭と言われている点のみである。ゼカリヤ書 3:1-2 にもサタンが出てくるが、それは「誹謗者」の姿をとっている（代上 21:1 も参照）。知恵の書 2:24 に出てくるディアボロス (diabolos) は、既に新約聖書の悪魔と同じものとなっている。多くの聖書外典偽典でも同様な悪魔の姿がみられる。さらに『死海文書』においては、悪魔は「ベリヤアル」(beli-ya'al : やくざ者) とか「闇の使い」と呼ばれている (1QS3:20-21 他)<sup>40</sup>。この悪魔は、新約聖書の悪魔と同様に、自分の「国」(memsala) を持っている。聖書外典偽典やラビ文学には、それ以外にマステマ (『ヨベル書』 10:8)<sup>41</sup>、サンマエル (『イザヤの昇天』 1-2)<sup>42</sup>、アスメダイ (b Git 68a) 等の名称も出てくる。

新約聖書で最もよく知られる呼び名は、ディアボロス (diabolos) とサタン (satanas) である。他にベルゼブル (マコ 3:22)、ベリアル (2 コリ 6:15)、誘惑する者 (1 テサ 3:5)、悪い者 (マタ 6:13; 1 ヨハ 5:18-19)、敵 (ルカ 10:19)、この世の神 (2 コリ 4:4) 等が挙げられる。福音書では、悪魔は誘惑者としてだけでなく、悪魔憑きと病気の原因、嘘つき、詐欺師、神とその国の反対者としても現れる。イエスの反対者たちは、イエスが悪魔によって奇跡を行い(マコ 3:22)、悪魔に憑かれていると言ってイエスを中傷している。イエスは、自分に反対するユダヤ人を、悪魔の仲間 (悪魔の子ら) と呼ぶ (マタ 13:38; ヨハ 8:44)。ヨハネとパウロは、悪魔の働きを宇宙的規模で見えており (1 ヨハ 5:19)、歴史全体を神と悪魔との戦いとみなしている (黙 12-20 章)。

## 考察

悪魔は人間の罪の原因そのものではなく、罪を犯すよう人間を刺激する者であると解釈できる。それ故、罪そのものから、その必然的な結論として、悪魔

<sup>40</sup> 日本聖書学研究所『死海文書』テキストの翻訳と解説 (山本書店, 1963 年) 参照。

<sup>41</sup> 前出『聖書外典偽典』第 4 巻, p.53 参照。

<sup>42</sup> 『聖書外典偽典』別巻・補遺Ⅱ (教分館, 1982 年) p. 179 参照。

の存在そのものを直接引き出すことはできない。神の啓示によらなければ、人は悪魔の存在を知ることはできない。しかも旧約聖書では、まだはっきりとした悪魔の概念はみられず旧約の啓示だけで悪魔の存在を明確に描き出すことはできない。しかし新約聖書にあっては、多くの箇所から十分に明確化することができる。悪魔の神学上の意義は、病気やその他の物質的悪の場合より、むしろ罪への誘いという点から明らかにされる。悪魔は仲間である諸悪霊と共に(エフェ 6:12)、この世を神から離れさせようと誘う存在である。その支配(ヨハ 12:31)と権威は、もともと神から与えられたものであり(ルカ 3:6)、しばらくの間は、彼らは「成り立って行く」(マタ 12:26)が、より強い者(キリスト)の到来によって滅ぼされるまでの間に生存期間が限られている。

キリスト信者は、キリストと共に悪魔に勝った(1ヨハ 2:13)とされている。それ故、悪魔に対する恐怖は、何ら心配の根拠とはならないはずなのだが、誰であれ充分に警戒する必要がある(マタ 12:44; 1ペト 5:8)。洗礼を受けた後も、自らの不信仰によって悪魔に罪へと誘われないように配慮する必要があるからである。人間は神の恩恵に自らを委ねて生きるべきだと説いたアウグスティヌスは、「もし悪魔にやりたい放題にさせておけば、今頃、人類は存在していなかっただろう」<sup>43</sup>とも言っている。それに対してペラギウスは「悪をも行なうことの出来る被造物でなければ、自発的に善を行うことはできない。……神は、我々が自分の自由な意志によって創造主の意志を行うことができるよう、悪をも行なう能力を授けられた」<sup>44</sup>と説いた。その一方で、悪魔のお陰で人はかえって神から与えられる聖性を高められたとも言い得る。確かに教皇ヨハネ・パウロ 2 世は、「悪がこの世に存在する一つの理由は、私たちの愛を呼び覚ますためです」と説明している<sup>45</sup>。

悪魔は、暴力によって人を傷つけるという力を示すことよりも、狡猾にも人

---

<sup>43</sup> 前出『エクソシストとの対話』p. 113 にモンセニョール・コッラード・バルドゥッチ(元バチカン國務省の役人でローマ管区エクソシスト)の証言の中に出てくるが出典は不明。

<sup>44</sup> 小高毅編『原典古代キリスト教思想史』3 ラテン教父(教文館、2001年) p. 298-300。

<sup>45</sup> *Memory and Identity*, Weidenfeld & Nicolson, London, 2005, p. 189 参照。

を神の愛の掟から遠ざけ、欺き、破滅に向かわせるよう誘惑する者なのである。証聖者マクシモスは、悪魔は愛の掟よりも人を物質的、人間的なものに執着させ、それを重んじるように誘い、他人を非難する心、悪意、憎しみ、怒り、敵意を起こさせ、人を神の愛から引き離すと語っている<sup>46</sup>。マクシモスは、キリストが十字架の死に至るまで貫かれた徹底的な愛こそ、悪を滅ぼす神の力であると説いている。

## 2.2 悪霊<sup>47</sup>

悪霊は、ギリシア語でダイモニオン (daimonion)、ラテン語でデーモン (daemon) と呼ばれ、人間や社会に不幸・災厄をもたらすと信じられている霊的存在、またはその力を指すものとされてきた。

### 宗教史における悪霊

古代オリエントにおいて悪霊の存在を信じることは、善なる霊の存在を信じるのと同様に非常に古い事柄であった。バビロニアの天地開闢物語『エヌマ・エリシュ』<sup>48</sup>には、既に互いに戦う二つの神々の集団が述べられている(マルドゥク神とティアマト神)。神々を善と悪に分けることはインドを経てイランに渡り、宇宙を天と陰府に分ける多くの民族の信仰に反映されていったとされる。人々は悪霊を恐れ、祈りを捧げてこれを宥めようとした。他方、一神教においては、万物の創造主なる神への信頼によって悪霊に対する恐れは取り払われる。

### 聖書における悪霊

聖書では人に災いをもたらし、罪に誘惑することで人に害を加える悪い霊的存在のことを広く悪霊と呼んでいる。神の命令に従って罪人を罰する使い(出12:23)や人に害を加えない幽霊や亡霊は悪霊とは言われていない。古代ギリシ

<sup>46</sup> 小高毅編『原典古代キリスト教思想史』2ギリシア教父(教文館、2000年)p.495。

<sup>47</sup> 『新カトリック大辞典』p.89-91から要約した。

<sup>48</sup> 『筑摩世界文学大系1 古代オリエント集』(筑摩書房、1978年)p.105-133。

アでダイモニア (daimonia) と呼ばれたものは、元来、悪霊とは異なったものとして考えられていた。歳月を経るうちに言葉の意味が変化したのであろう。

旧約聖書においては悪霊を指す総称は見られない。Ruah ra'a「陰悪な空気」は、元来は罰として神から送られる性情を指している(士 9:23 の「陰悪な空気」は敵意の意味である)が、列王記上 22:21 に至っては通常の用法となる人格的語法がみられる。70 人訳ギリシア語聖書で daimonia と訳される sed (申 32:17; 詩 106:37) と sair の他、固有名詞として「夜の魔女」(lilit; イザ 34:14)、アザゼル (azzel; レビ 16:8, 10, 26)、「アスモダイ」(asmodaios; トビ 3:8) がみられる。ヨブ記 1-2 章、ゼカリヤ書 3:1 のサタン (has-satan) という名称は普通名詞から固有名詞に転化していく段階にあるといわれる。

人々に様々な災害をもたらすダイモニア (daimonia) は、旧約聖書ではあまり重要な役割を果たしていないが、sed という語が次第に一層広い意味で用いられるようになった。既に申命記 32:17 に「イスラエル人は、主(ヤハウェ)でない鬼神(sedim)に、以前は知られていなかった神々に犠牲をささげた」と書かれており、ここでの sed という名称が、鬼神という古来の意味を失い異邦人の神々を蔑称するものとして用いられている(代下 11:15; ホセ 11:2; 詩 106:37; 王下 23:10; バル 4:7 参照)。すなわち、万物の創造主である唯一の神への信仰が確立すると同時に、周辺の諸民族のヤハウェに反対する神々は被造物とみなされ悪霊とされた。ラビたちの解釈によれば、悪霊はもともと良い天使であり、神から世界の 70 の民族(創 10 章)を治めるよう託されたが、神に不従順になり託された民族を迷信へ導いたので悪霊となったとされている。

ダニエル書 7:3-12 の 4 頭の獣も、当時の四つの大国を治める神々、すなわち悪霊のことであると言われる。この悪霊は人々を神から遠ざけ、神の業を妨害する存在である。このような広い意味で悪霊のことを捉えるなら、既にバビロン捕囚期以前のイスラエルにおいて、悪霊が重要な役割を演じていたことが認められる。事実、列王記上 11:7-23 で、他国の神々への祭儀が北イスラエル王国の破滅の主な原因とされている。

同じことは、南ユダ王国に関しても言える(王下 23:4-20)。バビロン捕囚期

以後のユダヤ人は、もはやイスラエルの神以外の神々を礼拝することはなくなかったが、逆に悪霊に対する恐れは増していったようである。その契機となったのがペルシアの二元論との出会いであったと言われるが、確証はなくその影響があったとしてもイスラエル人が古来持っていた信仰に適応した形で解釈され受け取られていったと考えられる。

了解しておくべきことは、旧約聖書のエピソードには悪魔憑きの現象はみられず、病気が悪霊のせいとされることもみられないということである。

旧約・新約両聖書の間中期 (A. D. 200-B. C. 100 年) に成立した聖書外典偽典では、悪霊への言及が特に多く、悪霊が人を罪へ誘うこと、墮罪した天使であること、一人の頭 (悪魔) の支配下にあること等、聖書で暗示されていたことが明確に述べられている。『死海文書』も、まことの霊も偽りの霊も唯一の神からのものであることを確認している (1QS 3:15)。その上で、二つの霊の教えを展開し (1QS 3:13-4:26)、しばしば悪霊、特にその頭ベリアルについて述べている。

ラビ文学でも、悪霊に言及するハガダーが少なくなく、害毒を流す者 *mazzikim*, 汚れた霊 *ruhót tuma* 等の従来見られなかった新しい名称が出てくる。ラビ・ヨハナーン (279 年没) は、約 300 種の悪霊を知っていることを誇っている (Strack-B. 4:509 e)。またラビたちは、あらゆる病気を悪霊の働きに帰している。この時期に至っては、ユダヤの民もラビたちも悪霊の存在を疑っていないが、ラビたちは、神の選民にとって悪霊を恐れる必要がないことを強調するために、意図的に悪霊を軽視するような話し方を用いている。

新約聖書は、古代ユダヤ教の悪霊観を受け継いでいるものの、強調点が変わり新しい見方が現れている。新約聖書によれば、悪霊は一人の頭の下にある集団 (「国」, ルカ 11:18) をなしており、その頭である悪魔は仲間とともに神の国を妨害しようとする。特に福音書では、悪霊は病気を引き起こすものとして語られている (病人は時に悪魔憑きだとみられている箇所がある)。パウロの手紙では旧約聖書と同じく、異邦人の神々が悪霊と同一視されている (1 コリ 10:20-21)。パウロの言及する「諸々の権威と権力」 (1 コリ 15:24; エフェ 6:12;

コロ 2:15) は、*ダイモニア* (daimonia) と呼ばれてはいないものの、その一部は悪霊とみなされている。ヨハネによれば、この世はサタンという悪い霊の支配下にある (ヨハ 12:31; 1 ヨハ 5:19 等)。イエスは悪霊を追い払うことによって悪魔の支配を終わらせ、神の国の到来、神の支配を確立することが自らの使命であることを示しており (マタ 12:28)、自らが強い者 (悪魔) を縛る、より強い者であると示している (ルカ 11:21)。

### 考察

聖書には悪霊に関する言及はあるが、体系的な教えとしては述べられていない。それ故、種々の問題が未解決のまま残されている。それらに取り組むのが、所謂キリスト教神学の悪霊論である。悪霊の概念は歴史的には、神の啓示が与えられる以前に既にあった神話に遡るものであるが、だからといって古代人の空想の産物に過ぎないと断定してよいものでもない。悪とされる事柄が偶然に働く自然の力として説明し尽くせるものではないことは、人類の経験によって確知されているだろう。さらに悪魔、悪霊の存在が、全ての時代のあらゆる民族に共通して信じられていたことも、その存在に何らかの根拠があるということを示している。他方、神話の具体的な表現は、時代状況に制約されたものであり適正な非神話化が求められる。悪霊の存在に対する確実な認識は、神の啓示によるものである。この啓示は旧約に始まり、イエスにおいて頂点に達する。イエスにとっては、悪魔とその「手下」(マタ 25:41) を打ち破ることは、神の国を建てるという使命と表裏をなしている (ヨハ 12:31)。したがって人格的な存在としての悪魔・悪霊を、すべて単なる悪のシンボルや観念あるいはただの病気とみなすことは、イエスの意図に反することとなるのであろう。

悪霊の起源に関して言えば、キリスト教においては、唯一の神とは別の絶対者は認められない。そのため、悪霊は神によって本来良い霊として創造され、自分の意志によって悪を選び、天使の位置から悪霊の位置に転じたものであると言うべきだとされた (DS800)。墮罪の動機は高慢あるいは不従順であった。神に反逆し罪を犯したとは言え、悪霊には当分の間、かなりの力があり、人間

を試練や罪に導くためにその力を利用するのである。悪霊は神の敵であるが、神は彼らの働きを正しい目的のために利用し、救いの計画に組み込んでみている。しかし悪霊の意志は、永久に悪に固着しており、回心の可能性が無いことから、悪霊は永久に神の罰を受けるように定められている存在とされる（2ペト 2:4, DS411）。彼らが罰を受ける場所である地獄とその状態である炎（マタ 25:41）などは、ある程度比喩的に解釈されるべきであるが、悪霊の存在そのものは、教会内であって、初代から現代に至るまで認められており、そのことは聖書も聖なる伝承も教えるところである。

### 2. 3 聖書における悪魔憑きと祓魔<sup>49</sup>

聖書において、悪魔憑き（悪霊の憑依）という現象は、主に新約聖書、特に福音書において知られるものである。福音書は病気と悪霊による苦しみを区別している（マタ 8:16, マコ 1:32）一方で、イエスが治した病気のいくつかは悪霊の憑依、あるいはその働きに帰せられている。その場合、治癒は被害者に取り憑いている悪霊を追い払うこととして説明される。ただし古代の中近東における悪魔憑きは、宗教史が伝えるより大きな枠に属する現象である。

#### 宗教史における悪魔憑き

既に古代バビロニアにおいてシュメール人は、悪霊の存在を信じていただけでなく、病気をもたらすとされていた悪魔憑きの存在を知っており、さらにそれを治すための祓魔式も知っていたという。シャーマニズムでは、洋の東西を問わず、悪霊と善霊の憑依が、意図的に求められる呪術として利用されている。

古代ギリシアの哲学者たち、プラトンやプルタルコスなどは、デルフォイのピュティア（種々の場所にいたシビラもそうであった）の靈感を一種の神憑りのようなものとして説明していた。

---

<sup>49</sup> 『新カトリック大辞典』p. 86-88 から要約した。

## 聖書における悪魔憑きと祓魔

バビロン捕囚期以前のイスラエルの預言者の「狂気」(サム上 10:5-7) も神的な霊に憑かれたものと考えられていたが、それとは異なり啓示を伝えた預言者は、一定の自由さを保持していた点に注意したい。サムエル記上の第 28 章に描かれた巫術は、カナンの異教的信仰の名残であり、憑依した悪霊の力を利用する魔術と考えられていた。したがって一種の悪魔憑き、悪霊憑きとして理解された。その悪霊は、亡霊を出現させる力を持っていたとも言える(サム上 28:7)。

以上の例を別にすれば、旧約聖書には悪魔憑きの現象は見当たらない。トビト記(3:8, 6:14-15)では、悪霊アスモダイ(asmodaios)が破滅をもたらすと述べられてはいるが、それは狭い意味での悪魔憑き(憑依現象)によるものではない。

このため福音書に多数の悪魔憑きの話が出てくるのは注目に値する。イエスだけでなく当時のユダヤ人の学者達も悪霊を追い払っていた。ヨセフスの『ユダヤ戦記』(8,2,3)や『死海文書』(11 洞穴出土の詩編写本)などが良い例である。悪魔祓いで生計を立てていた祓魔師もいたと考えられている。その祓魔式は、バビロン捕囚以後、シュメール地方から伝わったものが起源であった可能性が考えられている。イエスは元来そのような祓魔師でも巡回医師でもなかった。彼は神の国を宣言する預言者であり、悪霊を追い出し病人を無償で癒したのはイエス自身の到来そのものにおいて神の支配が近づいたこと、自らが神の使者であることを示すため、あるいは神の権能を示すためであった(マタ 12:38)。それでイエスは、病気の原因とされていた悪霊(ルカ 13:16, ヨハ 9:3)を追い払うことで癒しをおこなったのである。同じ目的で、イエスは弟子達に悪霊を追い出す権能を授けた(マコ 3:15)。それゆえ使徒達は祓魔師や医師の業を受け継いだのではなく、その神적権能を受け継いだと言ったほうがよい。しかし悪霊を追い払うのはイエスの弟子だけでなかった。イエスの名(力、本性)こそが悪霊を追い出す力そのものだったのである(マコ 9:38)。

人々が、病気の多くあるいは全部を悪魔の働きに帰したのは、一概にまだ原始的段階にあった医学のためだとも言えるだろう。しかしそればかりでなく、



そうすることが信仰に基づいた説明だと思われたからでもあるだろう。悪魔を宗教的手段によって追い払うことができると了解されて以後、あらゆる病気を悪魔に憑かれたこととみなす傾向が生まれたと考えられる。

## 考察

悪魔憑きとは、サタンによって人がその意思を支配され、罪深さ、全人的混乱が、一般的な墮落、混乱の度合いを越えてしまっているという意味で、その原因が自然本来の理法を越えた力の中にあるものみなされる現象と言える。それはまた、サタンが知性を混乱させ、混乱した知性を回復させることが容易にできないという状態を意味するだろうし、サタンが人の理性をも混乱させるということでもある。それどころか単純で迷信的な人々が、「魔性への感染」と同義である「精神の錯乱」を誤って起こしてしまうということとも言い得る。

新約聖書に述べられている悪魔憑きには、悪魔による虐待として、悪魔が人間の視力・聴力・発語力、または一般的な肉体の働きを支配し、人間の肉体に起こされる様々な障害としても表されている（マコ 5:1 参照）。

中世には「悪魔に取り憑かれた者と洗礼を受けていない者の間に大きな区別はない」とする考えがあったようである。セビリヤのイシドルスは両者を同等と見なし、エクソシズムこそが洗礼志願者や悪魔に取り憑かれている人々の中から悪魔のひどく邪悪な影響を消滅させる儀式であると述べている。

トマス・アクィナスの考えに従えば、悪魔祓いは洗礼を相応しく受けるための妨げを取り去るために行われるものである。つまり洗礼を受けていない状態は、まだ悪の支配、原罪の状態にとどまったままでいることであり、洗礼を受けた人は恵みによって既に罪から清められ、もはや悪魔の支配下にはないことになる。決定的な信仰による義化がなされていることの重要性からすれば、確かにイシドルスの言うこともそれなりに正しいと言えるが、それにも関わらず洗礼を受けた信仰者に悪霊が憑依するという現実はどう考えればいいのか。それも不信仰でない人物にさえ悪霊が憑依する可能性をどう考えればよいのだろうか。

かつてのように、「悪魔の憑依は、ひどい罪人が必ず受ける神聖な天罰である」という誤った考えが公式の文書に見られることはもはやない。神は、ご自身の意志においてこのように残忍な悪のはたらきをある程度許しているのであり、必ずしも苦しめられている人に過失があるとも限らないのである。罪の奴隷に陥ることと、肉体的、精神的に苦しめられること、悪魔が人間の体に入り込んでその人を苦しめることとは別ものだと近代以降の教会は考えるようになった。

### 第3章 エクソシズムの儀式—新儀式書公布までの歴史の変遷

#### 3.1 古代ユダヤ教における悪魔祓いとイエスの悪魔祓い

前章において悪魔や悪霊、それらを追い払う祓魔式は、本来ユダヤ教的なものではなく、バビロン捕囚期以降、比較的新しい時代にバビロニアをはじめとする地方から流入してきた習俗であろうとの見解を得た。ここからは、まず死海文書におけるイエスの生きた時代のイスラエルの悪魔祓いに関してまとめておきたい<sup>50</sup>。

死海文書の中に、特に第 11 洞窟出土の偽典の詩編に悪霊に憑かれた人のために歌う詩ないし祈りがある<sup>51</sup>。これは発表以来あまり注目されずにきたが、1998 年に E. ピュエシュの研究によって福音書にあるイエスの悪霊払いとの関連が指摘された。この断片は、第 4 洞窟出土の賢人の歌 (4Q 510-511) と同類の文書で、クムラン教団で悪霊憑きや病人のために行われていた癒しの習慣をうかがわせるものである。実際に F. ヨセフスはエッセネ派が癒しの業に長けていたことを伝えている。「彼らは古人の書物を異常な熱意をもって研究し、特に魂と肉体の益になるような部分を選び出す。これらの書物から彼らは病気の治癒に役立つように、薬となる根や石の特性を探求する」(『戦記』II, 136)。他方、悪霊や病魔に冒され、あるいは冒されないように願って、当時の庶民が占いや呪いに頼ろうとしていたことは容易に推察できる。実際にそのような場合に用いられていた魔除けや呪いの機具や文書も発見されている。クムランの洞

<sup>50</sup> 和田幹男師のホームページ <http://mikio.wada.catholic.ne.jp/QMRN-nt.html#10> 参照。

<sup>51</sup> 同上、第 11 洞窟出土偽典詩編 A。

窟で発見された悪霊祓いの詩ないし祈りは、それと関連していると考えられる。それによってイエスが悪霊を追い払い、病を癒して活動した当時の一般庶民の世界観をうかがい知ることができる

これらの悪魔祓いの詩は、その内容としてユダヤ教において詩編 91 を利用しているという習慣（キリスト教も同様）から、悪霊に憑かれた人から悪霊を追い払ったり、悪霊に憑かれないように予防したりするためのものであったことが分かる。この悪霊祓いの詩の中で、光と闇、天軍の将軍ミカエルと闇の将軍ベリアル、真理の霊とサタンが相対立し、その両者の戦いがそれぞれの人間の中で裁きのときまで行われるということが中心的な考えである。そのため人間は主（ヤハウエ）の名を呼び求め助けてもらう必要がある。その意味で教会の悪魔祓いの祈りにおいては主の名を唱えるところに核心があると言えよう。

新約聖書では、イエスやその弟子たちが行った悪魔祓いや病の癒しが語られているが、その際、特徴的なのは、「ヤハウエの名によって」行われることはなく、イエス自身の名、権威をもって悪霊が追い払われていることである（マコ 1:21-28; 5:1-20; 9:14-29 など）。またその弟子たちは、イエスの名によってそれを行っている（ルカ 10:17-20; 使 36:16 など）。つまりイエスもその弟子たちも主（ヤハウエ）の名によってではなく、イエスご自身の名によって悪魔祓いを行ったのである。その意味で、イエスの悪魔祓いは、それまでの単なる悪魔祓いとは決定的に異なるものと言える。これは、イエスにおける神ご自身の力の顕現であり、神の救いの業そのものというべきである。特にマコ 9:38 やルカ 10:17 において使徒ではない人々も、イエスの名によって悪霊を追い払うことができたという記述は注目し値する。カトリック教会の秘跡に関する神学的な理論や法制度はさておき、聖書において明らかなことは、個人の立場や力ではなくイエスの名こそが絶対的な力を持つものであることがわかる。

### 3. 2 古代教会におけるエクソシズム——その起源と発展

イエスのおこなった悪魔祓いは使徒時代の後、古代教会に継承されていった。勿論、これまで見てきたように、古代、中世を通じて民間信仰の一種の呪いと

も何らかの関連があった可能性は否定できない。しかし仮にそうであったとしても、原始教会は、他の諸秘跡の起源と同じく古代の民間信仰の術であったであろう悪魔祓いをイエスの力に寄り頼む信仰の業として発展させていったと考えるのは妥当であると思う。

### 教父たちの証言

殉教者ユスティノスは、『第2弁明』6項<sup>52</sup>において「世界中で、またあなたがたの都で、おびただしい数の悪霊憑きが見受けられます。他のあらゆる悪魔祓いや呪術師、魔術師によって癒されなかったこれらの人々のために、私どもの信者、キリスト教徒の中の多くのものが、ポンティオ・ピラトのもとで十字架に付けられたイエス・キリストの名によって悪魔を追放し癒しを施し、今日もなおそれを続けている」と述べている。また、テルトゥリアヌスは『護教論』37:9で、「至る所に隠れていてあなた方の心と体を痛めつけているあなた方の敵—つまり襲い掛かる悪魔達—から一体だれがあなたがたを引き離すことが出来るだろうか？我々はそれらを報酬なしで追い出している」<sup>53</sup>と言い、また同書23:15では「悪霊に対するこうした我々の優越性や力の全てはキリストの名から出ている」<sup>54</sup>と言っている。さらにオリゲネスは、『ケルソス駁論』(1, 25)<sup>55</sup>において「イエスの名が無数の精霊達を魂と身体から追い出し、彼によって精霊を追い出してもらった人々に効力を発揮した」と記している。またラクタンティウスは『神の教程概要』(4, 27; 46, 7)<sup>56</sup>で「悪魔どもの全軍がこの十字架のしるしによって駆逐され闘争させられる時、このしるしにどれほどの力があり、いかなる権能を有しているかが明白になる。……今も同じようにその受難を受けた方の名と受難のしるしによって穢れた霊どもは駆逐される」と語つ

<sup>52</sup> 柴田有、小田敏雄訳『キリスト教教父著作集』第1巻（教文館、1992年）p. 147-148 参照。

<sup>53</sup> 鈴木一郎訳『キリスト教教父著作集』第14巻（教文館、1987年）p. 88 参照。

<sup>54</sup> 同上 p. 67 参照。

<sup>55</sup> 出村みや子訳『キリスト教教父著作集』第8巻（教文館、1987年）p. 31 参照。

<sup>56</sup> 前出『原典古代キリスト教思想史』3 ラテン教父 p. 23-25 参照。

ている。これらは全てイエスの名によって悪魔が追い払われていたことを証言するものである。

2世紀終わりのユスティノスや3世紀初期のテルトゥリアヌス、4世紀初期の殉教者聖ペトロらは、洗礼式とは別に、個々にエクソシズムをおこなっていたという記録が残っている。

また、古代の教会では香油、塩、灰、聖人の遺物などが悪魔祓いに用いられていたとも言われている<sup>57</sup>。

3世紀のヒポリトゥスの『使徒伝承』では、洗礼の際に全身に「悪魔追放のための油、闘いの油」を塗って悪霊の追放を宣言していたこと<sup>58</sup>が伝えられており、また4世紀のエルサレムのキュリロスは「全身に香油を注ぎ、魂と体とを清め、悪の力と戦う」<sup>59</sup>と言い、6世紀のジョヴァンニ・ディアーノは「聖なる塩がサタンを追い出し、肉を保存するかの如く魂を健全に、清く保つ」<sup>60</sup>と言っている。4世紀後半の司教セラピオンの祈祷書『エウコロギオン』からは、病者の為の油が祓魔の力を持つものとしても用いられていたことをうかがい知ることができる<sup>61</sup>。悪魔追放の油が他の聖油とどのように区別されるものなのかは

<sup>57</sup> 前出 *An Exorcist Tells His Story*, p. 117 参照。

<sup>58</sup> 前出『使徒伝承』 p. 47 参照。この宣言が *exorchizo* でエクソシズムの語源とされる。

<sup>59</sup> 前出中世思想原典集成2『盛期ギリシア教父』 p. 150-151 参照。

<sup>60</sup> 前出『エクソシストとの対話』 p. 56 にローマ地区エクソシスト協会会長であった御受難会司祭 G.アモルス師の証言がある。

<sup>61</sup> 西脇純『古代教会における「病者の塗油」』（『南山神学』25号,2001年） p.23 に掲載されている次の病者の油の祝別の祈りを参照。「私達は、全ての権能と力をお持ちであるあなた、全人類の救い主、私たちの主、救い主イエス・キリストの父であるあなたを呼び求め、あなたのひとり子の癒しの力を天からこの油に送って下さいますように祈ります。この油が、塗油される人々、あるいはこのあなたの被造物に与る人々にとって、あらゆる病気と患いの特効薬、あらゆる悪霊に対する拮抗薬[となり]、全ての汚れた霊を駆逐し、全ての邪悪な霊を追い払い、全ての熱、悪寒、いかなる衰弱も取り除き、よき恵み、罪のめろし、命と救いの治療薬、魂と体と精神の全き健康と清浄とに資するものとなりますように。主よ、あらゆる悪辣なはたらき、あらゆる悪霊、待ち伏すあらゆる敵、あらゆる災難、あらゆる災厄、痛み、煩わし、打撃、忌むべきことからの悪しき影が、あなたの聖なる名を怖れますように。その名とひとり子の名を今私たちは呼び求めます。[悪霊たちが] これらあなたのしもべたちの内と外から遠ざかり、私達のために十字架につけられ復活なさった方、私たちの病と弱さを身に負われた方イエス・キリスト（マタ 8:17 参照）、生ける者と死せる者とを裁くために来られる方の名がたたえら

判然としない点が残るが、現在の洗礼志願者の油がそれに相当すると言える。

祓魔式に聖水を用いる習慣は5, 6世紀頃からと言われている。ちなみに塩を用いる習慣はローマ典礼の洗礼式では、ごく最近まであったが<sup>62</sup>第二バチカン公会議後に削除された<sup>63</sup>。

3世紀以降、教会では厳密な意味での悪魔祓いとは異なる、洗礼及び様々な祝別式の一要素としての種々の悪魔祓いの式が行われるようになっていったようである。ヒッポリトスの『使徒伝承』などから、3世紀初期には洗礼において悪魔祓いの役割を担った祓魔師が役務者として教会内に存在していたことが判る。神の国に受け入れられる以前に、人は悪魔の支配下にある（エフェ 2:1-2; コロ 2:13）と考えられていたので、洗礼による悪魔の支配からの決別を一種の悪魔祓いの式で表現するために、洗礼志願者に対して幾つかの「悪魔祓いの祈り」が古くから唱えられていた様子が幾つかの資料からうかがえる<sup>64</sup>。典礼に用いる場所や物（聖水、塩、聖香油）の祝別の際も、悪魔祓いの意味合いを含む祈りが行われた<sup>65</sup>。信仰心をもって悪魔の働きから守られるように、それらの祝別されたものを準秘跡などの祈りに用いていたのである。

そもそも初期の教会におけるエクソシズムは、先ほどの教父たちの文書に見られるように、十字架の印という行為の内に既に始まり、主にイエスの名において祈願し、さらにサタンに対する拒絶、神への嘆願、神からの脅しがサタンに対して述べられた。古来、悪魔の働きから守られるように神に求める、私的あるいは公的な祈りがあったようである。忘れてはならないのは主の祈りの最後の願いである。「私たちを悪から救って下さい」（マタ 6:13）は代表的な文言と言える。そこで言われている「悪」（*ho poneros*）とは悪魔を意味していると

---

れますように。彼〔イエス・キリスト〕を通して聖霊のうちに栄光と力が今も世々にあなたにあるからです。」

<sup>62</sup> 前出 *Rituale Romanum*, edition octava, Titulus II, *Ordo Baptismi Adultorum*, p. 43 参照。

<sup>63</sup> *Ordo initiationis christianae adultorum*, Libreria Editrice Vaticana, 1972.

<sup>64</sup> I. H. ダルメ『秘義と象徴』—東方典礼への招き—（市瀬英昭訳、新世社、2002年）p. 78-84 参照。

<sup>65</sup> 『大グレゴリオ秘跡書』 PL121-847. CXII 参照。

理解されてきた。

古代では十字架のしるしが悪魔に対する絶大な効果があると信じられていたことを証言する記録は数多い。ヒッポリトゥス『使徒伝承』42項では「信仰をもってこの十字架のしるしをする限り、悪魔に立ち向かうための確かで力強いしるしとなる」と記されている。この他の多くの教父たちの証言もあるので、ここに少しだけ例を挙げておく。

例えば、神学者テルトゥリアヌス（160-225年頃）は、一日中、十字架のしるしを自分にしていた信仰者たちの日常的慣行について以下のように述べている。「旅行や何らかの活動をするときはいつでも、帰宅するとき、外出するときはいつでも、また靴を履くとき、入浴するとき、食卓につくとき、明かりをつけるとき、横になるとき、座るとき、またどんな仕事をしているときでも、私たちは額に十字架のしるしをするのです」<sup>66</sup>。

別の初期キリスト信者たちは、十字架のしるしは、神に忠実な民を他と区別し、魂が誘惑と戦うときにそれを助け、自分たちを全ての悪から守り、さらに悪魔を恐れさせるものであると理解していた。たとえばヨハネ・クリズトモ（347-407年）は、十字架のしるしに見いだされるキリストの力を絶えず頼みとするように、神の民に強く勧めていた。「十字架のしるしをすることなく、決して家を出てはなりません。そのしるしは、あなたにとって杖であり、武器であり、堅固な要塞であるでしょう。あなたがその強力な鎧を身にまとっているのを見て、あなたをあえて攻撃しようとする人や悪魔などいないでしょう。あなたは、この（十字架の）しるしによって（キリストの）兵士となり、悪魔と格闘する備えと正義の冠のために戦う備えとができていることをこのしるしから学びなさい。十字架が何をしたのか知らないのですか。死を打ち破り、罪を滅ぼし、地獄を空しくし、サタンを退け、森羅万象を立て直したのです。それでも、あなたたちはその力を疑うつもりですか。」<sup>67</sup>

<sup>66</sup> テルトゥリアヌス『兵士の冠について』30項（木寺廉太訳『テルトゥリアヌス4 倫理論集』[教文館、2002年] p. 291）。

<sup>67</sup> ヨハネス・クリズトモス『洗礼志願者のための教理講話』2, 5。

エルサレムのキュリロス（315年頃-386年）は、十字架のしるしの2つの側面、すなわち区別の側面と保護の側面を特筆し、その儀式的行為を「信じる者たちの記章」、また私たちに害を与えるようとする「悪魔にとっての恐怖」と呼んでいる。「私たちのしるしとして、指で額に十字を大胆に切りましょう。そしてあらゆる機会に、私たちが食べるパンの上に、私たちが飲む杯の上に。帰宅するときと外出するとき。眠る前に。横になるときと起き上がるときに。どこかへ行く途中で、そしてじっとしているときに。十字架のしるしは、強力な守りの手段です。それは神からの恵みであり、信じる者たちの記章であり、悪魔にとっての恐怖だからです。……悪魔が十字架を目にすると、十字架にかけられた方のことを思い出し、『竜の頭を砕かれた』方を恐れるからです。」

68

ところで、個別の儀式としての盛儀の悪魔祓い（エクソシズム）の確立時期を詳細に確定することは困難である。上記に示したように、まず悪魔祓いがユダヤ教社会の中に既に存在していた事実があり、イエスはその所作を用いて、神の御業を現したのだとも言えるだろう。教父の証言に従えば、およそ2世紀後期には洗礼の際の儀式とは異なる独立したエクソシズムが行われていたことは確かである。しかしその起源については断定できない。恐らく、最初期においては、洗礼そのものがキリスト者にとって重要な儀式とされ、本来は洗礼とエクソシズムは別々のものであったが、かなり早い時期に（恐らく3世紀以前）併せられるようになったと考えるのが妥当ではないだろうか。現代のエクソシストである御受難会師アモルス神父らの説によれば、ローマにおいて独立したエクソシストが特権的な存在となったのは3世紀半ばとされている。<sup>69</sup> 417年には、教皇インノケンティウス1世が、エクソシズムを司祭個人が勝手に行う儀式ではなく、司教、あるいは司教から委任を受けた司祭に限るものとする教令を出している（これについては後述する）。それは確実にかつて下級聖品と呼

<sup>68</sup> エルサレムのキュリロス『教話』13, 36.

<sup>69</sup> *Notitiae*, vol. 35, 1999, p.165 および *Antiphon* 10. 1 (2006) 70-116; Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004)を参照。



ばれた洗礼のための祓魔師とは異なる存在であったと考えられる。いずれにせよ、4、5世紀には古代教会は各教区にエクソシストを擁していたということがうかがえる<sup>70</sup>。

### 3. 3 エクソシズムの儀式書の登場

具体的なエクソシズムの式文に関して言えば、ヒッポリトスの『使徒伝承』を除けば、現存する秘跡書では8世紀のフランスの『ゲラシウス秘跡書』、『ゲローヌ秘跡書』<sup>71</sup>として知られるものがエクソシズムの祈りを伝える最古のもののである。1614年の『ローマ儀式書』のエクソシズムの祈りのうち初めの2つ（エクソシズム A, B）は、この『ゲローヌ秘跡書』の中に既に精確に見出される。なお、『ゲローヌ秘跡書』からは「エクソシズムのための聖油」<sup>72</sup>というものが用いられていたことがわかる。

さらに9世紀に神学者アルクイヌスが補筆した『大グレゴリオ秘跡書』<sup>73</sup>では、旧版（1614年版）の『ローマ儀式書』のA, B, C 3つ全てのエクソシズムの式文が見出される。

具体的な秘跡書の形式ではないが、先にも述べたように3世紀初期のヒッポリトスの『使徒伝承』や4世紀初期のエルサレムのキュリロスの『秘義教話』<sup>74</sup>には、古代教会の洗礼式の際に行なわれていたエクソシズムの様子が記録されている。それによると当時の洗礼式におけるエクソシズムは、現代と同じく、憑依した悪魔を追い払うのではなく悪魔の影響から志願者を保護するといったニュアンスのものであったことが判る。

一方で、殉教者聖チブリアヌスが行なったエクソシズムの言葉として「キリ

<sup>70</sup> *Epistola XXV*, in J.P. Migne, *Patrologiae Latinae cursus completus* [= PL], XX, Parisii 1845, 558.

<sup>71</sup> 『ゲローヌ秘跡書』（フランス国立図書館蔵, Lat. 12048, f. 1 v.）8世紀後半、メロヴィング朝の頃にブルゴーニュのフラヴィニー修道院で作られ9世紀になってゲローヌ修道院で典礼に使われたことから、この名がついた。

<sup>72</sup> *Notitiae*, vol. 35, 1999, p. 166 参照。

<sup>73</sup> PL 121:854-58.

<sup>74</sup> *Catechesis mystagogica*, 4, 1:Sch 126bis, 134.

ストの受難、復活と昇天の神秘によって、また天使、父祖、預言者、殉教者、名のある聖人と聖女の力と祈りによって悪魔を追い払う」というものが伝わっている<sup>75</sup>。これは後のエクソシズムの儀式書の祈りとして伝えられている。

さらに、ヨハネス・クリゾストモスの『洗礼についての講話』などに見られるように、当時の洗礼式のエクソシズムは、現代よりもずっと現実的な意味で悪魔の脅威から受洗者が退けられるように「天の主を自らの内に据えるよう敬神の年を刻み、大いなる痛悔の念へと導くため」の式でもあった<sup>76</sup>。またヒッポリトスの『使徒伝承』20項にある洗礼の際の悪魔祓いは、志願者の内に住んでいる悪魔を払うという意味内容をも明確に含んでいる。

### 3. 4 中世の教会におけるエクソシズム

#### 聖フランシスコの悪魔祓い

ごく初期の頃のフランシスコ修道会の活動は「平和の代表団」として知られていた（1 Cel 24）<sup>77</sup>。創始者の聖フランシスコは、暴力は悪魔の心を喜ばせると主張し、争いに引き裂かれたアレッツォの町の悪魔払いをしたことでも知られている。その様子を描いたジョットの壁画がアッシジの大聖堂に残っている<sup>78</sup>。それは彼が、暴力を悪魔に取り憑かれた者のしるしとみなしていたからである（2Ce 1108）。ただしフランシスコ自身が司祭ではなく助際であったことは現代の秘跡神学的、教会法神学的には問題があるかもしれない。フランシスコは主が彼に平和の挨拶を示してくださったと確信していた。彼の著作の中で彼が一番注意するよう警告した悪徳とは、自分自身の内部にあり、他人の内部にもある平和を破壊する心、すなわち傲慢、貪欲、不遜、虚栄、嫉妬、誹謗、そし

<sup>75</sup> “Orationes exorcisticae Cypriani martyris”, in *Enchiridion euchologicum*, ed. Lodi, §§ 674-78, p. 431-440 参照。

<sup>76</sup> 前出『原典古代キリスト教思想史』2ギリシア教父, p. 300-307 参照。

<sup>77</sup> 下記のサイトに掲載されているフランシスカン資料集を参照 <http://www.ofm-jpic.org/handbook/japanese/JPIC-JapaneseAll.pdf>

<sup>78</sup> ブルーノ・ドツィーニ編、『ジョット』—アッシジ大聖堂聖フランシスコの伝説— (Editrice Minerva Assisi, 1994) p. 26 の図を参照。

て他者を赦すことのできない心であったという。

## 七つの罪源

これらの悪徳について同時代のトマス・アクィナスは、その著作の中で、キリスト教徒の7つの枢要徳と対比する形で7つの「枢要罪」を挙げている。これは、4世紀のエジプトの修道士エヴァグリオス・ポンティコスの著作に初めてあらわれた8つの「枢要罪」が起源とされている。8つの枢要罪は厳しさの順序によると、暴食、色欲、強欲、憂鬱、憤怒、怠惰、虚飾、傲慢である。後に6世紀後半には教皇グレゴリウス1世により、8つから現在の7つに改められた。順序も現在の順序に仕上げられ、さらに「虚飾」は「傲慢」に含まれ、「怠惰」と「憂鬱」は1つの大罪となり「嫉妬」が追加されたという。

現代の『カトリック教会のカテキズム』では、七つの罪源（七つの大罪ではない）についてヨハネス・カッシアヌスやグレゴリウス1世以来伝統的に罪の源とみなされてきたものとして簡潔に言及されている（CCE1866）。伝統的な七つの罪とは以下のようなものであるが、その原因として悪魔の働きを信じていた事が判る。しかし、個々の罪に対応する7つの悪魔の名称は単なる迷信、あるいはこじつけのようにも思われる。

1. 傲慢、司る悪魔はルシファーまたはベリアル。
2. 嫉妬、司る悪魔はレヴィヤタン。
3. 憤怒、司る悪魔はサタン。
4. 怠惰、司る悪魔はベルフェゴール又はアスタロス。
5. 強欲、司る悪魔はマンモン。
6. 暴食、司る悪魔はベルゼブル。
7. 色欲、司る悪魔はアスモダイ。

## 異端審問と魔女狩り

しかしルネッサンス期とも呼ばれる中世時代、特に14-17世紀の間、ヨーロッパでは魔女狩りと称して悪魔に憑かれているとみなされた人々に対して異端

審問を行い次々と火刑に処していった歴史があった<sup>79</sup>。処刑されていった人々は、悪魔憑きとされていたにもかかわらず、実際、本来の悪魔祓いの式はもはや行われていなかった、あるいは機能していなかったようである。すなわち教会の典礼、秘跡が形骸化していた時代にあつては、悪魔祓いそのものも迷信的な呪術とみなされていた可能性が強い。むしろ悪魔祓いと称する拷問や処刑をおこなったという言い方が正しいかもしれない（これは現代においてさえみられることである）。その時代は、もはや悪魔祓いが教会の祈り、癒しの業であるという意味合いは失われてしまっていたのであろう。本来、神の力により頼んで悪魔の働きを撲滅させるのが教会の役割であつたにも関わらず、教会の権威と称して暴力的な仕方では教会の原則から外れた人々を断罪していったのが中世であつた。魔女裁判と異端審問は、その起源からしても、本来は別ものであつたが、後代に同類のものに見られるようになっていった。ここからは注<sup>80</sup>に示した文献にしたがってその歴史をまとめる。

10世紀以前の教会は魔女という存在に非常に寛容であつたようである。しかも異端審問も、本来は信仰者を守るものであつて決して人を処刑するような代物ではなかつた。古代においては護教教父ラクタンティウスの次のような証言がある。「ただ宗教の内のみ自由はその真の場所を持つ。……何人もその人が崇めようと欲しないものを崇めよと要求することは出来ない。……我々は、キリスト教を守らねばならない。他人を殺すことによってではなく、我々自身が死ぬことによって。……もし君達が血と拷問と悪しきことによつてキリスト教を守っていると思うのなら、それは、もはやキリスト教を守るのではなく、それを汚し害することである（『神の教程概要』<sup>81</sup>）。」

ところが、トマス・アキナスは、『神学大全』の中で「教会は異端者を死の危険から救う必要は無い」とまで言うのだが、結局、修道院や大学において神

<sup>79</sup> 森島恒雄『魔女狩り』（岩波書店、1970年）、ジャン・ミシェル・サルマン『魔女狩り』（富樫環子訳、創元社、1991年）など参照。

<sup>80</sup> 前出、森島恒雄『魔女狩り』第2章参照。

<sup>81</sup> 高橋秀訳『キリスト教教父著作全集』第18巻。

学研究が盛んになり、現在にまで伝えられているような著名な神学者によって多くの書物が著された時代、それはまたルネッサンスという人文主義運動が展開された時代とも連なるが、まさにその直後の時代に一般社会における教会の真のはたらき、民衆の信仰を助けるはたらきそのものが脆弱化、形骸化していったのではないかと考えられる。

教会がこのように温かみを失ったのは、政治と宗教権力が一緒になった中世、特に13世紀頃であろうか。この時代は、また社会全体の権力者として形骸化していった位階制・制度で固められた教会に対する反対運動、改革運動とも言える動きがあった時代でもある。先ほども述べたように、教会は武力をもってそれを異端として鎮圧していた。教皇インノケンティウス3世のアルビ十字軍による異端弾圧に続いて、13世紀初頭に教皇グレゴリオ9世が「異教の地においてキリスト教以外の信仰および異端を排除するための裁判機関」であるところの異端審問所を設置したことで所謂暗黒時代が始まったともいえよう。

一方、魔女裁判は、記録の上では1275年フランスのトゥールーズで最初におこなわれ、被疑者であった老女は死刑にされた。魔女狩りを公に解禁したのは教皇ヨハネス22世の1318年の教書だとされているが、その後1484年12月には教皇インノケンティウス8世が『魔女教書』という文書を出し、異端者・妖術使いの跋扈を憂慮し、各地の司教や領主にその根絶を勧め、異端審問官の措置に協力するよう求めた。

魔女狩りを決定的なものとしたのは、ドイツのドミニコ会修道士ハインリッヒ・インスティトリスとヤコブ・シュプレンガーが異端審問官としてその名を馳せた著書『魔女に対する鉄槌 *Malleus maleficarum*』（1487年）である。これは1714年にプロイセンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム1世が魔女裁判を禁止するまで、およそ200年間にわたって魔女狩りの教典となり猛威を振るったものとされている。この本によれば、魔女が死刑にされるようになったのは、悪魔と結託したとされたためであった。しかし、形骸化した教会の典礼や役務において、エクソシズムがある意味で適切に執行されることはなかったのであろう。上述したとおり、それまで教会は、異端者として魔女を極刑に追いやる対象と

しては積極的に裁いていなかった。天候の不順、家畜の病気、害虫や疫病の発生といった現象は魔女のせいだとされ、無実の女性達が次々と残酷な方法で処刑されていった。魔女狩りは、中世の恐るべき狂信、異教徒への不寛容、老女や未亡人、社会の隅に追いやられていた弱者への残酷な偏見、病人への無理解だったとも言える<sup>82</sup>。このように魔女裁判は異端審問官によっておこなわれるようになった歴史がある。

魔女狩りの犠牲者数は正確には分かっていないが、数十万人から数百万人程度ともいわれる。当時の欧州の人口を考えれば、現代における民族紛争や内戦などに勝るものだったと言える。

犠牲者の年齢は10歳から94歳までと幅広く、男性も20-25%含まれていた。場所も欧州全土とあってよく、スウェーデンでは1669年にモーラとエルフデイルの裁判で300人の子供が火刑に処せられた。さらに驚くべきことに魔女狩りは大西洋を越えてアメリカにも飛び火した。

こうした魔女狩りという集団妄想的とも言える運動が生まれた背景として当時の生活を振り返る必要があるだろう。市民と農民の生活は禁欲と労働のみで、生活の範囲は狭く外出と言えば日曜に教会に行くことぐらいだったのかもしれない。市民法、行政制度の発達以前は、教会の制度がその役割を果たしていた。ほとんどの人々は文盲で迷信深く、教会が定める些細な規則に縛られ、教会に反論したり規則に反したりすれば最悪の場合死刑になった。

勿論、純粋な信仰心から魔女を許せないという気持ちもあったのかもしれないが、修道士達、聖職者達の出世欲・派閥争いも関係して、ルネサンス期以降は、財産接収目的で絶対君主の支配正当化の手段として魔女狩りなるものが珍重されたという面もあながち否定はできないだろう。魔女の「鑑定料」をとって荒稼ぎする聖職者さえいたという。

## 宗教改革以後の魔女狩りと異端審問

---

<sup>82</sup> アンドール・マッコール『中世の裏社会 その虚像と実像』（鈴木利章、尾崎秀夫訳、人文書院、1993年）第9章参照。

17 世紀終盤、魔女狩りは徐々に収束していった。それは啓蒙思想の隆盛や活版印刷の普及で教育が進み文盲率が下がったこと、宗教改革を経て中世の教会の権威が世俗権力に移っていったこと、さらに様々な教会の刷新運動などが原因と考えられている。

ところが、ジャン・ミシェル・サルマンの『魔女狩り』には次のような見解が見られる。「中世のイタリアやスペインの大部分はもとより、ブルターニュ、ラングドック、フォレーズでは魔女狩りはほとんど存在しなかった。」その原因は、異端審問所が正常に機能していた、あるいは都市ごとの審問所に対する市民の主張が確固としたものであったからだと考えられている。

1542 年に教皇パウル 3 世は、宗教裁判所の中央集権化を図るためローマに「検邪聖省」（現在の教理省）を設置した。この機関が少なくともイタリアにおいては初期に地方の異端審問官の行き過ぎた行動を抑制したと考えられる。1540—1900 年の間のイタリアの異端審問による処刑は全体の 4% に満たなかったと言う。

なお、スペインのイサベラ女王の聴罪司祭のトマス・デ・トルケマダは異端審問官として一万人余りの人々を火刑へ送った悪名高い人物であるが、彼はすぐに裁判にかけずエクソシズムを行ない解放された者を自由の身にしてやっていたという<sup>83</sup>。しかしこの情報の真偽がいかなるものかは不明である。

ところで、魔女狩りの犠牲者は、むしろ啓蒙主義、懐疑主義、合理主義へと発展していった国々、つまりドイツやオランダ、フランスで圧倒的に多かったとする研究結果がある。実に、カトリック教会において理性が尊重されスコラ哲学が盛んだった頃、そして錬金術といった科学的探究に向かって行った丁度同じ頃、実際の人々の信仰が脆弱化し迷信に走っていったのと非常に似ている。宗教改革で有名なマルティン・ルター（1483-1546）は魔女について次のように述べている。「魔女というのは、悪魔と寝るような悪い女で、人の牛乳を盗み、雷雨を起こし、山羊と箒にまたがり、マントを着て空を飛ぶ。大人が相手なら弓

---

<sup>83</sup> 前出『エクソシストとの対話』p. 55 参照。

矢で射たり、体を麻痺させたり、老衰させて殺したりする。乳飲み子をも激しくいたぶり、夫婦には淫乱を勧め、その他にも何でもやるのである」<sup>84</sup>。

後の時代からの結果論に過ぎないが、頑迷で腐敗した権力に代わって信仰の本筋を伝えようとしたプロテスタントの教師達でさえ、実は自らが熱心で真面目すぎる信仰者であったからか、不寛容で事実上自らの欠陥に気づくことはなかったのであろう。聖書に忠実かつ熱心な信仰者であった宗教改革者たちは、実はカトリック以上に熱心に魔女裁判を盛大におこなっていたことが知られている。既に見てきたように、14-15 世紀にカトリック教会において魔女裁判、異端審問というものが拡大していったわけであるが、しかしカトリックにおいて様々なバランスを持たせ沈静化するような動きが生じていったのに反して、オランダ、ドイツやイギリスを中心にしたプロテスタントのキリスト信者たちは、16 世紀以後もなお冷徹で残虐な魔女狩りを継承していったことは注目に値する。

魔女狩り、異端審問による殺戮が横行した理由は様々であろうが、この時期、教会の聖なる職務は形骸化し、勿論エクソシズムという悪魔の働きから解放を求める祈りの務めも殆ど機能してはいなかった。教会内の権威者が私利私欲に毒され聖務をおろそかにし、祈りと神の恵みによる解決ではなく人間の権力、愚かな知恵や手段、勝手な思い込み、恐怖に従って裁きを行い、本来守るべき真理と正義、人の命の尊厳をも軽んじるというこの上ない墮落した状態に陥っていた事実を認めるべきであろう。今日でさえこうした宗教としての恐ろしさは教会の中に根深くある。同時に混迷極まった教会が、信仰のあり方、実情を見つめ直し、異端審問や魔女狩りにブレーキをかけていったバランス感覚をも感じる。教会を刷新させた人々の中には、もちろん聖人として尊敬される人々をはじめ、多くの名もなき善良なる人々がいたはずである。このバランスをもたらしたものはひとえに聖霊の賜物と言えるが、カトリック教会が諸秘跡、そして位階的な教会教導職、そして聖なる伝承において、人間の業を超えた恩

---

<sup>84</sup> Diefenbach, Johann, *Der Hexenwahn*, 1886, S. 294



恵がもたらされ神の民を導くという信仰をどこかで保持していたからであろう。

### 聖ベネディクトのメダイと悪魔祓い

これまで述べてきたように、中世のカトリック教会におけるエクソシズムの儀式は、様々な民間信仰や迷信と絡み合い煩雑なものになっていた可能性がある。トリエント公会議までは、事実上おびただしい数と種類の所謂悪魔払いと称するものが存在していたと言われる。しかも、この時期の迷信や習慣は極端なものが多かったようである。中世ヨーロッパでは、悪魔は特定の物体を装って存在すると信じられていた。悪魔の憑依は、古くから癲癇やその他の精神異常及び肉体的障害とも混同されていた。その時代の悪魔祓いの儀式では、当事者はエクソシズムの間中、エクソシストと共にいなければならず、厳しい断食を順守し、口にできるのは聖水、塩、そして野菜のみで、新しい服を着用し、夫婦行為を自制しなければならないとされていた。エクソシストに対する禁止行為も同様に複雑なものであったようである。さらに14世紀頃には、既に迷信的で不思議な習わしが儀式に導入されていたと言われている。本来的に呪術的な傾向を持っていた悪魔祓いの儀式が、中世の墮落した教会においては、もはや適確に実施されることなど考えにくい。

ところで中世の魔除けの信心の例として、エクソシズムの儀式および種々の機会のお守りとして用いられるようになった信心用品で、現在でもよく見かける聖ベネディクトのメダイと言われるものがある<sup>85</sup>。

この聖ベネディクトのメダイが広まったのは、ベネディクト会修道士となり、やがて教皇レオ9世となったブルーノが青年時代に体験した奇跡的な治癒によるものと言われている。教皇は常に聖ベネディクトを良き死の保護者として呼び求めたという。中世以来、聖ベネディクトのメダイは地獄の悪魔に対する並外れた力を持つことで知られるようになっていった。それは、もともと聖ベネディクトが、聖なる十字架と磔にされたイエスに対して深い尊敬を持っており、

---

<sup>85</sup> 聖ベネディクトのメダイについては <http://members3.tsukaeru.net/hoarun/mob.html> のサイトに詳細な説明がある。

十字架のしるしによって多くの奇跡を起こし、闇の霊を超える大きな力を発揮していたという故事に由来している。大教皇聖グレゴリオは、聖ベネディクトの行った「十字架のしるし」には悪魔たちの攻撃に対する特別な効力があると信じていたと言われている。

古来ベネディクト会士によって祓魔式の時に用いられていたメダイは、嵐、毒、疫病、悪魔の軍団などに対する力を持つものとされてきた。

メダイの正面の中央には聖なる十字架と、会則などを記した書を手にしている聖ベネディクトの姿が刻まれており、また円周内の聖人像の左右に表記されている *Crux S. Patris Benedicti* は「教父ベネディクトの聖なる十字架」という意味である。外円の *Eius in obitu nostro presentia muniamur* は「臨終において我らを護り給え」という意味である。

聖人に向かって左下には、聖ベネディクトがかつて奇蹟的に回避した毒入り葡萄酒の杯（砕けた杯から蛇が現れたと言われている）があり、向かって右下には毒入りパンを取り去ったとされるカラスの姿がある。

メダイ裏面の円周内には聖なる十字架が配置されている。十字架内部の垂直の縦文字 *CSSML* は *Crux Sacra Sit Mihi Lux* の略で、「聖なる十字架がわがための光となれ」という意味である。水平の横文字 *NDSMD* は *Non Draco Sit Mihi Dux* の略で、「龍をわが導き手とさせじ」という意味である。内円中の十字架を囲む *CSPB* は *Crux Sancti Patris Benedicti* の略で、正面のものと同じく「教父ベネディクトの聖なる十字架」という意味である。外円の中央上部にある *PAX* は平和。外円の左半周の *VRSNSMV* は *Vade retro Satana, nunquam suade mihi vena* の略で、「サタンよ、退け！ 汝の虚しき事物を我に薦めるな」という意味になる。外円の右半周の *SMQLIVB* は *Sunt mala quae libas, ipse venena bibas* の略で、「汝の差し出す飲み物は邪悪にして、その毒を汝自身が飲み干さん」という意味である。

## エクソシズムの儀式書の制定

このように中世に煩雑化したエクソシズムは、他の諸秘跡と共にトリエント

公会議の典礼改革によって整理され、教皇パウロ 5 世により 1614 年に発行された『ローマ儀式書』の第 12 部『悪魔によって苛まれる者のための祓魔式』として公布された。このとき儀式書の主なテキストは、フランシスコ・サマリヌスという人物によって編集され、司祭のための様々な聖人の用いたエクソシズムの祈りのコレクション *Thesaurus sacerdotalis* から編集されたと言われている<sup>86</sup>。この『ローマ儀式書』の第 12 部には新たに総則が付され、儀式執行に関する詳細な規定が明確に定められた。その上で主要な詩編、答唱句、福音朗読が整備され儀式全体が整えられた。この儀式書の主要部分であるエクソシズムの祈りは、前にも述べたように 872 年版の『大グレゴリオ秘跡書』の中にある「エクソシズム」の祈りとほぼ完全に一致しており、さらに 1 世紀近く古い 790–800 年頃のフランスの『ゲラシウス秘跡書』、『ゲローヌ秘跡書』からの伝統を受け継いだものとなっている。こうしてエクソシズムの儀式は本来の教会の祈りとしての立場を取り戻したのである。

### 3. 5 近代から 1999 年の改訂までの変遷

19 世紀の終わりに教皇レオ 13 世は『ローマ儀式書』に収められていた盛儀のエクソシズムとは区別される洗礼式の際の小エクソシズムとも異なる単式のエクソシズムの儀式書を作成し公布した<sup>87</sup>。これは、それまでのエクソシズムが悪霊の人への憑依に対処するものであったのに対して、特定の物や場所に悪霊の影響が生じた場合に司祭と信徒共同体が用いられるように作成されたものである。これは最終的に 1952 年の旧『ローマ儀式書』第 8 版の第 12 部『悪魔に苛まれる者の為のエクソシズム』の第 3 章として付加された。1952 年の儀式書の本体は、1752 年の教皇ベネディクト 14 世、1925 年の教皇ピオ 11 世の命令による改訂を経てもなお、内容的には 1614 年のものと殆ど変更点がなく、若干の

<sup>86</sup> Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004), Antiphon 10. 1, 2006, p. 78-79 を参照。

<sup>87</sup> *Exorcismus in satanam et angelos apostaticos*, Leonis PP. XIII editus, *Acta Sanctae Sedis* vol. XXIII.

祈願と総則の修正を伴うものであった。そのためエクソシズムの儀式書は1614年以降、1999年の改訂版まで実質400年近く据え置かれたままであった。1952年に発行された第8版の『ローマ儀式書』においては、1614年版に対して新たに数箇所文言が付加された。まず総則の第3項で「初めに、ある人が悪魔に取り憑かれているということを安易に信じるべきではなく、悪魔に憑かれた者と精神的な疾患に苦しむ者を見極める明確な兆候を確認しなければならない」という文章が付け加えられた。これは、科学技術の発展に伴い、より科学的、理性的判断の重要性が評価された時代に入っていたことから当然の見解であったと思われる。また、本文の第3の祈願および、エクソシズムの命令の式文のうち、B、Cパターンの末尾の「生者と死者とこの世とを炎によって裁きに来られるお方」という表現も第8版において付加された文言である。これは本来、伝統的な種々の祈りの結びに用いられていたものである。例えば、3世紀のテルトゥリアヌスは『護教論』(XXIII. 15-16, CCSL1:132-33)<sup>88</sup>において悪魔が神の裁きと罰(—の炎)を恐れると描写し、12世紀のジョン・ベレットという典礼学者も著書 *Summa de ecclesiasticis officiis* でも同じことを述べている<sup>89</sup>。こうしてエクソシズムの祈りの中心部分は、実に1200年近く根本的な変化を受けなかったことになる。

## 第二バチカン公会議後の典礼刷新

第二バチカン公会議後、ローマ儀式書の全面的な改訂作業がおこなわれた際、エクソシズムはピエール・マリー・ジー師 (Pierre Marie Gy O.P.) が主宰した準秘跡の検討委員会 (coetus 23) で取り扱われた。そこでは、一切迷信的なもの、例えば魔除けのような呪いの類のものを全ての典礼、儀式から排除し再編集する作業がおこなわれたといわれる。それは『典礼憲章』第34項の「儀式は簡素の美を備え、簡単明瞭であり、不必要な重複を避け、信者の理解力に順応

<sup>88</sup> 『キリスト教教父著作集』第14巻参照。

<sup>89</sup> 前出 Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004), p. 81-85 参照。

し、一般に多くの説明を必要としないものでなければならない」という方針に具体的に従ったものであるとも言える。一方、A. ブニーニ師が秘書を務め、フィッシャー・バルタザール師が主宰した第22検討委員会は『ローマ儀式書』の入信の秘跡を扱っていた。この2つの検討委員会は悪魔祓いの儀式に関して互いに影響しあっていた。つまり洗礼式の時の解放の祈りをどうするかという議論においてである。この頃、F. バルタザール師は洗礼式の悪魔祓いは、もはや必要がないという批判に対して「悪魔への命令、語りかけは辞めて神への語りかけのうちに悪魔について言うべきだ」と見解を述べていた。彼の見解は、ドイツの聖書学者 H. シュライアーらの新約聖書神学と原罪についての発展的な神学の考察に基づいていたということが1985年の教理省の『悪魔に関するキリスト教信仰について』(Fede cristiana e demonologia)<sup>90</sup>の中で語られている。この線に沿って、洗礼式、盛儀のエクソシズムおよびその他の儀式における祈りから、悪魔に対する直接的な命令の式文を減らし、嘆願の式文の重要性が増していった<sup>91</sup>。

伝統を重んじる現役のエクソシスト達からは、1999年版の儀式書の「新しい儀式は悪魔に対して効果がない」と不満の声が出されたという<sup>92</sup>。新しい儀式書は15年以上の時間をかけて準備されたが、準備委員に専門家のエクソシストが含まれておらず、バチカンの高位聖職者によってのみ改訂作業が進められたことも不満の原因とみられていた。

改定作業の経緯としては、まず1985年9月29日付けの教理省からの書簡によるエクソシズムに関する諸規範の確認がなされ、1990年6月4日に新儀式書の試用版が公開された。

かつてイタリア・エクソシスト協会の会長を務めたローマ教区のアモルス神父ですら、これらの改訂作業は自身の与り知らぬことであったという。しかし、

<sup>90</sup> *Enchiridion Vaticanum*, vol. 5, no. 38.

<sup>91</sup> これら一連の経緯は Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004), p. 96-99 で述べられている。

<sup>92</sup> 詳しい内容は <http://www.fisheaters.com/amorth.html> を参照。

その後、現役のエクソシスト達から準備委員会に幾つもの要求がなされた。結局のところ、用意されていた新しい儀式書に大きな変更を加える結果とはならなかった。当時の教理省長官ラッツィンガー枢機卿および典礼秘跡省長官エステベス枢機卿に対して「エクソシスト達の立場を擁護して旧版の儀式の有効性を認めて欲しい」との願いが出され、枢機卿側も「喜んで要求に許可を与えよう」と了承したという。エクソシスト達の要求は教皇にもコピーが渡されたと言う<sup>93</sup>。結果的に1952年版のエクソシズムの儀式書の有効性も保証を得た。これに関する公式文書は、1999年の*Notitiae* (vol. 35, p. 156)に掲載されている典礼秘跡省の通達文（これは新儀式書発行日の翌日のもの）で確認することができる。

当時の典礼秘跡省の長官エステベス枢機卿は、新しい儀式書の公表時に「この儀式は、以前の儀式書からそれほど大幅な変更を行ったものではない」と述べた。加えて、「この儀式が使用されることはほとんどないが、悪魔憑きに苦しむ当事者の承諾と、教区司教の指導の下でのみ使用可能なエクソシズムの儀式は引き続き必要不可欠である。なぜなら悪魔は実在するからである」とも述べ現代においてもエクソシストの活動が教会の重要な務めであることを確認している<sup>94</sup>。

新しい儀式書の38項では、儀式書の緒言に加えて *directorium quoddam pastorale de usu exorcismis maioris*（盛儀のエクソシズムの実施に関する司牧者向けの指針）をも参考にできると明記された。この指針は、エクソシストが緒言の内容をより深く理解し、儀式のヒントを学ぶだけでなく、行うべき、語るべき、理解すべき、指示すべき方法について理解できるものとされている。それは、エクソシズムの知識と熟練した経験によって、極めて優秀な人々によって書かれたもので、教皇庁に認可を得なければならないものとされている。つまり、これまでの他の儀式と異なり、エクソシズムの儀式に関しては、教皇庁は

---

<sup>93</sup> これらの一連の動きについても注92のサイトを参照。

<sup>94</sup> CWNes.com に新儀式書発表当時の記事が掲載されている。  
<http://www.cwnews.com/news/viewstory.cfm?recnum=9464>

エクソシストたちの意見を尊重して、かなり広くその許容範囲を認めていることになる。

1999年に発行された儀式書は、ルブリカや序文などの文法、文章表現の訂正を行い2004年に修正版が出された。細かな修正箇所については Daniel Van Slyke の文献<sup>95</sup>を参照されたい。

新しい儀式書において、エクソシズムに関する通常の規定は、中世時代にまん延した迷信的な考えから抜け出し、大きな進歩を遂げたことを明確に表している。その規定の中でも特筆すべきことは、参加者達は第一に、聖なる秘跡を頼りにすべきであり、エクソシズムにおいてもエクソシストやその他の人間によって発案された形式ではなく、聖書の神聖な言葉こそが使用されるべきであると指導する規定である。教会はキリストが悪魔に対して果たしたこの特別な力を注意深く守ってきたのであり、カトリック教会のエクソシズムは、人間がごまかしや悪意を持って霊的世界を歪曲して理解しただけの魔術的なものとはまったく別物である。その本質はまさに教会の公的な祈りであるということが緒言の指示から明確にされている。諸秘跡の原点に立ち返って言えば、このエクソシズムの儀式で司式者を通してはたらくのも主キリストご自身であることを忘れてはならない。

#### 第4章 悪魔、悪霊とエクソシズムに関する教会の公式見解

エクソシズムの前提は、悪霊の存在とその活動を認めることにある。この理解は、紀元前後のユダヤ教に既にあったものであるが、キリスト教もある意味でそれを受け継いだ形になっていると言える。悪魔が人間の心身の健康に及ぼしうる悪い影響は、「この世の支配者」(ヨハ 14:30; 16:11) と呼ばれる悪魔のこの世に対する力の一つの現れである。しかしイエスの名による悪魔祓いは、イエスにより実現された神の支配(救い)の一つの現れである(マタ 12:28)。したがってエクソシズムは、イエスによって使徒に与えられた権能に基づいて、

---

<sup>95</sup>前出 Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004).

しるしと言葉を通して人々に神の恩恵をもたらす秘跡的行為の一種であるとも言える。現代の教会において、エクソシズムはあくまで準秘跡という位置付けにあるが、準秘跡の中でも特別に教会法 1172 条によってその取り扱いが規整されている特殊な儀式であり、地区裁治権者（教区司教およびその代理）による特別な許可が必要とされている。

本章では、教会が、悪魔や悪霊、そしてそれを追い払うエクソシズムの儀式についてどのような見解を公に示してきたのかということに関して、これまでの教会公文書を調査、整理する。

#### 4. 1 教会公文書

まず、これまでに出版された教会公文書、特に『カトリック教会文書資料集』(DS) と『カトリック教会のカテキズム』(CCE) の中から悪魔、悪霊そしてエクソシズムの儀式に関連する文書を抽出する作業をおこない、それらを内容別に4つの主題に分けて整理した。

ここでは、はじめに a) 悪魔とは何か、次に b) 悪魔と人間、そして神との関係性について、そして c) 悪魔に対するキリストの力、即ち、悪魔の働きから人間を解放するキリストの業についてまとめる。最後に d) 教会において継承されているキリストの解放の業、すなわちエクソシズムの儀式についてまとめる。

##### a) 悪魔とは

サタンまたは悪魔と他の悪霊は、本来は神によって創造された善なる霊的存在、天使であった。それは神と神のご意志に仕えることを、自由意志を濫用し拒絶した為に失墜した天使 (DS286, 800) であり、それが人を罪へと誘惑する者、死に迫りやる存在、サタンである (CCE391)。

悪魔とは抽象的なものではなく、理性と意志を持つ存在者、サタン、悪い者、神に逆らう天使を意味する。悪魔 (diabolos) は、神の計画とキリストにおいて成就した「救いのわざ」に「逆らう」者のことである (CCE2851)。サタンの働きのもっとも重大な結果とは、人間を「神のようになるだろう」と言って神に



背かせた「欺瞞の誘惑」である（CCE394, 創 3:5）。この天使達の墮罪は、被造物である霊がその自由な選択によって、神とその支配を徹底的に、また撤回できない方法で拒絶した（CCE392, 393）。しかし、神の国の建設を如何なる被造物も妨げることはできない（CCE395）。

神が悪魔の行動の全てを妨げないのは深い神秘であるが、神は万事が益となるように全ての存在をもって共に働く（CCE395）のである。

「神が死を造られたわけではなく、命あるものの滅びを喜ばれるわけでもない……悪魔のねたみによって死がこの世に入り、悪魔の仲間に属する者が死を味わうのである」（知 1:13, 2:24）（CCE413）。

#### b) 悪魔と人間, 神との関係性

神は人間をご自分にかたどって造り、親しい交わりを結ばれた。被造物として人間がこの親しい交わりを生きることができるのは、ただ神に自由に服従することによってである。「善悪の知識の木」は、被造物としての人間が信頼をもって自由に認め、尊重しなければならない越えがたい限界を象徴的に表している。本来、人間は創造主に従属しており、創造の法則と自由意志の行使を規制する道徳的規範に従うべき存在である（CCE396）。人間はサタンと同様に自由意志を濫用し神以外のことを自らの目的にし、その目的に達しようとしたために原罪すなわち「死の国を所有する者、すなわち悪魔の権力下に置かれた奴隷状態」に身を置いた（CCE407, 415）。多くの苦難を通して悪と戦い、死を堪え忍ぶことは、確かに人間、特にキリスト信者にとって必要であり義務である（GS 22）。人間は万事において主に喜ばれるよう努力し（2 コリ 5:9 参照）、悪魔のたくらみに対抗し、悪の日に際して抵抗できるために（エフェ 6:11-13 参照）、神の武具を身につける必要がある（LG 48）。

神は、人間が進んで創造主を求め、神に従って自由に完全で幸福な完成に到達するよう、人間を「その分別に任せること」を望んだ。本来的に人間は善を目指し悪を退けるように向けられている。神の恵みによって助けられなければ、人間は独力で神への指向を完全に行動に移すことはできない（GS 17）。人が真

に正しくあるためには祈り求めること、恩恵の助けが欠かせない (DS373)。

人間は神によって義の中に置かれたが、悪霊に誘われて、歴史の初めから自由を乱用し、神に対立し、自らの完成を神の他に求めた。人間は自分の内心を見つめてみれば、自分が悪に傾いており、多種多様の悪の中に沈んでいることを発見する。人間は自分自身の力で悪の攻撃を効果的に退けることができないことを発見するのである (GS13)。

#### c) キリストによる悪魔からの解放

キリストは、ご自分の死と復活によって人類をサタンの力と死の闇から解放し、御父の国に移された (SC6, AG3)。キリストは悪魔に苦しめられている人々を全て癒されたが、それは神が御一緒だったからである (使 10:38)。サタンによってこそ罪と死が世に入り、またキリストによるその決定的な敗北によって全被造物が罪と死から解放される。主は、戦いを挑む悪魔の策略から人類を守られる (CCE2852)。この世界は、創造主の愛によって造られ、保たれ、罪の奴隷状態に陥ったが、キリストの十字架上の死とその死からの復活とによって、「悪しき者」の権力が破壊され、それから解放された (GS2)。なぜならキリストが全ての人のために死んだからである (GS22)。

人間を解放し力づけるために、主ご自身が人となって来られ人間をその内部から再生し、人間を罪の奴隷として捕えていた「この世の支配者」(ヨハ 12:31) を追い出した。実に罪は人間そのものを弱くし人間をその完成から遠ざける (GS13)。

イエスの悪魔祓いは、人々を悪霊の支配から解放するものであった (CCE550)。

実にイエスが来られたのは、この世のあらゆる不幸をなくすためではなく、もっとも深刻な束縛、すなわち罪の奴隷の状態から人々を解放するためであった (CCE17)。「私が願っているのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです」(ヨハ 17:15) と言われている通り。

#### d) 教会に継承されたキリストの解放の業

キリストは使徒達を「派遣して宣教させ」彼らに「悪霊を追い出す権能を与えた」（マコ 3:14-15）。使徒達は主の名によって悪霊を追い出した。それゆえ教会の戦いは、悪の支配と権力、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものである（エフェ 6:12）。

教会がイエス・キリストの名によって公に権威をもって、人あるいは物が悪魔の支配から保護され、その支配力から引き離されることを求める準秘跡をエクソシズム（大祓魔式）と呼ぶ。イエスは悪霊を追い払われたのだが、教会は、そのイエスから悪魔祓いをする権能と務めを受け継いでいる。エクソシズムは簡単な形では洗礼式のときに行われる。本来、洗礼は、罪とその扇動者である悪魔からの解放を意味する（CCE1673）。

「大祓魔式」と呼ばれる盛儀のエクソシズムは、地区裁治権者の許可を得た司祭だけが行う。それは、教会が定めた規則を厳守して慎重に行われなければならない。エクソシズムの狙いは悪魔を追放し、人を悪魔の支配から解放することであり、これはイエスがご自分の教会にゆだねられた霊的権能によるものである（CCE1673）。

このエクソシズムは、秘跡にならって定められた聖なるしるしであって、これによって霊的效果が表わされ、全教会の祈りによってそれが与えられる準秘跡である（SC60）。

「私がお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです」（ヨハ 17:15）というキリストの願いは、キリスト信者各自にかかわるものであるが、エクソシズムが行われる時、祈っているのは常に「私たち」であって、全教会との交わりの中で、あらゆる人間の救いのためにこの祈りがささげられる（CCE2850）。

#### 4. 2 旧版の儀式書

旧版のエクソシズムの儀式書では、その総則においてエクソシズム、悪霊の働き等についての神学的考察はなされてはいない。儀式書の式文にある文言から、直接的に儀式そのものの意図をうかがい知るより他はない。

そもそも旧版の儀式書は、内容的には最新の第8版（1952年）に至るまで初版（1614年）の状態をほとんど維持したまま400年の間、手が加えられていなかった。この儀式書の総則では、専ら実際の儀式に臨むに当たったの経験的観点に基づいた心得が語られている。つまり儀式書の総則は、17世紀初頭の教会において悪魔が如何なるものとして捉えられていたのかを知る一つの手がかりとなるものである。ちなみに旧版の総則以外のエクソシズムの式文は、繰り返し言及している通り8-9世紀ごろの秘跡書の写本にみられる古い時代の神学的理解に基づいている。

まず、旧版の儀式書の総則において、悪魔は人間に憑依して自由意志を奪い、当人の自然本性を超えた能力を発揮させる霊的な存在とされている（第3項）。そして、悪魔は専らエクソシストを欺き聖なる役務を阻止しようとする存在として語られており、役務者は、いかなる悪の虚偽に対しても警戒するよう指示されている（第5,6,7,9項参照）

#### 4. 3 旧版のエクソシズムの儀式書の神学<sup>96</sup>

次に、敢えて旧版のエクソシズムの式文からその神学的理解を次の3つの主題に沿って抽出してまとめる。即ち、a) 悪魔とは何か、b) 人間とは何者か、c) 悪魔を追い出す神的権能とは何かという3つの点である。ただし儀式書の内容そのものは、先述したとおり8~9世紀頃まで遡る神学的理解によるものであることに注意したい。

##### a) 悪魔とは

旧版の儀式書では、悪魔に対してありとあらゆる悪を象徴する名称をもって命令を行う。それによれば、悪魔は、信仰の敵、人間の敵、死そのもの、命の盗人、正義を墮落させる者、全ての悪と不道徳の源である。また、人を誘惑する者、民の裏切り者、妬みの扇動者、強欲の源、不和を助長する者、痛みと悲

---

<sup>96</sup> 前出 *Rituale Romanum*, edition octava, Titulus XII, *De exorcizandis obsessis a daemonio*. 復刻版は *Rituale Romanum* (1953) reimpressio edition, C. L. V. Edizioni Liturgice 2001.

しみを生む者。さらに嘘と狡猾さに満ちた誘惑者、美德の敵、純潔の迫害者、憎むべき生き物、怪物。放蕩者の竜、不浄の霊、地獄の亡霊、サタンの力、忌まわしい人殺しの王、好色の父、冒涇の扇動者、卑劣さの根源、異端の推奨者、全ての猥褻の創始者、忌むべき竜と全ての魔性の軍団、嘘の父でありその頭。人間の幸福の敵。闇の世界の支配者と力ある邪悪な霊、古いヘビ<sup>97</sup>。

悪魔は、このように幅広い解釈がなされる象徴として表される、人を善から遠ざけるありとあらゆる原因とされている。そして現実に人を苦しめる存在である。

## b) 人間とは

エクソシズムの儀式書によれば、人間の尊厳とは、神の似姿（儀式書、エクソシズムの祈り B）、神ご自身の或いは聖霊の神殿（儀式書、エクソシズムの祈り C）である。

## c) 悪魔を追い出す働き、神的権能の継承

悪魔を退散させる権能は三位一体の神にあり、それはイエスから使徒達に委託された。さらにエクソシストは、使徒聖ペトロと聖パウロ、聖なる殉教者たち、聖なる役務者と教会の信仰と祈りによって悪魔を追い払うための力を神に願う。

但し、1952年版の『ローマ儀式書』のエクソシズムの第三章に付加された教皇レオ13世作成のエクソシズムの式文では、聖なる乙女マリア、大天使聖ミカエルが強調されている。

なお、聖書に基づきエクソシズムを執行する条件として祈りと断食が明言され、また緒言の第13項では十字架および聖遺物が効果的に用いられるよう指示されている。

---

<sup>97</sup> 旧版の儀式書中の「エクソシズムの祈り」の箇所参照。

#### 4. 4 新版の儀式書<sup>98</sup>

1999年に発行された新しい儀式書は、これまでの悪魔、悪霊、そしてエクソシズムについての教会の公式見解の総括であり、現代の神学的解釈がまとめられた最良の公的資料である。

新版の儀式書は、まず前文において悪魔、悪霊についての定義をこれまでの公文書の解釈に沿って『聖書』と『カトリック教会のカテキズム』、および『第二バチカン公会議公文書』を用いながら示している。続く緒言には、1) 悪魔に対するキリストの勝利とその業を受け継ぐ教会、2) 教会に委ねられた聖化の任務としてのエクソシズム、3) エクソシズムの儀式の挙行条件という章立てで詳しく記されている。以下に項目毎に要点をまとめる。

#### 前文

悪魔と悪霊は、本来、善いものとして創られた目に見えない天使、霊的存在であった。にもかかわらず徹底的に神に反抗することを選択した。悪魔は、神の姿に似せて創られた人祖に対して自由という神からの贈り物を乱用させ罪に誘惑した。それ故、人類の全歴史は闇の力との苦闘で満ちている。悪霊はヨハネに「この世の支配者」と呼ばれた悪魔の下に従っている存在である。キリストは過ぎ越しの神秘を通して、悪魔の王国を打ち倒し、人間を「悪魔と罪に隷属した状態から解放した」が、闇の力に対する戦いは人類の歴史全体に及ぶものである。悪魔と悪霊の働きは、今でも、人や物、特定の場所に影響を及ぼす。そのため教会は今もなお、人々が悪魔の働きから解放されるよう祈り続けるのである。

#### 緒言の第1章：悪魔に対するキリストの勝利とその業を受け継ぐ教会

1. まず天地万物の創造主である神への信仰が語られている。神の創造したものは全て善かった。悪魔、悪霊も本来善い被造物であったのに自由意志の乱

---

<sup>98</sup> 前出 *De Exorcismis et supplicationibus quibusdam*, Libreria Editrice Vaticana, editio typica 1999, emendata 2004.

用により神に背いたことが繰り返し述べられている。

2. 人は神の似姿に創造された。その尊厳は自由意志に基づいて行動することであるが、悪魔の誘惑により人はそれを悪用し、悪魔と死の力に屈し罪の奴隷となった。

3. 神は、人類をその闇の力から解放し、ご自身において生きるよう御独り子を世に遣わされ、悪魔を滅ぼし聖霊によって人間本性を回復させた。

4. 主イエスは地上にあった時、悪魔の誘惑に打ち勝ち、悪霊を追い払い、それらに抑圧されていた人々を解放する救いの業をおこなった。

5. キリストは十字架の死に至るまでの御父への従順によって悪魔に打ち勝った。神はキリストを復活させ、全てのものを彼の足下に従わせた。

6. キリストは使徒達に聖霊を遣わし、悪魔を追い出す権能を与えられた。

7. 教会は、悪霊を打ち払い、悪霊の影響を退ける力を主キリストから受け取っており、使徒の時代から今日までこの力を行使してきた。こうして教会は、「イエスの名において」絶えず信心深く悪から救われるように祈るのである。

## 緒言の第2章：教会に委ねられた聖化の任務としてのエクソシズム

緒言の第2章の冒頭で、教会の創設当初より、幾つかの形式のエクソシズムが教会によって行われてきたことが語られている。

8. 洗礼式に備えて、洗礼志願者は、罪と邪悪な者の影響から解放されるようにと教会が祈る小エクソシズムを受けてきた。このエクソシズムの執行については特別な許可を受けていない司祭でも可能である。同様に、成人洗礼式の儀式書自体には、サタンとその全ての仕業に対する拒否が含まれており、幼児洗礼式の儀式書には、子供を原罪から解放し、子供の中に聖霊を送ってもらうことで彼らが神の栄光の神殿となるよう神に願うエクソシズムの祈りが含まれている。これらの儀式書では、洗礼の水を通して全ての者が、罪と悪魔とその闇の力に対するキリストの勝利を分かち合うことに言及している。

9. しかしながら、キリストの内にあつて、新たな命を生きるようになった信仰者であっても、常に悪の誘惑に悩むものであり、秘跡、特に「ゆるしの秘

跡」に与ることによって悪魔を拒絶し、祈りと節度ある生活の中で警戒を続けなければならない。

10. ここで教会は、悪魔が人に危害を加えること、悪霊が人に憑依し自由意志を奪う状況が生じ得ることを明言している。特にそのような悪魔の力は罪の力を通して人間に働くとされている。そのような状態から解放されるように教会はキリストに寄り頼み支援する。

11. 教会はこのような状況に際して、儀式書に記されている「盛儀のエクソシズム」と呼ばれる典礼行為によつて的確に対処する。これは聖霊と一体となって悪霊を追放してくださるよう神の助けを請う祈りである。

12. この盛儀のエクソシズムにおいて、教会は自分自身の名において行動するのでなく、悪魔や悪霊達であっても全てにおいて従わねばならない主キリストの名において行動すると明示されている。第2章の最後で、全てのものは、それがたとえ悪魔や悪霊たちであっても、神であるキリストに服従せねばならず、またそれらは神の下にある存在としている。

### 緒言の第3章：エクソシズムの儀式の举行条件

13. 緒言の第3章の冒頭において、エクソシズムに関する管轄権者を地区裁判権者としていた教会法 1172 条および旧版の儀式書の総則第1項と比較すると、1999年のエクソシズムの儀式書の総則13項は、エクソシズムに関して地区裁判権者が管轄するものの、通常は当該地区の教区司教によって指導されるべきことが明確に規定されている。これは特別法が一般法に優ると言う法原則から言って注意すべき点で教区司教の責任が強調されているとみることができる。また司教が特定の司祭をエクソシストとして任命する場合、敬虔かつ勤勉で分別があり聖なる生活をする人物を選ぶよう指示されている。

14. エクソシストは、悪魔に取り憑かれている人に最初に接する際、肉体的または精神的な病気に苦しむ人に接する時と同様に、最大の慎重さと分別をもって臨まなければならない。精神医学の専門家、心理学の専門家による診察を含む綿密な調査の後に、エクソシストは対象者が本当に悪霊に取り憑かれて



いるか否かを判断しなければならない。

15. さらに対象者の苦しみの原因が悪魔の働きによるものなのかどうか、何か別の悪質な働きによるものなのかを判断しなければならない。後者の場合は、普通、司祭や助祭たちにより適確な霊的、司牧的援助をおこなう。しかし、本当に悪魔の影響を受けている場合は、信仰による霊的援助を嫌悪するとも述べられている。

16. ここで旧版の儀式書の総則の第3項が再び繰り返される。つまり悪魔憑きの兆候として、「未知の言語で話す、離れた場所のことや秘密の事柄を知っている、尋常でない肉体の強さを明示する」などがみられるとされている。さらに神の名やイエスの聖なる御名、聖なる乙女マリア、聖人、教会、神のみことば、教会の典礼やミサ、そして神聖なしるしなどに対する嫌悪感などの霊的兆候、信仰生活の態度などの全ての要素を考慮に入れなければならないとされている。

さらにエクソシズムの儀式は、悪霊に憑依された人の同意を得ていなければ執行できないことが明言されている。

18. ここで、非カトリック信者に対する儀式の執行について、司教の判断を仰ぎ調査の結果、必要性が確認されれば可能であることが明記されている。

19. エクソシズムが魔術や迷信の類であるという認識を避けるために、できる得る限りの努力を行わなければならない。特にエクソシズムは、いかなるメディアにおいても公表されることがあってはならず、情報は適切な思慮をもって取り扱わなければならないとされている。

なお、旧版同様、聖書に基づきエクソシズムを執行する条件として祈りと断食が緒言の31項で明言されている。また33項では、聖母の聖画像、十字架像の重要性が強調されているものの、もはや聖遺物については記されていない。

旧版の儀式書と比較して1999年の儀式書の全体的な特徴と言えるのは、何と言ってもエクソシズムという典礼行為が、全教会共同体の祈り（エピクレーシス）に支えられているという教会論的視点の強調である。そしてこの祭儀においてキリストご自身が臨在するという理解である（勿論、準秘跡であるエク

ソシズムは *ex opera operato* ではなく *ex opera operantis* の類型に属するのではあるが)。例えば、ある司祭に対して本儀式の執行を司教が委任するというのは、全教会の権威の下で、つまり天上、地上においても、また時間も空間も超えた全ての教会共同体の権威と祈りに支えられて典礼が執行されるという意味合いが強調されている<sup>99</sup>。また 32 項では教会の信者でなくとも家族や友人、聴罪司祭、霊的同伴者による助けの重要性が語られている。さらに 34 項では儀式の際に、信徒が全く集まらないか、あるいは非常に少ない場合、エクソシストは自分自身の心の内に、また悪魔から被害を受けている者の心の内においても普遍教会の支えが常に存在していることを思い起こす必要があるとしている。それらは第二バチカン公会議が強調したように教会共同体において執行される秘跡においてキリストがそこに臨在し、キリストご自身がはたらくという神学的理解が反映されていると言える。

#### 4. 5 新版の儀式書の神学

次に、旧版の儀式と同様に新版のエクソシズムの式文からその神学的見解を主題毎に抽出してまとめる。

##### a) 悪魔とは

偽り者の父、古い蛇、人類の安息の敵であるサタン、神の法と父なる神の善い業に反する者、この世の支配者、イエス・キリストの力と聖なる徳に反抗する者、サタン、人の世の欺瞞、神の真理と恵みの霊に反する者、地獄の霊、欺瞞の父、汚れた魂、穢れを極めた靈魂、敵意に満ちた者、人類の敵、死をもたらす者、不正の父、諸悪の根源、人間を唆す者、苦しみをかきたてる者、悪意に満ちた大蛇、全ての陰府の力、敵に属する全ての地獄の軍団、悪魔が率いる全ての集団、ずるがしこい蛇、不正の父、人類の安息の敵。

---

<sup>99</sup>前出 Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004), p. 105 参照。

## b) 人間とは

人間の尊厳とは、神の似姿（儀式書 61 項）、聖霊の神殿（儀式書 61 項）、聖なる気高い刻印を記された者（儀式書 62 項）。

## c) 悪魔を追い出す働き、神的権能の継承

悪魔を退散させる権能は三位一体の神にあり、それはイエスから使徒達へともたらされた。

さらに聖なる乙女マリア、使徒聖ペトロと聖パウロ、聖なる殉教者、諸聖人たち、大天使聖ミカエル、一、聖、公、使徒継承の教会共同体の信仰と取り次ぎの祈りによって悪魔を追い払うための力を神に願う。

このように、新版のエクソシズムの儀式書の文言が持つ神学的主題は、旧版（1952 年の第 8 版）のそれとほとんど変わりがないことが判る。

## 第 5 章 エクソシズムの儀式の内容（旧版の典礼との比較検討）

本章では儀式書に沿ってエクソシズムの典礼的側面から分析を行う。

### 5. 1 エクソシズムの儀式の構成

新旧のエクソシズムの儀式の構成を簡単にまとめると次のようになる。まず緒言、ないし総則があり、続いて通常のエクソシズムの儀式の内容 (A) が記されている。次に付録として人間意外に用いる単式のエクソシズムの儀式が記されている。さらに新版の儀式書においては、信徒が悪霊のはたらきから身を守る為に用いることのできる伝統的な種々の教会の祈りが付録に掲載されている。

旧版のエクソシズムの儀式書では、儀式の内容自体についての説明はなかったが新たな儀式書では内容の説明が緒言の第 4 章に付されている。それにそってエクソシズムの儀式の流れと構成をまとめる。

まず新しいエクソシズムの儀式は、開祭の祈りに始まり、聖水の灌水、諸聖人の連願、福音朗読を行う。つづいて按手、洗礼の約束の更新、信仰宣言と主の祈りをもって前半を締めくくる。旧版の儀式書と異なるのは、この信仰宣言

と主の祈りの場所である。それは各要素に対する神学的理解の違いからくるものと考えられる。儀式の後半は、十字架の顕示を行った後、任意で息の吹きかけをおこない、エクソシズムの祈り（嘆願の式文と命令の式文）をする。これは、嘆願と命令の2つの式文からなるもので、旧版では3組、新版も同じく3組のエクソシズムの祈りが用意されている。対象者が悪霊から解放された場合は、福音の歌などで感謝の祈りを捧げ、祝福をもって祭儀を終える。付録1の特殊な状況で司祭が用いるエクソシズムは、旧版の第三章に示されている教皇レオ13世のエクソシズムを踏襲したもので、開祭の祈りに続いて任意で諸聖人の連願をおこない、詩編による祈りをおこなった後、エクソシズムの祈りを唱えるより簡潔な儀式である。

(表) 新旧エクソシズムの儀式書の内容の比較

旧版 (1614-1952年)	新版 (1999/2004年)
総則 A. エクソシズム本文	緒言 A. エクソシズム本文
灌水 主の祈り 諸聖人の連願 詩編54 悪霊への質問と命令	準備の祈り 水の祝福・灌水 諸聖人の連願 詩篇91
福音朗読 (ヨハネ1章) 按手と祈り	福音朗読 (ヨハネ1章) 按手と祈り 信仰宣言 悪霊の拒否・洗礼の約束の更新 主の祈り
十字架の顕示 エクソシズムの祈り A, B, C	十字架の顕示 息の吹きかけ エクソシズムの祈り
主の祈り アヴェマリア・使徒信条 感謝の祈り (福音の歌) 信仰宣言・アタナシウス信条 (詩編による祈り) 解放後の祈り	感謝の祈り (福音の歌) 結びの祈り 派遣の祝福
B. サタンと墮天使へのエクソシズム 大天使ミカエルへの祈りと祈願 詩編67・祈願 エクソシズム (命令) 祈願と聖水の灌水	B. 特殊な状況で用いる式 開祭・諸聖人の連願 詩篇67・祈願 エクソシズムの祈り 祈願と聖水の灌水

次に具体的に儀式の個々の要素について順に考察していく。なお、下記の()内の数字は新版の儀式書の段落番号を示す。

## 5. 2 エクソシズムの儀式の個々の要素について

### 開祭の前の準備(緒言)

まず、悪魔の憑依の疑いがあると報告された場合、儀式書の緒言第3項にある通り、本当に被害者が悪魔の働きによって苦しんでいるのかどうか慎重に調査をおこなう。病気の可能性、特に精神的な障害があるかどうか科学的な調査を実施するよう専門家の協力をあおぐ。悪霊に憑依されていると判断された場合は、教区司教ないしその代理にエクソシズム執行の許可を願う。ただし式を受ける人の同意が無ければ儀式は執行できない。なお、エクソシストには、教会法、並びに儀式書の緒言等の指示に適う相応しい司祭を司教が文書をもって任命することになっている。勿論、他の秘跡同様、司教はエクソシズムの第一の執行責任者である。

何らかの問題が生じている者の苦しみが、悪霊の憑依によるものでないと判断された場合でも、司牧的な配慮を怠ってはならない。こうした司牧上の判断は、司祭職を生きる者にとっての司牧的能力が問われるものである。

なお、儀式書の16項において、次のような悪魔憑きの判断基準の例が挙げられている。

「悪魔が憑依している兆候と考えられる事柄として次のようなものがある。本人が知らない諸々の言語で語ること、または本人が知らない言葉で話している内容を理解すること。また離れて存在しているものや隠れているものを明かすこと、年齢あるいは身体的性質を上回る力を発揮すること。……さらに特異な兆候が必ずしも、部分的には悪魔の到来を示すものとは認められない場合でも、他の方法で悪魔の干渉を証明することもできる。たとえば神、神聖なイエスの名、聖母マリアと聖人、教会、神の言葉、特に秘跡に関わること、あるいは典礼祭儀、そして聖像に対する激しい嫌悪といったものがそれにあた

る。」

仮に儀式を受ける者の苦しみが悪魔によるものでなくとも、エクソシズムの儀式それ自体は基本的に無害であろう。ただし精神医学において憑依現象と見間違うような精神疾患者に対するエクソシズムの儀式そのものは、場合によっては一時的な効果がある可能性も考えられるが、決定的な治療ではないため専門家の医師の治療に委ねられねばならない。

さて、司教ないしその代理から任命を受けたエクソシストは、儀式に先立ち緒言の第5章の挙式に関する付加条項を事前を守る必要がある。エクソシズムの執行許可は、敬虔さ、知識、慎重さにおいて優れており、人生を純潔に送り、さらにこの務めに関して特別に準備を重ねた聖職者にのみ与えられなければならないとされている（緒言 30 項）。さらにエクソシストの職務は、常時あるいは一時的に正式な任命によって当該職務を委ねられた聖職者が、愛の務めとして勇敢かつ慎重に、そして教区を司る司教の指導の下で遂行するものとされている（31 項）。

ここで、まずエクソシストは、祈りと断食が義務付けられる（31 項）。また、祈りと聖体祭儀、ゆるしの秘跡などで自らを神の僕として相応しく準備する。そして悪魔に苛まれている対象者に、エクソシズムの前に可能であれば、神に祈り、禁欲的な生活を行うように、また洗礼を受けた時の信仰を表明し、頻繁にゆるしの秘跡や聖体祭儀によって自らを守るようにさせる。そして、その人を取り巻く人々に共に祈り支えあうよう導く（32 項）。

エクソシズムは、可能な限り、聖堂あるいは他の適当な場所において、大勢の人から離れて行われることが望ましいとされている（33 項）。十字架、聖画像、さらに聖母マリアの画像がその場に置かれるよう配慮する。旧版の儀式書では聖遺物の使用にも触れられていたが新版では削除された。

エクソシストは、まず始めに、悪魔から害を受けている者の肉体的状態、さらに精神的状態に注意し、一日、あるいは一定時間の間にも何かしら変化が生じるかどうか注意する。特に儀式に際して、信徒の集まりが全くないか、ある

いは少ない場合には、エクソシストは、自分自身および悪魔から被害を受けている者の心の中にも教会が存在することを思い起こすように教える。エクソシストは、悪魔から被害を受けている者が、エクソシズムの間、必要であれば身体を固定し、立ち合い人に対して神に対する信仰をもって共に悪魔から解放されるよう神に願い求めるように導く必要がある（34 項）。そして、悪魔の害を受けた者が、より激しく苦しむ時は、神の助けに何ら不信感を抱くことなく、教会の務めをひたすら忍耐して遂行することも必要である。

さらにエクソシズムの儀式書において、エクソシストしか唱えてはならない箇所を儀式に参加する信徒が唱えないよう予め指導しておくべきである。

エクソシストは、エクソシズムが成功した後も式を受けた者に根気よく祈り続けるよう勧め、聖書から導き出される祈りを教え、さらにゆるしの秘跡や聖体祭儀に繰り返し参加し、(キリスト信者として相応しい) 愛の業に根ざした生活を送るよう兄弟愛をもって人々のために祈るよう教える。

旧儀式書の総則においては、エクソシスト本人が何らかの投薬を勧めたりせず医師と相談すること、また正統なカトリックの信仰とは異なる魔術、魔除けなどを当事者が行なっているか、或いは迷信的なお守りを所持している場合はそれを取り去ること、焼き捨てることを命じている。さらに儀式の本筋から離れた無駄話をしないようにも指示されている。特に旧儀式書が注意を促すのは、悪魔の欺きにエクソシストが騙されないように注意することである。

なお、新版の儀式書には、人だけでなく物や場所に悪霊が憑依し悪影響を及ぼすケースに対するエクソシズムの儀式が付記 1 として掲載されている。これは、旧版の儀式書の第 3 章のレオ 13 世作成のエクソシズムの式文を改訂したものである。

## エクソシズムの儀式の内容

ここからは、エクソシズムの儀式そのものを流れに添って詳細に考察していきたい。括弧内の数字は、新版の儀式書の番号を示している。

### 1. 開祭 (39-40 項)

新版の儀式書では儀式の直前にエクソシストが沈黙の内に唱える悪魔に対抗する準備の祈りが設けられている。この祈りは、儀式書の 39 項もしくは付録 2 の中からも選ぶことができる。エクソシストは、儀式に際して適切な祭服、スータンにスルブリ、もしくはアルバをつけ紫のストラを用いる。

司式者の入堂、祭壇への表敬と十字架のしるしといった通常の開祭の挨拶によって儀式は開始される。その後、司式者は、これから行われようとしている儀式について適当な説明をする。この開祭の一連の挨拶と説明は公会議後の典礼刷新に沿って改訂された新版に特有なもので旧版にはこの記載がない。

### 2. 水の祝福と灌水 (41-44 項)

エクソシズムの初めに水の祝福を行なう。勿論、既に祝福してある聖水があればそれを用いることもできる。

儀式書の水の祝福には、ラテン語規範版の『ローマ・ミサ典礼書 *Missale Romanum*』<sup>100</sup>に掲載されている灌水式の式文が取り入れられている。特に 43 項では灌水式の式次第の付録にあるとおり水に塩を混ぜながら祝福の祈りを唱えるよう指示されている。古来よりエクソシズムには塩が用いられてきた慣わしからこの所作は相応しいものと言える。水の祝福の後、灌水をおこなう。なお、旧版では開祭について書かれた短いレブリカにおいてのみ灌水が指示されている。

トマス・アクィナスの解釈によれば、「聖水は外部からの悪魔の攻撃に対抗して授けられる。これに対して悪魔祓いは、内部からの悪魔の攻撃に対抗するもの」<sup>101</sup>である。このことから、灌水はエクソシズム祈りへの備えであると解釈できる。

### 3. 諸聖人の連願 (46-48 項)

<sup>100</sup> *Missale Romanum*, editio typica Tertia, Libreria Editrice Vaticana, 2002 参照。

<sup>101</sup> 前出『神学大全』(q. 71, a. 2) 第 42 卷 (創文社邦訳版) p. 17 参照。



続いてエクソシストは適当な招きの言葉をかけ跪いて諸聖人の連願を唱える。旧版の連願は第2バチカン公会議前のもので新版のそれとは言葉が異なっている箇所が多い。例えば、「全ての悪より、御怒りより、不測の急死より、悪魔の畏より、怒り、憎しみ、その他全ての悪意より、邪淫の心より、落雷および暴風より、地震の災難より、疫病、飢饉、および戦争より、永久の死より……主、我らを救いたまえ」。新版の連願では、たとえば「私たちの悪霊との戦いの為に、汚れた霊から私たちの苦しみを解き放ちたまえ、あなたに従う者を悪霊の誘いに任せないでください、父なる神の右の手で、私たちの苦しみを鎮め、とりなしてください、束縛から解放し、あなたの正しい裁きと、悪の滅びが実現されますように……主よ、あわれみたまえ」という祈りが加えられている。連願は適切な祈りで締め括られる。ちなみに旧版は交唱によって連願が締め括られている。なお、新版において連願への招きの祈りも掲載されている。

#### 4. 詩編の祈り（49-50項）

その後、エクソシストは詩編を少なくとも一つ朗唱するよう指示されているが、これは交唱されてもよい。この詩編には、旧版が詩編 54、新版では詩編 91 が勧められている。ちなみにクムランで発掘された魔除けのお守りに入っていたのも詩編 91 であった。詩編の祈りが悪魔に対抗する力を持つという伝統は非常に古く紀元前にまで遡るものであったようである<sup>102</sup>。

ちなみに、古来よりアルメニア、ビザンティン、ローマ典礼の洗礼式においては、悪魔の拒否の直前に詩編唱和が行なわれていた<sup>103</sup>。

新版の儀式書では、答唱詩編とそれに続く悪魔からの解放を願う祈りとが組み合わせになっている。規範とされている第一の詩編は詩編 91 であるが、儀式書の第2部には選択可能な詩編として詩編 3, 11, 13, 22, 31 35, 54 68, 70 と結びの祈願とが掲載されている。なお旧版の儀式書では規範の第一の詩編は詩編 54

<sup>102</sup> 本文第3章 3.1 を参照。

<sup>103</sup> 前出『秘義と象徴』p. 82 参照。

となっている。なお選択可能な詩編は、詩編 3, 11, 13, 22, 31, 35, 54, 68, 70, 91, 118 とほぼ新旧両儀式書間で一致している。

#### 4b. 悪魔への命令（新版にはない）

旧版の儀式書には詩編の後に悪魔への命令がある。この式文は、悪魔に対して、その素性、名前を尋ね、離脱の日時を何らかのしるしによって示すように命令し、さらに誰にも危害を加えぬよう命じるものである。これは福音書でイエスがおこなったのと同じようにエクソシストも悪魔と対峙することが求められていると考えられていたためであろう。アウグスティヌスが『神の国』で記述していることから、その起源は教父の時代に遡るものであることが判る<sup>104</sup>。

この典礼行為そのものは旧版の総則 15 項で指示されていたが、新版では完全に削除されている。その経緯は、全章で示したように公会議後の典礼書の改訂の方針に従ったものであろう。この命令に関する記述は、新版の儀式書においては全く言及されていない。あまりに迷信的なものと捉えられたためであろうか。この対話は、本来、主イエスがおこなった悪霊の追放に沿ったもので、憑依した悪霊と対話するものであるが、儀式において苦しみ喘ぐ当事者との対話の機会がなくなったというのはいささか残念に思う。仮に悪霊の憑依と思われる現象が精神的な問題によるものだったとしても（その場合、儀式は執行されないことになっているが）、その叫びはやはり当事者の深層意識にある苦悩の声、問題の根源だからである。

#### 5. 福音朗読（51-52 項）

エクソシズムにおいて朗読される福音書は『ヨハネ福音書』の冒頭である。この福音の箇所は新版においても旧版同様で変わっていない。ロゴスであるイエスの本質を証する福音が朗読されることによって闇の力である悪に打ち勝ったキリストの臨在が示される。ロゴス賛歌とも呼ばれるヨハネ福音書の冒頭

<sup>104</sup> アウグスティヌス『神の国』（5）（服部英次郎、藤本雄三訳、岩波書店、1991年）、p. 399 参照。

の詩句は、古来より神聖さを備えた詩とされ、強い霊的な力があると信じられており、病気を癒すとき、新受洗者の祝福の時、そして魔術的な性格のものから身を守るためにも用いられていたという<sup>105</sup>。その他の福音朗読箇所として旧版の儀式書にはマコ 16:15-18, ルカ 10:17-20, 11:14-22 が示されており、新版ではマタ 4:1-11, マコ 16:15-18, 1:21b-28, ルカ 10:17-20, 11:14-23 と若干のバリエーションが加えられている。

新版の儀式書は福音朗読後すぐに按手の祈りとなるが、旧版の儀式書においては先に福音朗読後の祈願が置かれている。それはガリア典礼の写本に見出される形式である。これはエクソシズムの祈り C の命令の式文と組み合わせられたものである。同様な組み合わせは、『アンブロジウスのエクソシズム』というタイトルでミラノ典礼の入信の儀式の一部となっている。また、これは 10 世紀後期の『ローマ・ゲルマン司教儀式書』にも見られるという<sup>106</sup>。

## 6. 按手の祈り (53 項)

旧版の英語版の儀式書の一部では、按手の祈りが福音朗読の前に置かれているが、それは本来の規範版にはない。旧版の『ローマ儀式書』では、唯一エクソシズムの祈りの直前に十字架の顕示と同時にストラを儀式を受ける者の頭部・首にかけて按手する指示がある。

この按手の所作は儀式を受ける者を聖霊によって強めるためのものとされている。ここでの祈りは、新版の儀式書では対話形式で唱えるように指示されている。

ヒッポリトスの『使徒伝承』20 項にある「洗礼式におけるエクソシズム」において、洗礼式の初めに「志願者一同はひざまずくように命じられ、司教はこの人々に手を置いて悪霊がその者から離れ去って再び戻ることのないように命

<sup>105</sup> R. E. Brown, *The Gospel according to John*, I -XII (Ancor Bible Commentary, vol. 29) Doubleday, 1966.

<sup>106</sup> 前出 Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004), p. 77-78 参照。

じる」とある。現在も、洗礼、堅信、叙階においてはこの典礼行為は非常に重要な意味を持っている。

ちなみに、聖トマスは『神学大全』(Ⅲ, q.71, a. 2) で、洗礼の前に行われる悪魔祓いの儀式の中で、按手がなされることはいわば祝福であり「追い払われた悪霊がまた戻ってこれないように道を塞ぐという意味」があると説明している。

## 7. 信仰宣言・洗礼の約束の更新 (54-56 項)

本稿冒頭でも示した通り、エクソシズムはその語源から真に神を神と認め「確かに誓うこと」であり、それに応じて神の恩恵によって真に神の似姿として創られたものの自由へと解放される。それ故、本来のエクソシズムの重要点はこの信仰宣言にあるとも言える。信仰宣言は、旧版では儀式の最後に置かれている。勿論、悪魔に自由を奪われている状況で冷静に信仰宣言できる状態にはないという意見もあるだろうが、新儀式書の神学は、信仰告白と救いの恩恵の付与(義化・聖化)とは相補的、応答関係によるものと理解されているということができよう。

ここでおなわれる洗礼の約束の更新は、新版で新たに付加されたものであり、信者が自らの洗礼の恵みを想起し、自らのものとする決意が重要とされていることは言うまでもない。洗礼の恵みの想起によって、つまり自分が洗礼の時に受けた照らしと清めによって主イエスの過ぎ越しの神秘に入れられていることを自らの信仰の基礎として思い起すことが、神への信頼、また悪霊と対峙する力の源となると考えられているようである。

旧版の儀式書の流れから類推されることは、悪からの解放という結果そのものがエクソシズムの成功のしるしであり、それが信仰告白できることと密接に関連していると考えられているということである。新版の儀式書においては、儀式の構造上の中心が変更され、儀式の中心部にこの信仰宣言・洗礼の約束の更新および主の祈りが置かれている。それは信仰宣言と主の祈りそれ自体が解放をもたらす中心的な信仰の行為として位置づけられているからであろう。

また旧版の信仰宣言にはアタナシウス信条が示されている。しかし新版では使徒信条またはニケヤ・コンスタンチノーブル信条のみとなっている。別形式として、洗礼式の時の悪霊の拒否と信仰宣言を対話形式でおこなうように指示されている。

そもそも、この対話形式の悪霊の拒否の起源は古く、ヒッポリトスの『使徒伝承』21項bに次のような記述が見られる。即ち、洗礼志願者は「サタン、わたしはおまえと、おまえの一切の虚栄と、おまえの一切のわざを捨てる」と宣言し、司祭は「一切の悪霊があなたから離れ去りますように」と答える様子が明示されている<sup>107</sup>。

また、エルサレムのキュリロスは、『洗礼志願者のための秘義教話』第1講の4で、西を向いて闇の力を持つサタンに次のように言う様子を記している。

「手を伸ばして『立ち去れ、サタン』と唱える。……『サタンよ、邪悪でこの上なく粗野な暴君よ、私はお前を追い払う。私はお前の力をもはや恐れない。なぜなら、キリストは私と同様に血と肉を与えられ受難を通して死をもって死に打ち勝つために、私が奴隷のくびきにつながれないようサタンの力を破壊したからだ。狡猾にしてこの上なく悪辣な蛇であるおまえを追い払う。悪を企てる者であり、友情の仮面を被ってあらゆる不法を行い、私達の祖先に背教をもたらすおまえを追い払う。サタンよ、全ての悪を作り出し、助長するおまえを追い払う。』……『さらに、おまえのすべての業と絶縁する』と言う。……『サタンによるすべての華美なもの絶縁する』……『空しいものを見ようとすることから私のまなざしを遠ざけてください』……『おまえの祭儀（魔術、迷信の儀式）と絶縁する』と言う。」<sup>108</sup>

これらの典礼行為は、現在のローマ典礼ではほとんど失われているものの、

<sup>107</sup> 前出『使徒伝承』p. 47 参照。

<sup>108</sup> 前出、中世思想原典集成2『盛期ギリシア教父』p. 146 参照。

正教会では現在もほぼそのまま継承されている<sup>109</sup>。

## 8. 主の祈り (57 項)

信仰宣言と共に主の祈りがエクソシズムの儀式的中心に置かれたのは 1999 年の儀式書においてである。旧版では、儀式の初めの詩編の直前と儀式の終わりの福音の歌の直前の 2 箇所主の祈りを唱えるよう指定されている。旧版では、公会議以前の伝統的な式文の唱え方にならってエクソシストは「私たちに誘惑に陥らせず」までは黙して唱えることになっている。この儀式において、主キリストが使徒に与えた祈りにおいて、「悪からお救いください」という祈りは特別に意味深いものであり、エクソシズムの儀式においてこの祈りが唱えられることは実に相応しい。なお、新版では主の祈りの招きの言葉が新たに付加されている。

主の祈りの結末の「悪からお救いください」は単なる概念上の悪や試練という領域を超えた意味である<sup>110</sup>。『十二族長の遺訓』の「ベニヤミンの遺訓」<sup>111</sup>、『死海文書』の第 11 洞窟出土偽典詩編 A<sup>112</sup>、タルムード『ベラホット』(16b)の祈り<sup>113</sup>においては、悪の支配、悪の衝動、悪しき人、そして汚れた霊、破壊者サタンへの支配を避けられるようにという意味が込められている。イエスの教えた祈りを唱える人は、神の意志に従った生き方において神を聖とし、神の御心を行い、御国を実現しようとする人である。主の祈りを唱えるのに、それとは真逆の生き方を志向するのは大いなる誤りである（実際、信仰の欠如した多くのキリスト信者はこのような矛盾した状態を生きていると言えるだろう）。そのため主の祈りの最後に全ての具体的な悪の力からの解放を願うことの意味は

<sup>109</sup> 日本正教会『聖事経』（1895 年）p. 19「啓蒙式」を参照。

<sup>110</sup> 本文第 3 章 3.2 参照。

<sup>111</sup> 『聖書外典偽典第 5 巻』（後藤光一郎、村岡宗光、八木誠一、八木綾子、笈川博一、土岐健治共訳、教分館、1976 年）に邦訳が掲載されている。

<sup>112</sup> 和田幹男師の『死海文書』の翻訳と解説の出ている次のサイト <http://mikio.wada.catholic.ne.jp/QMRN-nt.html#10> 参照。

<sup>113</sup> B. ヤング、D. ビヴィン『主の祈りのユダヤ的背景』（河合一充訳、ミルトス、1998 年）参照。

重大だと言える。

## 9. 十字架の顕示 (58 項)

この後、エクソシストは十字架をかざし、対象者にキリストの姿を示し、悪魔に対するキリストの力を示すよう十字架をもって十字のしるしをする。

古来より、信仰をもって行なう十字架のしるしの内に悪魔に対する力があると信じられてきたことについてはこれまで繰り返し述べて来た通りである。

ヒポリトスの『使徒伝承』42 項には、「信仰をもってこの十字架のしるしをする限り、悪魔に立ち向かうための確かで力強いしるしとなる。……手・額・目（洗礼の際には耳と鼻にも）に十字架のしるしをすることによって、私達を打ち滅ぼそうと試みる者を退けるのである」<sup>114</sup>と記述されている。

このような意味で、本儀式における十字架の顕示と十字のしるしは、主キリストへの信仰を顕示することであり、また自らのうちに記された救いの恵みを想起させることにおいても非常に意義深いものである。

なお、旧版の指示は新版と多少異なっており、十字架を用いて十字のしるしをした後、すぐにストラを対象者の頭部に置いて、按手しながら祈るように指示されている。

## 10. 息の吹きかけ (59 項)

続いて、適当であれば任意で聖霊への嘆願の祈りと息の吹きかけをする。この息の吹きかけは、旧版の儀式書には無いものの古い時代からの洗礼式の準備の際に行われていたエクソシズムの所作を採用したものと言える。

ヒポリトスの『使徒伝承』20 項には、「悪霊の追放が終わると司教は洗礼を受ける人の顔に息を吹きかける」とある。そして、同 42 項では「内なる人、すなわちみことばによって生かされている人が、みことばの内なる姿を形として外に表して見せる時、悪霊はあなたの内にいる聖霊によって追い払われるの

---

<sup>114</sup> 前出『使徒伝承』p. 43-45 参照。

である」とも言われており、息の吹きかけという古くからの典礼行為が聖霊の力を招き入れることを意味していることがわかる<sup>115</sup>。

さらにアウグスティヌスも『信条について』<sup>116</sup>の第1章で、「子供達は人を欺く悪魔の敵対的な権能から追い払われるように、息を吹きかけられ、悪魔祓いを受ける」と言っている。

また、聖トマスは『神学大全』(III, q.71, a. 2)で、洗礼の前に悪魔祓いをする際、その「追い払う事を表わす」のがこの息の吹きかけであると答えている。また同書(III, q. 71, a. 3)では、息の吹きかけは、洗礼の秘跡がもたらす恩恵への外的な妨げである「悪魔の権能を除去する」ものであると説明している。

この典礼行為は、ビザンチンやコプトなどの東方典礼においては、今日もお、洗礼の際に行なわれている。先述の通りローマ典礼でも第2バチカン公会議以前の洗礼の儀式書においてはこの息の吹きかけが行なわれていた。

第2バチカン公会議後に洗礼の典礼が整備された際、儀式書からこの典礼行為は取り除かれた。公会議後のローマ典礼においては、司教が聖香油を聖別する際にこの所作を任意で行うよう指示されている。その中で、1999年の儀式書でこの典礼の所作が明示されたことは、このような伝統的な観点からすれば非常に意義深いものとも言える。なお旧版の儀式書では、この所作については何ら指示がなされていないものの、エクソシストの間では古くから任意に行なわれていた慣習の一つであったようである。

## 11. エクソシズムの祈り (60-62 項)

ここで状況が適切と判断された場合、エクソシストは悪霊が立ち去るよう神に嘆願する祈りと悪霊に対して対象者から立ち去るよう命ずる命令の祈りからなるエクソシズムの定式文を唱える。この典礼行為は、司教ないしその代理に許可されたエクソシストによってしか行なってはならない。

エクソシズムの祈りは、旧版では短い交唱と対句、嘆願の祈り、命令の祈り

<sup>115</sup> 同上。

<sup>116</sup> *De Symbolo I*, PL 40, 628 参照。



からなる大きな3つのブロックからなっている。それぞれのブロックは「主よ、私の願いを聞き入れたまえ。私の叫びを聞き入れたまえ。主は皆さんとともに・・・」から始まり、悪霊への命令の結びの「アーメン」で終わる。新版でも神への嘆願と悪魔への退去命令の2つの形式の祈りの組み合わせから一つのブロックが構成されている。この対を成すエクソシズムの祈りは、儀式書の第2部（81-84項）に掲載されているものから選ぶことも出来る（緒言28項）。

新版のエクソシズムの嘆願の式文は、旧版の祈願の式文と対応しており、新版の儀式書の付録にある祈りをあわせると新版も嘆願と命令の祈りからなるブロックが3つ用意されていると見ることができ、旧版も新版もエクソシズムの祈りは、嘆願と命令（エクソシズム）から構成される3つのブロックからなっていることが判る。

従来、このエクソシズムの儀式は、数時間、或いは数日間かけて段階的におこなわれる場合があり、悪魔が完全に追い払われるまで続けられたと言われている<sup>117</sup>。

新版のルブリカにおいては、少なくとも一つの嘆願の祈り、若しくは緒言に従えば一対の嘆願と命令のエクソシズムの祈りをすればよいといった指示がみられる。しかも、第一義的な祈りは、被害者の為の神への嘆願の式文とされ、命令の式文の位置付けは二義的なものとされた点は大きな変化である。また新版ではエクソシストが、それまで一人称単数形で祈った箇所を一人称複数形で祈るように変更されている箇所も見られる<sup>118</sup>。

旧儀式書

umiliter majestati gloriae tuae supplico, ut hunc famulum tuum (hanc famulam tuam)

de immundis spiritibus liberare digneris.

<sup>117</sup> 旧版の儀式書の総則17項参照。

<sup>118</sup> 前出 Daniel G. Van Slyke, *The Ancestry and Theology of the Rite of Major Exorcism* (1999/2004), p. 93 参照。

## 新儀式書

humiliter maiestatem gloriae tuae supplicamus, ut hunc famulum tuum (hanc famulam tuam) ab omni infernalium spirituum potestate, laqueis, deceptione, et nequitia liberare et incolumem custodire digneris...

さらに、4bの悪魔への問いと命令が削除されたように、エクソシズムの祈りにおける悪魔に対する疑問形での問いかけは新儀式書では削除されている。

第4章で考察したように、エクソシズムの儀式には、実際の教会の歩みにおける神学的人間論、神論、キリスト論、悪魔論、天使論、聖母、聖人崇敬などが色濃く表現されている。そこで表現されている人間とは、神の似姿として、聖霊の住まう神殿である。これらのイメージは、『ゲローヌ秘跡書』にも示されている。

また、エクソシズムにおいて大天使聖ミカエルはヨハネの黙示録のビジョンを受け継いで、神に反する全てのものを打ち砕くために神から遣わされた霊的存在であり、聖人たちは地上の教会の祈りと共に天上においても祈り、神へ取りなす存在であり、聖母は主キリストへ教会の祈りを取り次ぐ第一の存在である。悪魔は、古の蛇、不浄で、欺くもの、誘惑するもの、偽り、恐怖と痛み、悲しみ、あらゆる災いを与え、病と破壊を招くものとされている。キリストは十字架の死に至るまで神に従順であった神の子であり、万物を統べ治める神の権威をもって人々に聖霊を遣わすことで平和と安息をもたらす救い主である。

新版のエクソシズムが、より簡潔になった理由の一つには、旧版にあった様々な聖書の中に出てくる象徴的な人物、悪魔や天使、神話的象徴的な動物の描写を極力整理して減らそうとしたことが考えられる<sup>119</sup>。それは、キリストを儀式の中心に置くという教会の意図の表れであると言える。

またエクソシズムの祈りでは、繰り返し述べてきた通り、悪霊はイエスの名、聖なる三位一体である神の名において追い払われるというのが中心となっている

---

<sup>119</sup> 同上 p.112 参照。

る。

エクソシズムの儀式におけるこのような神学的視点は、新旧両儀式書で、さほど大きな変更はなかったが、新版の方が黙示録に示されているような悪を駆逐する神といったイメージが少し薄れている。

エクソシズムの式文に記されている十字架のしるしを指示する箇所も極端に減少した。その上、新しいエクソシズムの祈りは以前のそれより簡潔なものとなっている。1200年もの長い間用いられてきたかつてのエクソシズムの儀式は、全体として確かに表現が煩雑であった。古くからのエクソシストは、新版のエクソシズムの祈りは、悪魔に対してあまり効果がないなどと言ったそうだが、福音書のみことばに由来する古くからエクソシズムの定式句、即ち“Exorcizote”, “Adiuro te Satan”, “Recede Satan, in nomine Patris + et Filii + et Spiritus + Sancti”等の文言は保持されている。即ち、エクソシストが命じるのは、儀式の執行者である個人としてではなく、そこに臨在するキリストの権威、父と子と聖霊の権威、キリストの教会の権威においてである。また新版のエクソシズムの特徴として、第一、第二形式の命令の式文(62, 82項)においては、教会の祈り、即ち教会に集う人々の信仰といった教会論を強調する表現が見られる。こういった視点は旧版の儀式書には見られなかったことである。

改訂版の儀式書の作成に携わったトリアッカ師は、エクソシズムの祈りの式文を聖霊論的な祈り、エピクレーシスであると説明している<sup>120</sup>。聖霊の働きを願い求める根拠は、一度、洗礼と堅信の恵みによって聖霊の住まう神殿とされた人からその恵みが完全に取られ、取り払われてしまうようなことはあり得ないという考えに立脚している。このことは教皇フランシスコもローマ控訴院への訓話の中で明言している<sup>121</sup>。旧版の儀式書において「聖霊にその場をゆずれ」と言う表現について、それが果たして聖霊がその人から全く離れてしまっているという意味であるかについては考察の余地がある。それに比べて新版の「既に聖霊

<sup>120</sup> 同上 p.95 参照。

<sup>121</sup> 教皇フランシスコ『ローマ控訴院の年始式典における訓話』(2016年1月22日)。『自発教令「寛容な裁判官、主イエス」適用のための手引き』(教友社、2016年)96頁参照。

のすまう神殿」となっているという考え方の強調は、洗礼の秘跡の恵みそのものについても明らかな見解を示していると言える。ちなみに、新版における第三形式のエクソシズムの嘆願の式文（83項）は、旧版のエクソシズムの祈り A から、命令の式文は旧版のエクソシズムの祈り A, B, C のそれぞれから文言を抽出して張り合わせて作られている。この点で、第三形式に限っては、過去の式文をかなり踏襲していると言える。

また、旧版の悪魔に対する裁きという表現は、過去、現在、未来（世の終わり）において起こるものというニュアンスがあったが、新版においては神の裁きは、あくまでも過去においてイエス・キリストによって既になされているそれを指す立場に立っていることが式文に用いられている動詞の時制から判明する<sup>122</sup>。

## 12. 感謝の祈り（63-64項）

古来より、エクソシズムが完遂した場合、感謝の祈りとして福音の歌、ベネディクトゥス、あるいはマニフィカトが唱えられてきた。旧版では最後に信仰宣言やアヴェマリア、主の祈りを唱えるように指示されている。新版においてはマニフィカトかベネディクトゥスのいずれかを唱えるようになっており、またその形式も簡略化されている。なお、旧版の英語版の儀式書では、2つの福音の歌に対しては個別の交唱が付加されているものもある。

また旧版の英語版の儀式書では、この感謝の祈りの最後に、式をおこなった場所に聖水をふりかけ、香をたき、祝別をおこなうよう式文が付加されているものもある<sup>123</sup>。

## 13. 閉祭（65-66項）

閉祭においては、新旧両儀式書とも、もはや悪霊による苦しみを受ける事の

---

<sup>122</sup> 同上 p. 108 参照。

<sup>123</sup> <http://www.sadena.com/sss/Roman%20Rite%20of%20Exorcism.html> では福音の歌の公唱および、献香が指示されている。

ないようにとの祈願がおこなわれる。

旧版の儀式書では、特に注記がされていないので祈願の後は通常の方法で式を終えるのが適当と思われる。旧版には閉祭の祝福について明記されていないが、新版では他の典礼書と同じように閉祭時の派遣の祝福（通常の年間の典礼に用いる盛式祝福）が明確に指示されている。

#### 14. 単式のエクソシズムの祈り（新儀式書の付録1，旧儀式書の第3章）

新版の儀式書の付録1には、まず悪魔が人ではなく、特定の物や場所に憑依し、悪影響が生じた場合に行なうエクソシズムの儀式が掲載されている。これは旧儀式書の第3章『サタンと墮天使へのエクソシズム』を踏襲し発展させたものである。

これは1884年に公布された教皇レオ13世作成の単式のエクソシズムの祈りで、『ローマ儀式書』第8版のエクソシズムに付加されたものである。公布当初から、司教から許可を得た司祭が一般信徒と共に行うことができる儀式とされていた。それゆえ普段エクソシストとしての経験がない司祭でも、司教の許可があればこの儀式を執行することができた。この儀式の使用範囲は、人間以外の物や場所など幅広い事物に及ぶ。儀式は大天使聖ミカエルの取次ぎを願う祈りをもって開始され、続いて聖母マリア、聖ミカエル、全ての聖人の取次ぎを願ってから詩編67を唱える。続いて悪霊に対して追放を命じ、祈願と灌水をもって式を終える。儀式そのものは非常に短いものであるが、悪霊の追放を中心にしたエクソシズムの祈りの一種であることには違いない。

#### 15. 闇の力に対抗するために信者が唱える種々の祈り（新儀式書付録2）

新しい儀式書の付録2には、まず邪悪な闇の力に対して神に助けと保護を願う5つの祈り、同じく聖なる三位一体の神に対する祈り、イエスの御名の連願、5つの十字架のしるしを伴う主への祈り、悪からの救いを願って捧げる乙女マリア、大天使聖ミカエルへ取次ぎの祈り、そして諸聖人の連願といった祈りが記されている。これらは、伝統的なカトリック教会の祈りではあるが、近年は

以前よりも馴染みは薄くなってきたものばかりである。パチカンは、こういった教会の伝統的な祈りの重要性和効果をこの機会に再確認し、現代社会に生きるキリスト者によく祈るよう促しているのであろう。

## 16. その他のエクソシズムに関する典礼行為について

エクソシズムの儀式においては、古来より聖水の他に塩、聖香油がよく用いられてきた。4世紀後半の『エウコロギオン』には、病者の為の油が祓魔の油として使われたことが記されている<sup>124</sup>。さらに『ゲラシウス秘跡書』では「エクソシズムのための聖油」(Oleum Exorcizatum)<sup>125</sup>と呼ばれる油が用いられていたことがうかがえる。また『大グレゴリオ秘跡書』に付加されたエクソシズムの祈り<sup>126</sup>には、典礼に用いるための塩と水に対する悪魔祓いの祈りが記載されている。また洗礼の際、塩を舌に触れさせるという典礼行為と、さらに司祭が唾を口と鼻と耳につけて「エファタ」と宣言する儀式が付随していた<sup>127</sup>(なお、現行のラテン語規範版の儀式書では唾はつけず親指で触れるのみである<sup>128</sup>)。

また、古来より洗礼式では、受洗者が悪霊を退けるために聖香油によって5官を刺激し、身体の主要な部位に十字架のしるしをおこなっていたという。この聖なる油の塗油によって悪魔が追い払われたという記述はアウグスティヌスの『神の国』にも見出される<sup>129</sup>。

現行の洗礼式、その他の典礼において塩が用いられることは任意とされ少なくなってきたが、洗礼式での聖香油と十字架のしるしを額等の体の部分に受けるという所作は古来の伝統の名残を伝えている。それらの典礼行為の起源は非常に古く、本来は、古代教会のエクソシズムに由来するものであることがこれまで述べてきたことから明らかである。これら一連のエクソシズムの儀式の所作

<sup>124</sup> 西脇純『古代教会における「病者の塗油」』(『南山神学』no. 25, 2001年) p. 15-47。

<sup>125</sup> 前出 *Notitiae*, vol. 35, 1999, p.165 参照。

<sup>126</sup> PL 121-847 参照。

<sup>127</sup> 前出 *Rituale Romanum*, editio octava, Titulus II, Caput. IV, VI, p. 59, 81 参照。

<sup>128</sup> *Ordo Initiatione Christianae Adulorum*, Libreria Editrice Vaticana, 1972. p. 82 参照

<sup>129</sup> 前出『神の国』(5) p. 400 参照。

は、現代においても効果的であるとエクソシスト達は語っている。

ちなみに、聖トマスは『神学大全』(III, q.71, a.2) でこれらの一連の行為を次のように説明している。

「口に塩を含ませ、鼻と耳に唾を塗るのは、耳に関しては信仰の教えを受容し、鼻に関しては信仰の教えを是認し、口に関しては信仰を宣言する事を表示する。これに対して塗油は受洗者が悪魔に対抗して戦う能力を表示する。」

経験則として、エクソシスト達の間には、人が悪霊に脅かされている兆候の一つに特異な臭気、邪気などを挙げる人がいる。その他に悪魔憑きの兆候として、儀式書に示された事例の如く、神聖な言葉、物、祈りに対する異常な嫌悪、体が異常な動きをし、異常な怪力を示し、さらには痙攣を起こしたり異物を吐き出したり、体に傷が表れることがあるとエクソシスト達は語っている。ちなみにエクソシズムには古くからの伝統として聖ベネディクトの十字架がよく用いられているというが、これについては既に述べた通りである。

## 考察

エクソシズムの執行に関する儀式書の規定(緒言)では、エクソシストが儀式書の指示に従うことが大前提となっているが、式の進行、および個別の祈りの選択などは状況に応じて適切に行われるよう司式者に委ねられている。つまり、エクソシズムという儀式が所謂 *ex opere operato* の秘跡とは異なるものであり、状況に応じて典礼規則や教会法を遵守したうえで、より相応しい選択をしてもよい *ex opera operantis* の準秘跡であることに一定の配慮がなされるべきであろう。準秘跡自体は、エクソシズムの儀式書の緒言に記されている通り執行者そして教会そのものの信仰、霊性、祈りに大きく左右されるところが大きいからである。

儀式書の検討を終えるに当たって、再度、次のことを強調しておきたい。

この儀式の執行者として選ばれる上ではそれなりの覚悟が必要だということである。それは単なる興味本位で務まる職務でもないし、例えば相応しくない者は職務を果たせないどころか、かえって関係する人を危険にさらす可能性も

高くなると考えられる。というのも、この儀式においては悪霊との関わりにおいて自らの弱い本性が明るみにさらされ、時には自らの立場、それまで築き上げた信頼関係すら危険にさらされる可能性も時としてあり得るからである。その意味でもエクソシストは、緒言に明示されている通り、生活において敬虔さ、靈的、知識的豊かさ、司牧的賢明さ、慎重さを併せ持ち、そして生涯を道徳的にも純潔に送り、さらにこの務めに関して特別に準備を重ねた聖職者でなければならない。このことは、既に帰天している御受難会の G. アモルス神父（ローマ教区エクソシスト）、イエズス会の H.ライアン神父（ロヨラ・メアリー・マウント大学教授）も強調している<sup>130</sup>。

このような心構えを促すよい事例として、第2バチカン公会議前の下級聖品の祓魔師叙任式における司教の次のような訓話の例文が参考になる。

「あなたたちに心がけてもらいたいことは、他の者たちの体から悪霊を追い払えるように、あなたたちの心からも体からも、あらゆる汚れや悪意を追い払うことである。あなたたちは、悪に身をゆだねることなく、あなたたちの務めとして他者から悪を退散させるのである。あなたたちの務めに相応しく、悪しき行いに対しては命令を発する術を学び、決して自らの権限で敵どもを解放することのないように。まさに、他者のために悪霊たちに適切に命令を下すことができるのは、あなたたち自身がそれに先立って、あなたたちの心の中で悪霊たちの様々な悪意に打ち勝つことができている場合に限られるからである。」<sup>131</sup>

とはいえ、あまりに勤勉、生真面目すぎて人間的な大らかさ、柔軟性を欠き、対象者の精神状態や問題の状況判断を誤ることがあってはならない。利己的なエリート主義、完璧主義、極端な自尊心といった融通の効かない性格もそもそも司祭にとって好ましくはなく、特にエクソシズムの任務においてはそうであ

---

<sup>130</sup> 同上。

<sup>131</sup> *De ordinatione exorcistarum*, in *Potifical Romanum*, edition typica 1961-1962, p. 23 (Libreria Editrice Vaticana, 2008).



る。エクソシストたる人物は、全身全霊で苦悩にある人々の為に、聖なる職務を遂行できるようよく準備されていなければならないが、何よりも自らが神の前では至らぬ存在であることを自認できている必要がある。悪魔はエクソシストの本性など容易に暴露できるからである。その意味で、エクソシストにとって何より必要なことは、他の役務と同様に、苦しみからの救いを求めて来る人に対して主において最善を尽くそうとする真心、愛徳だと言える。

エクソシストを選抜する司教は、執行を命じるあるいは許可する司祭の司祭職の人となりや歩みを慎重に判断した上で、任命に当たっては他人任せにするのではなく、大いなる信頼と愛をもって様々な援助と祈りを惜しんではいならない。またエクソシストを任命する司教は、自らの権威において特別な任務を与えたエクソシストに寛大な配慮が必要である。何故なら、本来、司教こそが儀式の執行に際して、キリストの模りとして教会を代表する存在だからである。この点については次章で考察したい

## 第6章 教会法制からみた祓魔式（エクソシズム）

本章では教会法制（教会法典および典礼執行規定）に基づいてエクソシズムについて検討を行う。

### 6. 1 エクソシストの任務

エクソシストの任務は現行の教会法 1172 条によって以下のとおり明確に規定されている。

「(1) 地区裁治権者から特別に明白な許可を得ない限り、だれも悪魔に取り憑かれた者に対して適法に祓魔式を行うことはできない。

(2) この許可は、地区裁治権者によって、信仰心、学識、賢明さ及び品行方正な生活において秀れた司祭にだけ与えられなければならない。」

この条項は明確に盛儀のエクソシズムにのみ言及しており、洗礼の際の小エクソシズムと呼ばれる儀式には言及していない。また、「悪魔に取り憑かれた者

に対する祓魔式」という表現は、その概念を専門用語によって正確に指し示している。

「だれも悪魔に取り憑かれた者に対して適法に祓魔式を行うことはできない」という教会法による禁止の規定は厳格かつ命令的である。規定を守らなければ行為は違法となり当事者の司祭は不服従とみなされる。エクソシズムは教会の代願によって効果が与えられる準秘跡（can. 1166）であるため、特別な許可がない状況だけでなく、教会への不服従が認められるあらゆる状況においても、執行されたエクソシズムの効果には疑いが生じることになる。このことは本来 *ex opere operantis Ecclesiae* とされる準秘跡の性質に反するからである<sup>132</sup>。

「地区裁治権者から具体的かつ明示的な許可を得ていない場合」。この許可は適法にエクソシズムを執行するための必要条件であり、書面で与えられなければならない（can. 59）、具体的かつ明示的なものでなければならない。この許可は、管轄権者からの依頼または命令に従って付与される。したがって黙示的または推定的に与えられた許可では不十分である。ただし職権に付随する黙示的な許可である場合は除外される。この儀式書の指示にあるエクソシズム執行の許可を求めることは、教皇インノケンティウス 1 世の書簡（417 年）に由来する古くからの規定である。

「洗礼を受けた後、悪徳や罪のために悪魔に取り憑かれた人々について、あなたは、これらの者に対して司祭や助祭が十字を切ることができるのか、そうしなければならぬのか心配して疑問を抱いている。この点については、司教が命じない限り、十字を切ることは適法ではない。……司教が役務者に許可を与えない限り、これらの者に按手をしてはならない。これを行うためには、司教が特権を行使して司祭や他の聖職者が彼らに按手を行うように命じる必要がある」<sup>133</sup>。

<sup>132</sup> 教皇ピオ 12 世、回勅『メディアートル・デイ *Mediator Dei*』（1947 年 11 月 20 日）in *AAS* 39 (1947) 532. Cf. B. Testa, *I sacramenti della Chiesa*, Milano 2019, 108-109.

<sup>133</sup> *Epistola XXV*, in *PL*, XX, 558.

エクソシズムの許可を与える権限を有する権威者は、教会法 134 条 1 項が規定するとおり、修道会および使徒的生活の会の上長を除く（can. 134 §2）裁判権者つまり地区裁判権者である（修道会の上級上長はエクソシズムの許可権原者ではない）。つまり教区の司教、総代理又は司教代理がこの許可を与える権限を持つが、エクソシズムの儀式書の緒言 13 項は、許可を与えるのは「原則として教区司教である」と規定していることを指摘する必要があるだろう。特別法は一般法に優先する。このことは間接的に、エクソシストの活動を監督することは司教の義務（can. 392 §2）であり、同時に司教には適切な指示と命令を与える義務があることも関連するだろう。

地区裁判権者は、事例ごとにあるいは一時的または無期限にエクソシストの任務を付与することができる。あるいは教区司教は、教区の必要性に従った特別法を規定し、この権能を特定の教会職（小教区の主任司祭、指定巡礼所の管理者司祭、ゆるしの秘跡の祭式者など）に付与させる規定を設けることができる。

地区裁判権者は、自発的にまたは要求に応じて許可を与えることになるが、許可を与える前に、申立人が祓魔式という任務を教会が行使するよう要求するに至った理由を考慮し、適切な注意を払いつつすべての要素を検討しなければならない<sup>134</sup>。

「こうした許可は地区裁判権者によって司祭にのみ与えられる」。エクソシズムの役務者が司祭であることは、司教が許可を付与する際の必須条件とされているが、この資格について特例は認められておらず免除の対象にはならないとみなされる。事実、このエクソシストたる資格は、幾世紀もの歳月をかけて定められてきた典礼と教会法の規定に照らし合わせても、教会法 149 条 2 項が規定するとおり、エクソシストという教会の任務を有効に（*ad validitatem*）遂行するための必須要件であると考えることができる。以上の理由から、この場合、

---

<sup>134</sup> Pietrus Lombardus, *Sententiarum Libri Quattuor*, IV, Dist. XXIV, n. 5, PL 192, col. 902.

教会法 86 条の規定に基づく普遍法に従って、教区司教が教会法 1172 条 2 項の条件の免除を行うことは不可能と考えられる<sup>135</sup>。

「信仰心、学識、賢明さ及び品行方正な生活において秀れていること」。教会は、数世紀もの時をかけて完成された知恵の結実として、こうした特質を提案し<sup>136</sup>、その後、1917 年の『教会法典』(can. 1152 CIC' 17) と現行の『教会法典』(can. 1172 CIC' 83) に組み込まれることとなった。また現行の教会法典は、学識の重要性を追加していることに留意する必要がある。

信仰心と品行方正な生活に関しては、霊的・道徳的生活から推測される要素であることに加えて、聖職者の義務と権利に関して規定する条文 (cann. 273-289) から引き出される指示をも考慮に入れることができるだろう。修道者については、教会法典の規定 (cann. 662-672) ならびに修道会会則および関連する特別法のすべての事項を心に留めておく必要がある<sup>137</sup>。

学識に関しては、聖霊の働きと助けによって注賦された徳として学識を実体化し支えるものに加えて、神学分野の研究はもちろんのこと、人間に関わる学問もおろそかにするべきではない。現代のエクソシストにとって科学的知識、特に医学や心理学、精神医学の知識は一定程度なくてはならないため、これらの習得は必須と考えられる。こうした目的のために、司教の指導と調整のもと、エクソシストには専門家の助言と援助が与えられねばならず、そのための専門家のチームを組織することも可能とされる。これらの要素があいまって賢明という枢要徳が育まれる。恩恵によって照らし出され支えられた賢明の徳は、聖人の経験、聖人とりわけ教会博士の著作を手がかりとすることで、エクソシストの人間的、霊的な知識を活性化するのに役立つだろう。

<sup>135</sup> Cf. 教皇パウロ 6 世、使徒的書簡『ミニステリア・クエダム *Ministeria quaedam*』(1972 年 8 月 15 日), in AAS 64 (1971) 529-534.

<sup>136</sup> Sacra congregazione del S. uffizio, Lettera circolare circa l'obbligo e la qualità de' Sacerdoti da ammettersi all'esercizio dell'Esorcista, 5 luglio 1710.

<sup>137</sup> G. Ghirlanda, *Il sacramento dell'ordine e la vita dei chierici* (cann. 1008-1054; 232-297) in *Collana Diritto Canonico* 6, Roma 2019, 367-498; F. Franchetto, *Il ministro dell'esorcismo*, 43-49.

さらに、エクソシストの任務は「教区司教の指導のもと、信頼と謙遜をもって」（儀式書の緒言 13 項参照）行われるべきであり、その際には祈りおよび断食という手段にうったえることも可能であることを忘れるべきではない（緒言 31 項参照）。

## 6. 2 司教と教区の間にあるエクソシストの任務

### 教区の牧者たる司教

教会法 369 条は、教区についての定義を行なっているが、これは公会議文書『教会における司教の司牧任務に関する教令』の 11 項を全面的に採用したものである。

「教区とは、司祭団の協力のもとに司牧すべく司教に委託された神の民の一部である。すなわち教区は、自らの牧者に堅く結ばれ、かつ牧者によって福音とミサをとおして聖霊において集められ、部分教会を構成する。そこに、一、聖、公、使徒継承的キリストの教会が真に現存し、かつ活動する。」(can. 369)

公会議による定義は、司教と、司教の司牧的配慮にゆだねられた信者との間の緊密で直接的なつながりを強調している。司祭団の活動は、協力という点において、このつながりに関わるものである。まさにこれらの原則こそ第二バチカン公会議において、調和のとれた教会論的視点に従って展開されたものであるが、本論では以下のとおり簡単に紹介することと定めるものとする。

『教会憲章』28 項は、司祭たちが「自分たちの司教とともに一つの司祭団を構成する」こと、そして「各地方の信者の集団において、自分たちが結ばれている司教をある意味で現存させる」としている<sup>138</sup>。この文章は次の『典礼憲章』41 項の文言と呼応している。まさにその原則に従う形で、『教会憲章』28 項は、

<sup>138</sup> G. Ghirlanda, *Il sacramento dell'ordine e la vita dei chierici (cann. 1008-1054; 232-297)*, *Collana Diritto Canonico* 6, Roma 2019, 367-498; F. Franchetto, *Il ministro dell'esorcismo*, 43-49.

司祭たちが「司教の権威のもとに、主の羊の群れの自分にゆだねられた部分を聖化し、統治し、自分に与えられた場所において普遍教会を目に見えるものとし、キリストのからだ全体を建設するために効果的な仕方で貢献する」と明記している。

同公会議はさらに、司教が「司祭や助祭の助けとともに、神の代理として群れをつかさどり、教えの教師、聖なる祭儀の祭司、統治の役務者、群れの牧者となって」三つの任務を行使することを確認している（LG20）。

こうした視点から、現行の『教会法典』は、三つの任務の教会論的原則を取り上げて制度面から再解釈し、司教は自らの教区にとって「ことばの奉仕職全体の指導者」（can. 756 §2）であると同時に「聖なる典礼の管理者」（can. 838 §1 および §4）であり、さらには司教には「部分教会を立法、行政及び司法権をもって統治する権能」（can. 391 §1）を有すると強調した。この意味において、司教は自らにゆだねられた群れに対しても、また、とりわけ自身の主な協力者である司祭たちに対しても監督の義務を負っていることは明白だと言える。教会法 392 条 2 項の規定は以下のとおりである。

「司教は、教会の規律、特にことばの奉仕、秘跡及び準秘跡の執行、神への礼拝及び諸聖人の崇敬並びに財産の管理について、濫用をきたすことのないように注意しなければならない。」

以上をふまえれば、エクソシズムに関する任務も、まずは教区司教の責任と配慮にゆだねられている教会職の一つであることが明らかである。もちろん司教は、この典礼・秘跡の分野に注意を払う義務があるだけでなく、教会の三つの任務を十全に行使することが求められている。

### 司教とエクソシストとの関係性

エクソシストの任務は明らかに教会職の一つである。特にエクソシストの任務は、叙階の秘跡それ自体に内在する協調関係、責任的でありかつ従属的であ

る司教と教区、司祭との関係のうちに組み込まれている。それゆえエクソシストの行う司牧的配慮は司教の配慮を表わすものでもあるため、教区司教の指示との二律背反や矛盾は想定されない。このことは、司祭叙階の儀式において、教区の聖職者と修道会所属の聖職者とに対して行われる従順の宣誓においても表現されているとおりである<sup>139</sup>。

### 6. 3 エクソシストの権限

#### 従属者、滞在者、住所不定者、非カトリック教徒に対する権限

エクソシストは独自の権限を享受する教会職であるため (can. 131 §1), 自らの職務を行使するため法律で予め定められた権限を有している。これによってエクソシストは、任命を受けた教区の従属者に対して、この職務を行使することが可能とされている。従属者とは、教区・小教区の領域内に教会法上の住所または準住所を持つ者を意味する (cann. 100, 102, 103, 107 §1)。さらに滞在者 (can. 100) に対しても、この者が教区の領域内に現時点で滞在する場合にも一定の権限が行使され (can. 136), また住所不定者に対しても同様である (cann. 100, 107 §2)。エクソシストの職務は教区司教に密接に依存して行使されなければならないため (can. 1172), 教区司教は任命書の中で、上記の場合のエクソシストの権限を特定したり制限したりすることが当然できる。

エクソシズムは、非カトリック教徒にも執行することが可能である (can. 1170)。非カトリック教徒とは、他のキリスト教派において洗礼を受けた者と、洗礼を受けていない者の両方を指す。この問題に関しては、新約聖書における実践、教会の伝統における実践<sup>140</sup>、教会法上の規定<sup>141</sup>、専門家らによる教理が既に確立している。

いずれの場合も、準秘跡が非カトリック教徒によって自発的に要求されたも

<sup>139</sup> Cf. *De ordinatione episcopi, presbyterorum et diaconorum*, Libreria Editrice Vaticana 1990, p. 60-62.

<sup>140</sup> Sacra Congregatio de Propaganda fide, *Instructio ad Ep. Scodren*, 11 settembre 1779, in P. Gasparri, ed., *Fontes VIII*, Romae 1938, 121, n. 4581, §1.

<sup>141</sup> *Communicationes* 12 (1980) 385-387.

のであること、すなわちこの者の権利と信教の自由を十分に尊重する必要がある（can. 748 §2）。さらに、任務を開始する際は、常に教区司教の指示に従わなければならないことを確認する必要があるだろう（儀式書緒言 18 項）。

注意が必要なのは、自分の所轄区域外で従属者に対してエクソシズムを行う場合である。教会法 136 条は、原則として自らの所轄区域外での行政権の行使を禁じてはいないが、問題はそれが果たして適切かどうかの判断である。その判断はエクソシストの慎重さにゆだねられる。そもそも司祭がエクソシズムを執行することは叙階権に基づくものであるが、適法性のためには司教の許可を必要とする。ただし執行権限の委任まで必要とするものではない。ただし、教区司教が公の秩序に関する理由からこのような典礼行為を禁止または制限する特別法を公布した場合は別である（cann. 13 § 2, 2°; 838 §4）。その場合、エクソシズムを執行する者も受ける者もともにその場所の法を遵守する義務を有する。そして上述した通り、エクソシズムが教会の代願を伴う準秘跡の一つであり、当然当事者の適正さが問われる典礼行為であるがゆえに、こうした明確な教会の禁止に反対する儀式の執行が果たしてどこまで有効であるのか甚だ疑問である。

### 盛儀のエクソシズムを執行する法的要件

教会法の規定は非常に明白である。盛儀のエクソシズムは、悪魔の憑依が社会通念上確実とみなされる場合にのみ行われる（儀式書緒言 16 項）。したがって、通常、いかなる盛儀のエクソシズムの使用も診断目的では認められないものと考えられる。

実際、儀式書の緒言は、「医学および精神医学の専門家に可能な限り相談し、慎重な検討を行った後」（17 項）に執行するよう指示している。この判断に際しては、まず伝統的に用いられてきた憑依の事例の基準（緒言 16 項）を利用するものとし、さらに経験豊富なエクソシストへの相談や、場合によっては医学



や精神医学の専門家の助言を仰ぐことも可能である<sup>142</sup>。こうした専門家に助言を仰ぐことを支援するのも責任者たる司教の務めである（ただし、何らかのカリスマ運動家などにエクソシズム執行の支援を仰ぐことは、まったくもって誤りであるといえる<sup>143</sup>）。

こうして悪魔の存在が確証されて初めてエクソシズムに進むことが可能となる。しかし以前から、しばしばエクソシズムが実施されない限り悪魔の存在が確証されない恐れがあるとの反論があるのも事実である。また最善のエクソシズムに関する診断は、エクソシズムを仮に実施し、専門的な治療を受けている者の反応を観察することにあるという情報を耳にすることもある。

精神的な疾患と悪霊の憑依現象とは、時に実際に見分けがつきにくいことがあるのも事実である。場合により、盛儀のエソシズムの不注意かつ時機を誤った使用は、(私自身の経験から言って)エクソシズムの儀式そのものが精神医学の分野で知られる擬似的憑依現象、トランス状態を引き起こす可能性もあるため、司祭の誤った判断がかえって危険をもたらし、解決を遠ざけてしまう可能性も指摘しておく必要がある。このようなときには、依頼者が置かれている状況や生活環境によって擬似的憑依によるトランス状態を誘発することもあることを理解し注意しておく必要がある。これは、たとえば身体的・心理的虐待を受けた経験があり、それが原因で精神的疾患を有するような身体的・心理的バランスが非常に不安定な人々に生じる。また精神的な疾患に対する儀式のもたらす一時的なプラセボ効果というものも十分考えられるため、真の憑依現象なのかそうでないのかを専門家の支援のもとで常に慎重に判断していかなければならない。

こうしたことから、エクソシストは典礼および教会法の規則を注意深く順守

<sup>142</sup> イタリア司教会議発行の儀式書 *Rito degli exorcismi*, 12 項。また G. Amorth, *Esorcisti e psichiatri*, Roma 1996<sup>2</sup>, p. 129 参照。

<sup>143</sup> Cf. F. -M. Dermine, *Mistici, veggenti e medium. Esperienze dell'aldilà a confronto*, Città del Vaticano 2002; P. M. Marianeschi, *La stigmatizzazione somatica. Fenomeno e segno*, Città del Vaticano 2000; Congregazione per la dottrina della fede, *Lettera Iuvenescit Ecclesia*, 15 maggio 2016, Città del Vaticano 2016, 22.

しなければならず、彼自身自分勝手な判断によってこの儀式を執行するようなことがあってはならないだろう。まして癒しのカリスマ運動のようなものとして儀式が執行されることはあってはならない<sup>144</sup>。エクソシズムは、まず司牧的観点から、悪霊に憑依されたとされる者と健全かつバランスのとれた関係を構築する必要がある。そのためにも教会の責任者との交わりにおいて適切な判断を仰ぐことが不可欠である。その一方で、教会の牧者は、悪魔に憑かれたと教会の扉を叩く人に対して、その状況が精神的な疾患が災いしていると容易に判断できる時であっても、「教会はあなたのくるべきところではない」などと言って冷たく門前払いするような態度を取るべきではない。もちろんこうした人にとって専門家の治療こそが重要であり、エクソシズムの儀式が有効であるとは言えない。しかし教会として人々の苦悩を受け止め、その問題と向き合い、出来る限り必要な支援を提供することは教会の根本的な任務（愛の奉仕）である。教会とは単にいつも真面目にミサに来て献金をしてくれる人だけを相手にする場所ではない。

## 6. 4 司牧上のいくつかの具体的な問題

### 信徒による私的なエクソシズム

既に見たように、新しいエクソシズムの儀式書の付録2に収録されている「闇の力と闘うために信者が個人的に用いる祈り」と題された信徒が行うことができる悪魔の力を退けるための祈りというものがある。一方で、エクソシズムの儀式書の付録1には本来のエクソシズムの儀式とは異なる教皇レオ13世の制定に由来する単式のエクソシズムの祈りが示されている。これは司教の許可を受けた特定の司祭が、一信者と、あるいは複数の信者と共に挙行することができるものと規定されている。ルブリカからも確認できるように、信者が共に実

---

<sup>144</sup> 1990年代から目だって来たカリスマ運動の中で、悪魔祓いが、所謂「癒しの祈祷集会」などと呼ばれる祈りの集いで用いられたり、通常の教会の典礼祭儀などと組み合わせて行われてきた経緯がある。こういった活動において悪魔祓いの儀式の乱用を禁じる命令を盛り込んだ文書『癒しのための祈りの集いに関する指針』（instruction on prayers for healing）を教理省が2000年9月14日付けで発行している。

施できる典礼行為は当該儀式に規定されている箇所に限られる。教皇レオ 13 世によって制定された悪魔と墮天使に対するエクソシズムの定式文や儀式そのものを信徒が実践することは許されていない。まして旧版の儀式書に記載されている悪魔への直接的な問いかけを伴う定句や悪魔の正体を知ろうとするための定式句を信徒が使用することも適法ではない<sup>145</sup>。

さらに信徒は按手を行うべきではない。なぜなら、まず按手という典礼行為は、役務的祭司職が行うものとして典礼的に認められている所作であり、それは周知のとおり受洗によって授けられる共通祭司職とは段階においてだけでなく本質においても異なるからである (LG 10)<sup>146</sup>。東方教会の祭儀における按手は、聖別に際して認められているエピクレシスの所作とされているため、司祭の特権的所作となっていることから問題はより明確である。この意味においては助祭も按手をおこなうべきではないと解される。助祭は叙階式においても、堅信式においても、また別の荘厳な聖別の祈りにおいても基本的に按手するような指示はなされていない。

エクソシズムとは別の文脈で、たとえば祈りの集会が開かれ、そこに司祭または助祭が参加している場合、信徒が主宰者となることは典礼上望ましくない。その理由は、役務的祭司職と、洗礼によって授けられる共通祭司職との本質的な違いにある (LG 10 参照)。叙階を受けた神の民のための奉仕者が参加しているのであれば、参加者たちの間では叙階の秘跡による位階制が適用されるからである (can. 846 参照)。これは存在論的な問題である。そして、新しいエクソシズムの儀式書の付録 1 が規定する悪魔の影響を退けるための信者たちの祈りの集いは、前述のとおり教区司教の承認を受けなければならず、また司教が承認した司祭のみがこれを主宰することができる。

## 修道者の立場にあるエクソシスト

<sup>145</sup> Congregazione Per la dottrina della fede, Lettera *Inde ab aliquot annis*, 1169-1170.

<sup>146</sup> P. Sorci, *Gesti e atteggiamenti nel Rito degli Esorcismi*, in M. Sodi, ed., *Tra maleficio, patologie e possessione demoniaca*, 267-268.

エクソシストの任命を受ける修道者（司祭）は、あくまでもそれが教区の教会職を引き受けることだという認識を忘れてはならない（*can. 682 §1*）。こうした職務の遂行において、修道会司祭はエクソシストとして教区司教の権威に直接的かつ排他的に従属し、その指示に従わなければならない。しかし修道会司祭としては引き続き自己の上長の権威に従属する（*can. 678*）<sup>147</sup>。

したがって上述した修道会の上長の権限は、教区司教のそれとは別であることに留意しながらも、権限の衝突や不当な干渉を生じさせないようにすることが必要である。その一方で、このことがエクソシストである修道者自身が属する会の規約が規定するその者の地位に基づいた義務を回避するためのアリバイや口実にならないように注意することも必要である<sup>148</sup>。

### 儀式を適応させるエクソシストの権限

ラテン語規範版の儀式書の緒言は、エクソシストが儀式の一般的な構造を保持するように規定しつつ、人々の状況に必要なに応じて定句と祈りを選び準備することができるとしている（34 項）。さらに典礼の規定および教区司教の指示がある場合はそれにも従うものとするとして明記している<sup>149</sup>。典礼の執行規定を注意深く読めば理解される通り、それぞれの儀式の要素を適応させる際も、エクソシストには明確に規定された範囲がある。したがって、決められた定式文に本来は全く存在しない要素を追加したり、定式文を勝手に削除したり、翻訳に変更を加えることも、また異質な合図や所作を適用させることも不適切であることは極めて明白である（儀式書緒言 37 項参照）。そして何らかの疑問が生じた際は、エクソシストはまず教区司教に相談する（*can. 838 §1*）必要がある。司教は、この奉仕職を長年行ってきた者の提案や困難に耳を傾けることによって、

<sup>147</sup> Cf. *coram Davino*, 21 giugno 1997, in *Quaderni di Diritto Ecclesiale* 22 (2009) 410-418; D. L. Salvatori, *Nota alla sentenza 21 giugno 1997 della Segnatura Apostolica sulla rimozione di un parroco religioso*, *ibid.* 419-424.

<sup>148</sup> Cf. D. Salvatori, *La rimozione ad nutum del religioso da un ufficio ecclesiastico* (*can. 682 § 2*), in *Quaderni di Diritto Ecclesiale* 22 (2009) 399-409.

<sup>149</sup> F. Marini, *La liturgia dell'esorcismo*, in *Quaderni di Diritto Ecclesiale* 27 (2014) 56-68.

より正確なガイドラインや規範を示すことができるだろう (can. 838 §4)。その際には、濫用をきたすことのないように注意しなければならない (can. 392 §2)。いずれの場合も、エクソシストは典礼そのものだけでなく、そこにおける表現や祈りの精神、ならびに神学についても熟知している必要がある。こうしてエクソシストは、自分自身のため、またエクソシズムを受ける信者のために、より意義深い霊的な富を得るだけでなく、賢明かつ一貫性のある典礼を挙行することができるのである<sup>150</sup>。

## 6. 5 教皇レオ 13 世のエクソシズムの位置づけ

教皇レオ 13 世のエクソシズムは、実際、信者個人が唱える私的なエクソシズムとしてではなく、日常的に実施可能な単式のエクソシズムとして制定されたものである。それを挙行することができるのは司祭のみである。

このエクソシズムの本文は 1890 年 5 月 18 日に福音宣教省の長官によって発表され<sup>151</sup>、教皇レオ 13 世は、当時、全ての司教にこれを実施する権限を付与した。同時にこの権限は、裁治権者から適法に許可を得た司祭にも付与されることが宣言された。また当初、毎日この式文を唱えた者には部分免償が、1 ヶ月間唱え続けた者には全免償が与えられると規定されていた<sup>152</sup>。このエクソシズムは、その後『ローマ儀式書』の別冊付録として司教だけが行うことができる他の祝福式と一緒に取り扱われたが<sup>153</sup>、1925 年の改訂の際、初めて『ローマ儀式書』の第 11 部第 3 章として正式に組み込まれることになった<sup>154</sup>。この章は最初の 2 章 (*De exorcizandis obsessis a daemónio, chap. I; Ritus exorcizandi obsessos a daemónio, chap. II*) とは区別されており、盛儀のエクソシズムとして解されるも

<sup>150</sup> *Notitiae* 35 (1999) 177-222; P. Sorci, *Gesti e atteggiamenti nel Rito degli Esorcismi, ibid.*, 243-273; F. Marini, *La liturgia dell'esorcismo*, 56-68.

<sup>151</sup> Cf. ASS 22 (1890) 743-746.

<sup>152</sup> Cf. ASS 22 (1890) 747.

<sup>153</sup> Cf. *Ephemerides Liturgicae* 37 (1923) 391.

<sup>154</sup> Cf. *De nova editione typica ritualis romani, in Periodica de re morali, canonica et liturgica* 14 (1925) 86; *Ephemerides Liturgicae* 39 (1925) 345.

のではない<sup>155</sup>。それゆえ第 11 部の第 1 章と第 2 章に関する典礼の執行規定は、当時の（旧）教会法 1151 条に従わなければならないものの、第 3 章のレオ 13 世のエクソシズムについては、特別にエクソシストとして認められた司祭でなくとも儀式書の使用を許可された司祭であれば随時実施可能であるという教皇レオ 13 世の挙行条件が適用されるものと解される。

これまでの検討から、いわゆる教皇レオ 13 世制定のエクソシズムは、個別の小エクソシズムとしても、また盛儀のエクソシズムの一種としても設定されていない。逆にこれは公的な単式のエクソシズムであり、許可を受けた司祭だけがいつでも執行できるものであったことは容易に理解される。この方針は、現行の 2004 年版の儀式書においても変わらず、付録 1 における教皇レオ 13 世に由来するエクソシズムの本文を内包する祈りは、依然として厳格に司祭にのみ執行が認められている。

## 6. 6 盛儀のエクソシズムにおける命令ならびに嘆願の式文

エクソシズムの儀式書の緒言には次のような規定がある。（エクソシズムの祈りの）「命令の定式文は、その前に嘆願の定式文を用いない限り使ってはならない。しかし命令の祈りを使用しなくとも嘆願の定式文を用いることは可能である」（28 項）。儀式書の中には、「その後、エクソシストは盛儀のエクソシズムの嘆願の祈りを唱える（61 項）。この者が適切と考える場合には命令の祈りを加える（62 項）」とする典礼規定がある（60 項）。

前の章でも説明した通り、命令の定式文より嘆願の定式文を優先して使用すべきだというこの規定は意外である。それは我々が、本来、エクソシズムの本質は命令的な形で表現されるものだという古典的な見方にとらわれているからだろう。当然、1614 年の旧版の儀式書にはこのような指示が存在しない。

こうしたエクソシズムに関する考え方の変化は、第 2 バチカン公会議の神学的な考え方によるものと考えられる。この考え方は、主に教皇ピオ 12 世の回勅

---

<sup>155</sup> Cf. *Ephemerides Liturgicae* 39 (1925) 385.

『メディアトール・デイ』<sup>156</sup>の神学から引き出されたものであり、教会による仲介と祈りをより強調することで、準秘跡とその作用の理解を変化させているといえる。こうした意味で『典礼憲章』60項の内容は意義深い。

「さらに、聖なる母としての教会は準秘跡を制定した。これらは聖なるしるしであり、主に霊的な効果を有する秘跡に似たものであり、教会の仲介によってそれが得られる。準秘跡によって人々は秘跡の主たる効果を受けとることができ、生活のさまざまな状況が聖化される。」(SC60)

したがって新しいエクソシズムの典礼は、嘆願の定式文の優位を規定することによって、教会による仲介の次元をより強調しようとしていると理解することができるだろう。こうした意味で、新版の儀式書において、エクソシストは単に悪魔に直接対決する者として理解されるべきではなく、直接的対決が行われる場合（命令の定式文を使用する場合）であっても、そこでは全教会の存在と行動が共にあることが、あらゆる場合において強調されなければならないと考えられる。エクソシストがキリストの名において行動するのは事実だが、それは個人としてではなく教会の名において行動する限りにおいてなのである。

公会議で決定された神学的考察がエクソシズムに適用された結果を徹底的に見極めようとするならば、準秘跡としてのエクソシズムの効力には、公会議が明示するように、またこれまでの神学的考察において明らかにされたように、信者が「秘跡の主要な効果を受ける」準備をするという目的も含まれていると言わねばならない。そもそも秘跡の主要な効果とは、キリスト信者としての相応しい歩みを活性化し、その人を神との親密な一致によりいっそう近づけることにあるが、それは同時に悪魔の働きを遠ざけることでもある。このことは言い換えれば、的確に秘跡的恩恵を受け取ることができるようにするための障害（*obex gratiae*）の除去と言うことができる。この役割は受洗者にとっては主に

---

<sup>156</sup> 教皇ピオ12世、回勅『メディアトール・デイ *Mediator Dei*』（1947年11月20日）、in *AAS* 39 (1947) 532.

ゆるしの秘跡が担っていると言えるだろう。秘跡的な恩恵は、神の側の無償の恩恵であり人間の功によるものではないが、機会的・自動的に効果をもたらすような呪いの類のものでもない<sup>157</sup>。それは間違いなく信仰に基づく神と民との応答関係によるものであるから、準秘跡であるエクソシズムの有効性のためには当事者の信仰の度合い、教会法 1166 条の定義にある通り教会の代願の働きが秘跡のそれに比べて極めて重要となる。この意味において、当事者の信仰告白とそれに対する恩恵によって新たにされたキリスト信者の信仰生活は、当然、悪魔による有害かつ有毒な働きかけに対する極めて効果的な力を伴うものとなるはずである。このような視点でエクソシズムそのものを秘跡的生活、特に洗礼を基礎とする信仰と恩恵との密接な関係から考慮することのうちに、エクソシズムの展望そのものがより広汎かつ体系的に意義あるものとなる。エクソシズムそのものもまた単なる典礼的慣習でもなければ迷信や魔術の類でもない。儀式書の緒言さらには新しい典礼が規定するエクソシズムの定式文の内容も、『典礼憲章』60 項の示す神学的考察を反映させているとみなされるべきだろう<sup>158</sup>。

## 第 7 章 エクソシズムの現代的意義

### 7. 1 現代日本におけるエクソシズムの適用について

#### 東洋の悪霊に関する理解

まず『新カトリック大辞典』の宗教学上の悪霊に関する佐々木宏幹氏の説明が大変明解なので少々長い以下に引用する。

「文明社会では、霊的存在は人間や社会に福利・安寧をもたらす神・守護神、守護霊、祖霊などと不幸・災厄を及ぼす生霊、死霊、怨霊、悪霊、妖怪などの個

<sup>157</sup> 教皇庁国際神学委員会『秘跡による救いの営みにおける信仰と諸秘跡の相互関係性』(La reciprocità tra fede e sacramenti nell'economia sacramentale, 2020) 65-71 項参照。

<sup>158</sup> A. M. Triacca, *La preghiera della Chiesa nell'esorcismo "maggiore"*, in M. Sodi, ed., *Tra maleficio, patologie e possessione demoniaca*, 217-241.



別の語で区別して捉えられることが多いが、開発途上社会では、一つの語が霊的諸存在の全てを意味することが少なくない。例えばビルマのビルマ族やカチン族ではナット (nat) という語が守護神、守護霊、祖霊、死霊、魔女、妖怪などを意味し、台湾高砂族のツオウ語のヒツー (hitsu), パイワン語のツマス (tsumas) は神、精霊、死霊、祖霊、霊魂、霊鬼、妖怪などを指す。これは、こうした社会の霊的存在は人間や社会の対応次第で善霊にも悪霊にもなりうる両義的性格を備えていることを意味しているだろう。

一般には、善霊と考えられている守護霊や祖霊が、人間や社会の供養不足やタブーの違犯に怒り、祟りや障りをもたらす存在に化すという事例は少なくない。インドのヒンドゥー社会のように、パンテオンが明確に組織されているところでは、上層の諸神は全善的性格を、中層の諸神・諸霊は善悪の同義的性格を、下層の諸精霊は全悪的性格をそれぞれ有しているとされる。ここでは悪霊の概念が明瞭であり、諸悪霊は一定の住みかを持たず、自由に浮遊し、常に飢餓状態にあって、人々を病気にさせる機会をうかがっていると信じられている。彼らは常に悪意的、破壊的であり、守護的役割は皆無である。悪霊は殺害されたり、自殺したり、幼少時や思春期に死亡したりした者の死霊であるとされていることが多いが、その出自は社会、民族により一定していない。日本では古代から物の怪、御霊、怨霊など、祟りをもたらす疫神や死霊、生霊、邪気などへの信仰と儀礼が多くみられた。これらの存在は、人間に死を、社会に不幸・災厄をもたらす原因として、恐怖の対象であった。悪霊は、人間に憑入（体内に入ること）、憑着（身体のある部分にはりつくこと）し、憑感（外側から影響を与えること）を与え、心身異常を来させ、また社会に天変地異をもたらすものとされた。悪霊を取り除くために、神道の祓い、密教流の加持祈祷、陰陽師やかんなぎ、巫女、行者などのト占や祓魔儀礼が行われた。この伝統は、現代の我が国各地にみられる祟り、障り、憑き、知らせなどの広義の憑依現象と、これらへの民間職能者による対抗儀礼に受け継がれている。」<sup>159</sup>

<sup>159</sup> 前出『新カトリック大辞典』91頁。

この佐々木氏の東洋における悪霊に関する分析は、既に考察した聖書の世界における悪霊や異教の神々の概念とさほど大きくは異なっていないように思われる。

### 日本人の宗教観

上に引用した佐々木宏幹氏の説明にあるように、日本では古来より厄除け、お払い、晴れと穢れ、縁起にまつわる社会的習慣、原始的な祖霊信仰が盛んであり、現在でも社会・文化の根底に深く根をはっている。崇り神、地縛霊、人に危害を及ぼす狐などの動物の霊があるとされているが、これらは、あくまで民間信仰の域を出ない。しかし日本社会において、とりわけ大規模な製造業、建設業などの会社では安全祈願という祭事がことのほか重要視されている。何かしら霊的な存在が災いをもたらさぬように様々な方法で従業員一同祈願する文化が日本には古来より存在するのも事実である。これまで見てきたようにカトリック教会のエクソシズムの儀式書でも、教会は人だけでなく一定の場所や物に悪霊が憑依し悪影響をもたらすことを認めており、それに対処する措置としての典礼を設けている。教会の重要な務めは愛徳の業であり、また人々のために祈ることでもある。教会が真の宗教性を失い科学時代に相応な、ただ要領よく業務をこなすだけの宗教組織になってはならない。それゆえ他にもないキリストの教会こそ、真の意味で悪霊の働きから人々を守り、解放する任務を遂行できる存在であると主張すべきではないだろうか。

新版のエクソシズムの儀式書においては、非キリスト教徒に対してもエクソシズムを行なえることが明示されているが、一定の秘跡に関する神学ならびに教会法の規制はともかく、教会の祈りにおいてもたらされる神の恩恵は、御心に相応しい生き方をしている誠実かつ賢明な人間であれば、仮に洗礼を受けていなくとも有効に働くものと考えられる (LG16, GS22 参照)。神の恵みは法的規制に縛られるようなものではない。恩恵は秘跡に限定されない (*Gratia non alligatur sacramentis*)。

カトリック教会が、日本の民間信仰や新興宗教がやっているように、「悪魔祓いをお願いします」と看板を掲げて全く信仰と関係の無く無闇やたらに人を呼び込むことは決して適当ではない。それは宣教と程遠くかえって混乱を招く迷惑なものである。しかし困難な状況に直面している全ての人が、神に助けを求めるのを教会の人間が妨げてはいけない。もちろん精神的な病気は専門家の治療に委ねられる分野ではあるが、もし自らの生き方において精神的な飢え渴きを覚えている人なら誰でも教会は救いの手を差し出す用意があることを広く社会に示す必要がある。

## 7. 2 祓われた悪魔・悪霊の行き先と浄化・成仏という概念

すでに神学的な分析をしてきた通り、悪魔・悪霊という存在は、善や正義の欠如状態をもたらす人格的な存在、神の被造物でありながら神の意思に徹底的に反対した存在者とされている。それらは、もともとは神が善なるものとして創造されたものなのであって、神が初めから悪なる存在者として創造したわけではない。あくまでも被造物の側の自由意志によって悪に墮したに過ぎないが、ただ徹底的に、つまり回復不能なまでに彼らは悪なのだと考えられる。

教会が、キリストの権威によってこの悪魔・悪霊に支配された人、あるいは物や場所からそれらを追い払うというのがエクソシズムであることは了解されるが、その後、悪魔・悪霊はいったいどこへ行くのだろうか。別の場所を探して彷徨うのであろうか（ルカ 1 1:24-26 参照）。結果的には地獄の炎に投げ込まれるのだろうか（マタ 25:41 参照）。ともかくエクソシズムそのものは悪魔・悪霊を追い払うのであって直に滅ぼす・消滅させる手段でないことは確かなようである。

いっぽう、日本の伝統的な宗教観、特に仏教、神道の世界においては、人に害悪をもたらす霊の浄化、怨念を持った魂の成仏といった概念があることはよく知られている。これは日本における一般的な仏教的宗教観念であることは確かである。おそらくヨーロッパ的なキリスト教の神学、悪魔論とは一線を画す考え方もかもしれない。とはいえ、悪い働きをする諸霊が祈りによって浄化され

ていく（滅失されるわけではない）という概念に対しては、あらゆる被造物の救いを望む神の意思という観点からすれば、つまり善悪二元論に帰着させないキリスト教としては、一定の理解を示すべきではなかろうか。神の愛はいかなる世の罪悪よりも偉大なのだから。

### 7. 3 エクソシズムと精神医学

本稿では、その目的からエクソシズムの儀式の実践上の具体的な問題についてはほとんど取り扱わずにきた。しかしエクソシズムの現代的意義について若干でも考察を行なう場合、精神病理学との関係性について触れずにおくことはできない。

WHO（世界保健機構）が出している『国際症病分類』（通称ICD）の中に「トランスならびに憑依障害」という項目がある<sup>160</sup>。これには「自己同一性の感覚と十分な状況認識の両者が、一時的に喪失する障害。症状によっては、あたかも他の人格、霊魂、神あるいは力に取り付かれているかのように振舞う。……ここには不随意的か意図しない、かつ宗教的ないし文化的に受容される状況を逸脱して（あるいはそれらの状況の延長として）生じ、日常生活行動の中に侵入するトランス状態のみを含めるべきである。幻覚あるいは妄想を伴う統合失調症性あるいは急性の精神病、あるいは多重人格の経過中に起こるトランス状態をここに含めるべきではない。トランス状態が、何らかの身体的障害、あるいは精神作用物質の中毒と密接に関連すると判断されるならば、このカテゴリーを使うべきではない」（F44.3）と書かれている。また2014年のアメリカ心理学協会発行の『精神疾患の診断・統計マニュアル 第5版』（通称DSM-5）においては「特定不能の解離性障害」という項目が300.15に記されている。第5版は完結な書き方になっているが、古い版の改訂第3版（DSM-3R）の同項では、「当人が不意にトランス状態に陥り、そのため臨床医学的意味を持つ疾患や機能障害を受ける場合」があり、また「優勢な障害が解離性症状、すなわち同

---

<sup>160</sup> 『ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン—』（融道男、中根允文、小見山実訳、医学書院、2013年）p. 166-167 参照。

一性、記憶、または意識の正常な統合機能の障害、ないし変化であるが、特定の解離性障害の診断基準には当てはまらないもの」と記されている<sup>161</sup>。

これは、通常は日常生活を普通に送れている人が突如として陥る疾患も含まれることを示している。現代日本の精神科医療の見地からは、所謂「悪魔憑き」というものは、統合失調症、解離性同一障害、ヒステリー、祈禱性精神病、憑依型感応精神病と言われるものとして診断されるだろう<sup>162</sup>。それらの精神性疾患は、一定の割合で、たとえば以前に受けた様々な悲劇的な体験（性的虐待など）に原因がある。すなわち人間が、虐待や疎外などで極端に身体・精神を傷つけられるような異常な嫌悪すべき体験をした場合、自らの人格を正常に保つため、自らを保護するために、あたかもその悲劇は別の誰かのものとするために心身の統合が乱れ、人格が分裂し不安定になるものと説明される<sup>163</sup>。

実際、性暴力の被害にあった人、風俗業で長らく働いてきた人々が、後年になって解離性障害、多重人格障害などの精神疾患を負うようになることが報告されている<sup>164</sup>。実際、私自身のエクソシズムの経験から言えることは、儀式を希望する人がトランス状態となった際に、本人とは全く別の人格が口にする言葉というものは、往々にしてその人が受けてきた傷に起因する激しい怒りや悲しみ、苦しみの経験に依拠する深層心理によるものであったりする。

かつては医学が十分発達していなかったため、確かにある程度は精神疾患と悪魔憑きとは混同されていたであろう。しかし近年は明確に整理・区別されるようになってきた。憑依現象と精神性疾患との関係性については、最近多くの精神科医が臨床経験からの知見をまとめているのでそれらを参照すべきであるが、一般に憑依状態というのは、主に1) 人格変換体験、2) 憑依者の神秘的、

---

<sup>161</sup> The American Psychiatric Association(ed), "Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (Third Edition Revised)", 邦訳は高橋三郎訳『DSM-III-R, 精神障害の診断・統計マニュアル』（医学書院, 1988年）参照。

<sup>162</sup> 前出『憑依の精神病理』第7章を参照。

<sup>163</sup> 赤木ホスピタルクリニックのサイトで『解離性同一障害』の原因が解説されている。  
<http://www2.wind.ne.jp/Akagi-kohgen-HP/DID.htm> その他に  
<http://f17.aaa.livedoor.jp/~etsubu/did.html#病因> というサイトでの説明もある。

<sup>164</sup> 森田ゆり『子供への性的虐待』（岩波書店, 2008年）p.18-19参照。

宗教的性質、3)内的異常体験による言動異常が組み合わさった状態だという。これは確かに新版のエクソシズムの儀式書の緒言に書かれている悪霊の憑依についての記述と酷似している。

今や従来の悪霊の憑依現象は、かなりの程度で科学的に診断することができるものとなった。つまり悪霊を追い払うことの大半は、実際のところ精神的疾患の治療と置き換えることができるまでに至っていると言える<sup>165</sup>。勿論そうでない可能性、つまり何らかの霊的な影響があることも教会に生きる人間としては了解しておく必要がある。その意味でケースごとにエクソシストが、専門家の協力のもとで、真にエクソシズムが必要な状況かどうかを識別することは、当事者を的確な医療の場へ導くと言う別の意味での重要性を持つとも言える。しかしそれでもなお後天的な精神性疾患をもたらす原因の根源には、やはり人間を介してもたらされる悪魔的な力を感じずにはいられない。

精神的疾患というものと福音書に出てくる悪霊憑きのエピソードとは酷似している。しかし両者を混同してはいけない。ただ、もし悪霊でなく、それとよく似た解離性障害などの精神的疾患に苦しむ人がイエスの元を訪れたとしたら、イエスは間違いなく相手の痛みを理解し、慈しみをもって辛抱強くその人と向き合い、原因となる囚われからその人を解放しようと努めたであろう。

もし現代に生きるキリスト信者があまりに理性的、知的な偏重に陥り、教会が単なる宗教施設ないし聖書などを勉強するカルチャースクールのような存在に墮し、信仰者が教会において霊的な癒し、救いの体験をしなくなったとしたら教会は真のキリストの教会ではなくなるのではないだろうか。

#### 7. 4 エクソシズムの可能性

キリスト信者がエクソシズムという儀式について学び、理解を深めることは、何か恐ろしいことでもなければオカルト的な考えに導かれるどころか、むしろ自己の内に、そして共同体、さらに世の中に蠢く悪の働きを良く認識し、それ

---

<sup>165</sup> 前出『憑依の精神病理』第8章 p. 124-125 を参照。

によって正しい霊的な識別へと導かれ、善なる神と聖霊の働きの一層寄り頼む生き方、霊的な成長につながるものとする。逆説的だが、聖なる生活を深めるためには、どうしても悪を正しく認識する力が必要である。教会において聖霊の働きを大切にすることと、悪魔の働きから守られるように祈ることとは実は表裏一体の関係である。

我々人間は、皆、自らが神の前では等しく弱く貧しい者であるという認識を忘れてはならない。神を神と認めることは、命を与えられ生かされている人間存在として自らを受け入れて生きることにもつながる。人が神のようになろうという意識、「エゴ」こそが、悪魔の誘惑の始まりである。悪へ傾いていることに気がつかないことは不信仰のなせる業であるから、信仰によって我々は自らが本当に神の望みの器となっているのか常に神と正しく対話する祈りが必要とされるのである。

#### 7. 5 聖霊、天使、諸聖人への祈り

新版の儀式書の付記に見られるように、エクソシズムの儀式の改訂は、エクソシズムという儀式の重要性と同様に、希薄になりつつある教会の伝統的な祈りの提示の機会ともなるものであった。近年の公文書を見ていると、教会は、天使や諸聖人の働きについて、また悪魔、悪霊のことをあまり語らなくなったように思われる。これについては既に公会議後の典礼刷新を主導した専門家の方針を確認した際に触れた。勿論、ある程度は科学・情報社会を生きる人には理解しにくい迷信的なものとみられるからであろうが、しかしこれらの霊的な存在に対する祈りは、時代と共に古臭くなるような代物ではなく、カトリック教会の大切にしてきた伝統的な信仰の祈りであることを忘れてはならない。いつの時代もそうであったが、特に現代人には祈りが必要である。人には気づきにくい闇の力のはたらきを識別し抑止するには祈り以外の手段はありえないからだ。自らのよからぬ態度を自分の都合で勝手に是認してしまう自己正当化も、ある意味で祈りの不足から悪の誘惑を受けているといっても言い過ぎではなからう。現代人は目に見えるもの、簡単に感覚で気づくものには手っ取り早くそ

の価値を認めようとするが、見えないものにこそ教会の信仰の深い価値がある。カトリックの信仰の恵みは、目に見えない神の恵みを目に見えるしるしによって表そうとする。すなわち秘跡において、例えば水や油の上に聖霊の働きが宿るよう嘆願するように、悪の働きから保護されるように祈るのも同じことである。特に信仰の内に教会を守り支えている諸聖人と共に神に祈りを捧げることは、この上ない助けとなるのである。日々の祈りにおいて、自己ならびに家族、社会、世界の善悪への傾きを識別することは非常に意義深い信仰の態度だと言える。今日、教会が聖なる伝承として語り伝えてきた祈りの伝統の価値を再認識する必要があると思われる。第二バチカン公会議は、「今日化」といわれた典礼刷新を前面に打ち出した。これには積極的な典礼への参加などを条文に盛り込んでいたが、『典礼憲章』は決して典礼や祈りそのものを単純化すればそれでよいなどとは述べていない。まして祈ることを減らす、ないしやめてよいなどと教会が言ったことは一度もない。カトリックの信者は、みことばの勧告を、さらに公会議の精神を、どれほど正しく生きられているか常に振り返って確認すべきである。歴史的に、みことばそして公会議の勝手な解釈というものは常に教会を悩ませてきた。現代に生きるキリスト信者は、長い歴史を経て育まれてきた多くの教会の伝統をいとも簡単に拒絶するほどの立派な資格など持ち合わせてはいない。

エクソシズムは、被造物から悪の支配を退ける教会の聖なる祈りの務めなのである。それは、苦しみあえぐ人々と被造物の為に自らを捧げ尽くし悪を打ち滅ぼしたあの十字架のキリストの愛の業を何時の時代も教会が自ら示すことなのである。何時の時代の人々も神の子の愛においてこそ真の癒しを得られるのだということを忘れてはならない。

## おわりに

準秘跡の中でも特異な規定を持つ独特な教会の伝統的典礼行為であるエクソシズムは、これまで日本の教会においては殆ど知られていなかった。現実に日本において司教から許可を受けてエクソシズムを執行した事例は、私の知る限



りではこの 150 年のうちほんの僅か<sup>166</sup>、どれも半世紀以上も前のことである。現代の日本の教会において、この儀式書をそのまま適用するような機会がどれほどあるのかは判らない。おそらくは殆ど出番はないかもしれない。しかし、本文で長々と論じてきたように、エクソシズムが、人が神の道に生きるための、そして救いの恵みを与える秘跡に人を導くための重要な教会の典礼行為であることは明らかである。エクソシズムは呪いでもなければ精神安定剤の代わりでもなくまさに信仰の行為である。

それゆえ現代社会において、キリストの祭司職を生きる全ての者は（キリスト信者であれば皆、何らかの仕方ですの務めを負っている）、それぞれの立場において、ある意味でそれぞれが救いの助け手として悪を退け善に生きる役割を大なり小なり担う者であると言える。そしてその力の源は、その人の能力や功ではなく主イエスの無償の愛である。教会の任務の遂行の為には、それが特別な職務であれ日常的な信仰生活においてであれ、いつも目を覚まして恵みを祈り求め続けなければならないのである。特に盛儀のエクソシズムの任務を遂行すべく招かれた聖職者は、特に神と隣人への愛を深め、知的、霊的、人間的、司牧的な面で相応しく準備されている必要がある。それを支援する教会の共同体もまた程度の差こそあれ類比的には同じことが言えるだろう。

いかなる時代、社会にあっても、真の人間の癒しは、物理的手段だけでなく信仰の結果与えられる霊的な賜物によってこそもたらされるということを忘れ

---

<sup>166</sup> たとえば次の長崎の事例を参照。長崎県外海町の明治 13 年の出来事としてド・ロ神父による悪魔祓いが記録されている。これは伝説の域を出ない言い伝えの類かもしれないが事の次第は次のとおりである。娘が奇妙な病に罹った 15 歳になるナセという漁師の娘が、家に居ながらにして漁に出ていた父親とその仲間たちがどのような様子であったかその一部始終を言い当てるようになった。つまり家にいながら、遠方で起こっていることをさも自分が現場で見ているかのように話すようになったという。そこで村の人々は当時出津にいたド・ロ神父を呼ぶことにした。娘は荒れる波の中こぎ悩む神父の様子の一部始終を面白がりながら語った。しかし神父が港に着くともはや自分の居場所がないと言って全身着物を被った。娘の様子を見た神父は皆に祈るように指示し、聖ベネディクトのメダイを娘の目と口、鼻に当てて祈ったところ、娘は突然倒れた。同時に娘の体から黒い影のようなものが出て村人たちの間を通り抜けていき娘はすっかり元通りになった。こうして彼女の一家は洗礼を受けたという」（外海町役場『外海町誌』[1974 年 10 月 1 日] p. 611-612 参照）。

てはならないだろう。教会は今日でも霊的存在を認めており、中でも数多くの悪霊とその総体とも言うべき悪魔の存在をはっきりと認めていることを改めて知っておく必要がある。そのため我々はそれらの働きから身を守るよう、また人々を守り、世界を守り、聖化の恵みが実現されるよう絶えず目覚めて祈るよう勧告されているのである。(了)

## The Rite of Exorcism in the Catholic Church

Noboru TANAKA

The author, a diocesan priest and canon lawyer had been chemical engineer before entrance of major seminary and studied about exorcism as one possibility for contribution in the field of spiritual care in the Catholic Church during the seminary days. This article was written based on the author's studies and pastoral experience especially as mission of official exorcist.

Starting from an introduction to the rite of exorcism in the Catholic Church (chap. 1), the author examines the rite of exorcism comprehensively from wide viewpoints. In the first part of the examinations, the author studies about theological meaning of Satan, evil spirits and Jesus' exorcism by biblical analysis (chap. 2). The second part is the study of the historical transition of the rite of exorcism (chap. 3). In the third part the author examines ecclesiastical dogmatic documents on demonology (documents of Councils, Holy Fathers and the Holy See, including Catechism of Catholic Church) (chap. 4). The fourth part is analysis of the liturgical book of exorcism part by part with comparative study of the older Roman Rite (chap. 5). In the fifth part the author studies the rite of exorcism from the canonical perspective (chap. 6). In the sixth part considering the contemporary meaning of the exorcism especially in the Japanese culture and society the author brings to the close (chap. 7).

This study shows the importance of the rite of exorcism in the Catholic Church today in the new light. Making these theological, liturgical, canonical and pastoral foundations clear is important for understanding an authentic ecclesial rightness that avoids possible misunderstanding and abuse on this rite and reinforcing catholic faithful ethically and spiritually.